

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第 四 冊

財田古墳群
四ツ塚2号墳

1987.10

香川県教育委員会
日本道路公団

正 誤 表

| 頁 数 | 誤 | 正 |
|--------------|---------------|---------------|
| 挿 図 目 次 第31図 | (第33図 - 23) | (第36図 - 23) |
| P 3 3 第31図 | (第33図 23) | (第36図 - 23) |

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第 四 冊

財田古墳群
四ツ塚2号墳

1987.10

香川県教育委員会
日本道路公団



財田 2 号墳出土遺物



四ツ塚 2 号墳出土遺物

例 言

1. 本書は四国横断自動車道建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査報告書第四冊である。
2. 本書に収録したのは、1983年から1984年にかけて調査を実施した、香川県三豊郡豊中町に所在する財田古墳群と四ツ塚2号墳の二遺跡である。
3. 調査は、日本道路公団高松建設局の委託を受けて、香川県教育委員会事務局文化行政課調査三係（善通寺連絡事務所）が実施した。
4. 発掘調査は財田古墳群を大山真充・池内右典・片桐孝浩、四ツ塚2号墳を真鍋昌宏が担当した。
5. 調査に要する経費は、日本道路公団が負担した。
6. 調査にあたっては、下記機関の指導や援助を得た。記して謝意を表したい。
日本道路公団高松建設局 同・善通寺工事事務所 香川県土木部横断道対策室
豊中町横断道対策室 共同企業体 地元自治会 地元対策協議会
7. 出土品の整理は、善通寺連絡事務所職員が担当した。
8. 本書の作成に当っては、文化行政課職員をはじめ、調査に参加した調査員の助言を受けながら、以下のように分担執筆した。また、校正作業では横田周子の協力を得た。
I-1……………渡部明夫（調査三係文化財専門員）
I-2, II……………片桐孝浩（ 〃 技師）
III……………真鍋昌宏（ 〃 主任技師）
9. 本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。
 - (1) 挿図の縮尺は、掲載の図内にスケールで示した。
 - (2) 方位は、国土座標第IV座標系の北を表わす。
 - (3) 水平基準線の数値は、海拔高を示している。

10. 調査組織は下記の通りである。

昭和58年度

総括 課 長 遠藤 啓
主 幹 林 茂
副主幹 松本豊胤
庶務 係 長 下河芳樹
主 事 酒井幸子
主 事 前田和也

調査 善通寺連絡事務所
所 長 石塚徳治
係 長 伊沢肇一
財田古墳群 主任技師 大山真充
〃 池内右典
嘱 託 片桐孝浩

昭和59年度

総括 課 長 遠藤 啓(～11.25)
磯田文雄(11.26～)
主 幹 林 茂
松本豊胤
課長補佐 中村 仁
庶務 係 長 下河芳樹(～5.31)
宮谷昌之(6.1～)
主任主事 酒井幸子
主 事 前田和也

調査 善通寺連絡事務所
所 長 石塚徳治(～4.30)
入江 久(5.1～)
係 長 伊沢肇一
四ツ塚2号墳 主任技師 真鍋昌宏

昭和62年度

総括 課 長 廣瀬和孝
課長補佐 高木 尚
副主幹 小原克己
庶務 係 長 宮谷昌之
主任主事 前田和也(～5.31)
主 事 松下由美子(～5.31)
主 事 三宅浩司(6.1～)
主 事 水本久美子(6.1～)

整理 善通寺連絡事務所
財田古墳群 技 師 片桐孝浩
四ツ塚2号墳 主任技師 真鍋昌宏

目 次

| | | |
|-----|------------------|----|
| I | はじめに | 1 |
| | 1. 調査の経緯 | 1 |
| | 2. 遺跡の立地と環境 | 8 |
| | (1) 地理的環境 | 8 |
| | (2) 歴史的環境 | 9 |
| II | 財田古墳群 | 13 |
| | 1. 調査の経過 | 13 |
| | 2. 調査の方法 | 14 |
| | 3. 遺構について | 16 |
| | (1) A～H・L・Mトレンチ | 16 |
| | (2) I・Jトレンチ | 18 |
| | (3) Kトレンチ(財田2号墳) | 19 |
| | 4. 遺物について | 27 |
| | (1) 玄室内床面直上出土遺物 | 27 |
| | (2) 墓壇内埋土遺物 | 28 |
| | (3) 周溝内出土遺物 | 30 |
| | (4) SK01出土遺物 | 30 |
| | (5) Kトレンチ耕作土出土遺物 | 33 |
| | 5. まとめ | 43 |
| III | 四ツ塚2号墳 | 47 |
| | 1. 調査の経過 | 47 |
| | 2. 調査の成果 | 55 |
| | (1) トレンチ部の概要 | 55 |
| | (2) 土層 | 55 |
| | (3) 遺構 | 59 |
| | (4) 遺物の出土状況 | 59 |
| | 3. 遺物について | 68 |
| | 4. まとめ | 74 |

挿 図 目 次

| | | | |
|----|--------------------------------------|------|---------------------------------|
| I | はじめに | 第18図 | 耳環実測図（実物大）……………28 |
| | 第1図 | 第19図 | 耳環……………28 |
| | 四国横断自動車道埋蔵文化財 包蔵地（善通寺～豊浜間）…………6 | 第20図 | 財田2号墳玄室 床面直上遺物実測図……………28 |
| | 第2図 | 第21図 | 鉄斧……………28 |
| | 発掘作業風景 （財田古墳群）……………7 | 第22図 | 鉄釘……………28 |
| | 第3図 | 第23図 | 財田2号墳墓壙内出土土器 実測図……………29 |
| | 整理作業風景……………7 | 第24図 | 財田2号墳墓壙内出土土器…………29 |
| | 第4図 | 第25図 | 財田2号墳周溝内出土土器 実測図……………30 |
| | 三豊平野遠景……………8 | 第26図 | 財田2号墳周溝内出土土器…………30 |
| | 第5図 | 第27図 | S K 01平面図……………31～32 |
| | 伐開作業風景（財田古墳群）…………10 | 第28図 | S K 01発掘作業風景……………31～32 |
| | 第6図 | 第29図 | S K 01遺物出土状況……………31～32 |
| | 周辺地域の遺跡……………11～12 | 第30図 | S K 01遺物出土状況……………31～32 |
| II | 財田古墳群 | 第31図 | 広口壺肩部ヘラ描き拓影 （第33図-23）……………33 |
| | 第1図 | 第32図 | K トレンチ耕作土出土遺物 実測図……………33 |
| | 調査区遠景 （延命遺跡-八反地地区-より）…………14 | 第33図 | K トレンチ耕作土出土遺物…………33 |
| | 第2図 | 第34図 | S K 01出土土器実測図(1)……………34 |
| | 財田古墳群トレンチ配置図・ 1～4号墳位置図（調査前）…………15 | 第35図 | S K 01出土土器(1)……………35 |
| | 第3図 | 第36図 | S K 01出土土器実測図(2)……………36 |
| | 西尾根調査区遠景 （東尾根より）……………16 | 第37図 | S K 01出土土器(2)……………37 |
| | 第4図 | 第38図 | S K 01出土土器実測図(3)……………38 |
| | M トレンチ全景……………16 | 第39図 | S K 01出土土器(3)……………39 |
| | 第5図 | 第40図 | 財田3号墳……………43 |
| | D トレンチ土層図……………17 | 第41図 | 財田4号墳……………43 |
| | 第6図 | 第42図 | 財田1～4号墳位置図 （調査後）……………44 |
| | I・J トレンチ平面図……………18 | 第43図 | 整理作業風景……………46 |
| | 第7図 | III | 四ツ塚2号墳 |
| | 財田2号墳墳丘測量図 （調査前）……………19 | 第1図 | 羨道部遺物出土状況……………48 |
| | 第8図 | 第2図 | トレンチ設定風景……………49 |
| | 財田2号墳（南より）……………20 | | |
| | 第9図 | | |
| | 財田2号墳墳丘測量図 （調査後）……………21～22 | | |
| | 第10図 | | |
| | 東尾根全景（西尾根より）21～22 | | |
| | 第11図 | | |
| | 財田2号墳近景 （調査前 北より）……………21～22 | | |
| | 第12図 | | |
| | 財田2号墳発掘作業風景……………21～22 | | |
| | 第13図 | | |
| | 財田2号墳石室第一面 （北より）……………24 | | |
| | 第14図 | | |
| | 財田2号墳石室第二面 （北より）……………24 | | |
| | 第15図 | | |
| | 財田2号墳石室実測図……………25～26 | | |
| | 第16図 | | |
| | 耳環出土状況……………27 | | |
| | 第17図 | | |
| | 財田2号墳遺物出土状況図……………27 | | |

| | | | | | |
|------|--------------------|-------|------|--------------------|-------|
| 第3図 | 調査区全景 | 49 | 第21図 | 墓道部遺物出土状況 (西から) | 65~66 |
| 第4図 | 調査風景(畦畔除去状況) | 50 | 第22図 | 墓道部遺物出土状況 (南から) | 65~66 |
| 第5図 | 奥壁検出状況 | 50 | 第23図 | 羨道部土器集中出土状況 模式図 | 65~66 |
| 第6図 | 四ツ塚古墳群地形図 | 51~52 | 第24図 | 羨道部遺物出土状況 (南から) | 67 |
| 第7図 | 調査前の状況(東から) | 53 | 第25図 | 羨道部遺物出土状況 (北から) | 67 |
| 第8図 | 調査前の状況(南から) | 53 | 第26図 | 羨道部遺物出土状況近景 | 67 |
| 第9図 | 第1トレンチ設定状況 | 54 | 第27図 | 羨道部遺物出土状況近景 | 67 |
| 第10図 | 第2トレンチ設定状況 | 54 | 第28図 | 羨道部遺物出土状況近景 | 67 |
| 第11図 | トレンチ配置図 | 55 | 第29図 | 耳環実測図 | 68 |
| 第12図 | 玄室部埋土 | 56 | 第30図 | 遺物実測図(1) | 69 |
| 第13図 | 土層実測図 | 57~58 | 第31図 | 遺物実測図(2) | 70 |
| 第14図 | 検出遺構全景(北から) | 61 | 第32図 | 遺物写真(1) | 72 |
| 第15図 | 検出遺構全景(東から) | 61 | 第33図 | 遺物写真(2) | 73 |
| 第16図 | 石室部・墓道部全景 (南から) | 62 | | | |
| 第17図 | 周溝全景(東から) | 62 | | | |
| 第18図 | 遺構実測図 | 63~64 | | | |
| 第19図 | 遺物出土状況図 | 65~66 | | | |
| 第20図 | 墓道部遺物出土状況 (東から) | 65~66 | | | |

目 次

| | | | | | |
|---|--|---|-----|-----------|----|
| I | はじめに | | II | 財田古墳群 | |
| | 第1表 四国横断自動車道建設に伴う 埋蔵文化財調査事業 (発掘調査のみ) | 1 | | 第1表 遺物観察表 | 40 |
| | 第2表 四国横断自動車道建設に伴う 発掘調査の概要(1) | 4 | III | 四ツ塚2号墳 | |
| | 第3表 四国横断自動車道建設に伴う 発掘調査の概要(2) | 5 | | 第1表 遺物観察表 | 71 |

I はじめに

1. 調査の経緯

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業は昭和57年度に始まり、今年度で6年目を迎えた。今年度(62年度)は、用地未買収のため残されていた観音寺市柞田八丁遺跡の480㎡も6月に発掘調査を終了し、これで24遺跡・211,500㎡の発掘をすべて終了した。これに伴い、今年度は報告書作成のための整理作業が主体となり、7遺跡・2冊の報告書を刊行した昨年度に続き、9遺跡・4冊の刊行を予定しているほか、次年度にまたがる整理作業も実施している。報告書作成のための整理作業は今年度がピークで、順調に進めば、来年度以降には5遺跡の報告と総括編を残すのみとなる。また、各遺跡の報告書とは別に、一般啓蒙用として、昭和60・61年度に『語りかける埋蔵文化財 いにしへの讃岐 I・II』を刊行しており、今年度も3冊目を刊行する予定である。

今年度で終了した発掘調査は、昭和58年2月から3月にかけて、多度郡条里の検出を目的として善通寺インター予定地付近で開始された。発掘調査実施前には、調査予定遺跡は、17遺跡・60,900㎡とみられていたが、57年度の発掘で善通寺市金蔵寺下所遺跡が新たに発見され、かなりの増加が予想された。翌58年度には調査の基地として善通寺市原田町に「香川県埋蔵文化財発掘調査善通寺連絡事務所」を設置し、金蔵寺下所遺跡以下の発掘調査を本格的に実施するとともに、横断道予定路線内の事前調査を実施した。その結果、新たな遺跡の発見が相次ぎ、最終的には24遺跡・211,500㎡の発掘調査を実施するに至った。各年度ごとの発掘調査にかかわる遺跡数・面積・人員・経費は第1表のとおりである。

第1表 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業（発掘調査のみ）

| 内容 年度 | 遺跡数 | 面積 (㎡) | 人 員 | | 発掘調査費 (千円) | 備 考 |
|----------|-----|-----------|-------------------|---------------|---------------|------------------------------|
| | | | 職 員 | 嘱 託 | | |
| 57 | 1 | 1,300 | 2 | 1 | 8,600 | |
| 58 | 7 | 19,200 | 8 (うち、係長1,庶務1) | 4 (うち、所長1) | 141,000 | |
| 59 | 16 | 57,900 | 9 (同上) | 5 (同上) | 245,644 | |
| 60 | 14 | 78,500 | 10 (同上) | 7 (同上) | 312,500 | |
| 61 | 6 | 54,120 | 15 (同上) | 7 (同上) | 262,027 | 人員の内、職員2は報告書作成。報告書作成の経費は含まず。 |
| 62 | 1 | 480 | 7 | 0 | 1,920 | 報告書作成の経費は含まず。人員は報告書作成の人数。 |
| 合計 | 24 | 211,500 | | | 971,691 | |

6年に及ぶ発掘調査によって、第2表に示すように縄文時代から江戸時代に至る遺跡が発掘された。

縄文時代の遺跡をみると、善通寺市永井遺跡では縄文時代後期の河川跡から、ドングリ・トチなどの堅果類の保存・加工処理場が発見されたほか、縄文晩期の打製石斧を大量に出土した別の河川跡では、川底に14本の杭が打ち込まれていた。

観音寺市一ノ谷遺跡群では県下で初めて弥生時代前期の堅穴住居跡が2棟検出され、善通寺市矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡で弥生時代中期の集落跡を、善通寺市稲木遺跡C地区・観音寺市一ノ谷遺跡群で弥生時代終末頃の集落跡を検出した。このうち、矢ノ塚遺跡と西碑殿遺跡の掘立柱建物跡が方形の柱穴掘り方をもち、一ノ谷遺跡群で舶載と思われる鏡片や平行銅剣片が出土したことなどは注目される。

古墳時代では、高瀬町大門遺跡・観音寺市柞田八丁遺跡で6世紀末頃のカマド付堅穴住居跡を特色とする集落跡が検出され、瀬戸大橋架橋に伴って発掘調査された坂出市下川津遺跡の例と共に、県内ではこれまで不明であった古墳時代後期の集落跡として重要である。

古代になると、善通寺市金蔵寺下所遺跡で奈良時代と考えられる30棟以上の掘立柱建物跡や条里の推定方位と一致する溝が検出されると共に、自然河川から斎串・人形・馬形・舟形などの木製祭器・わらじなどが出土した。また、善通寺市稲木遺跡B地区では、飛鳥・白鳳時代の掘立柱建物跡32棟、平安時代前期と考えられる掘立柱建物跡4棟が検出され、丸亀平野の条里や、古代集落、あるいは官衙の解明に貴重な資料を提供することとなった。また、善通寺市稲木遺跡C地区から5枚の「承和昌宝」を納めた土師質甕が出土し、胞衣壺と考えられていることや、善通寺市中村遺跡の平安時代中期頃の溝から、「貞」字をもつ銅印が出土したことも特筆される成果であった。

古代末から中世では、多くの遺跡で掘立柱建物跡が検出されており、畿内の和泉産と考えられる瓦器や東播系須恵質土器・輸入磁器・中世陶器などが出土した。また、善通寺市上一坊遺跡や観音寺市一ノ谷遺跡群で近世の遺跡に本格的な発掘調査のメスが入れられたことも注目される。

四国横断自動車道建設に伴う発掘調査で注目されるのは、初めて沖積平野の本格的な発掘がなされた点である。発掘調査前には60,900㎡と予想されていた遺跡面積が、最終的には211,500㎡となった事実が示すように、これまでほとんど不明であった平野部の遺跡、特に集落跡が大規模に発掘調査された。これによって、平野部に多くの遺跡が存在する事実が確認されると共に、採集土器と墳墓などの少ない資料から想定されていた香川の先人達の暮らしが、豊かでより具体的なイメージを持ち始めてきた。

ここに報告する財田古墳群と四ツ塚2号墳は、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の群集墳である。両古墳群とも4基の円墳で形成されていたようであるが、発掘調査開始時には、かつての畑地の開墾によって破壊され、各古墳の位置を確定できない状態であった。

財田古墳群は、当初、四国横断自動車道予定地内に2基が存在するものと予想されていたが、発掘調査の結果、別の位置で横穴式石室を1基確認した。発掘調査は、主任技師（当時）大山真充が担当し、昭和58年9月26日から11月30日まで実施した。四ツ塚古墳群は、技師（当時）真鍋昌宏が担当し、昭和59年4月16日～5月14日まで実施し、当初予想した場所で、1基の横穴式石室を確認することができた。

両古墳とも墳丘は削平され、横穴式石室の石材もほとんど持ち去られていたが、いずれも6世紀後半～末頃の周溝をもつ円墳であり、財田2号墳は両袖式、四ツ塚2号墳は片袖式横穴式石室を内部主体とするものと考えられた。

財田2号墳からは、耳環・管玉・鉄斧・須恵器・土師器が出土し、四ツ塚2号墳は、耳環・須恵器・土師器を出土したが、四ツ塚2号墳では、周溝から杯・甕・提瓶・甕などの須恵器や土師器が破片となって出土しており、埋葬に伴う墓前祭祀を示すものではないかとみられている。

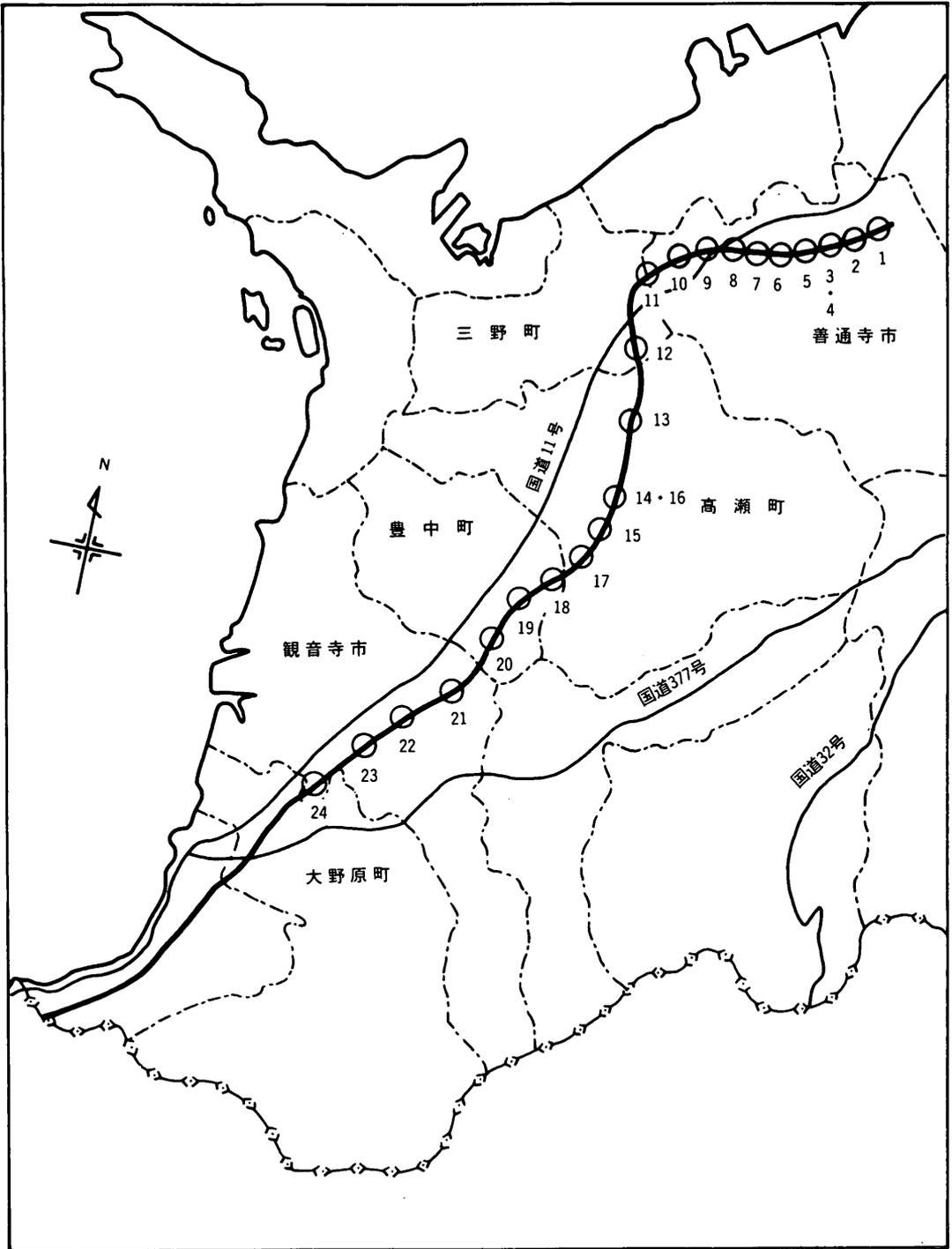
両古墳の報告書作成に伴う整理作業は、財田古墳群を技師片桐孝浩が担当し、四ツ塚2号墳を主任技師真鍋昌宏が担当し、昭和62年4月から開始し、ここに『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊』として刊行の運びとなった。

第2表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

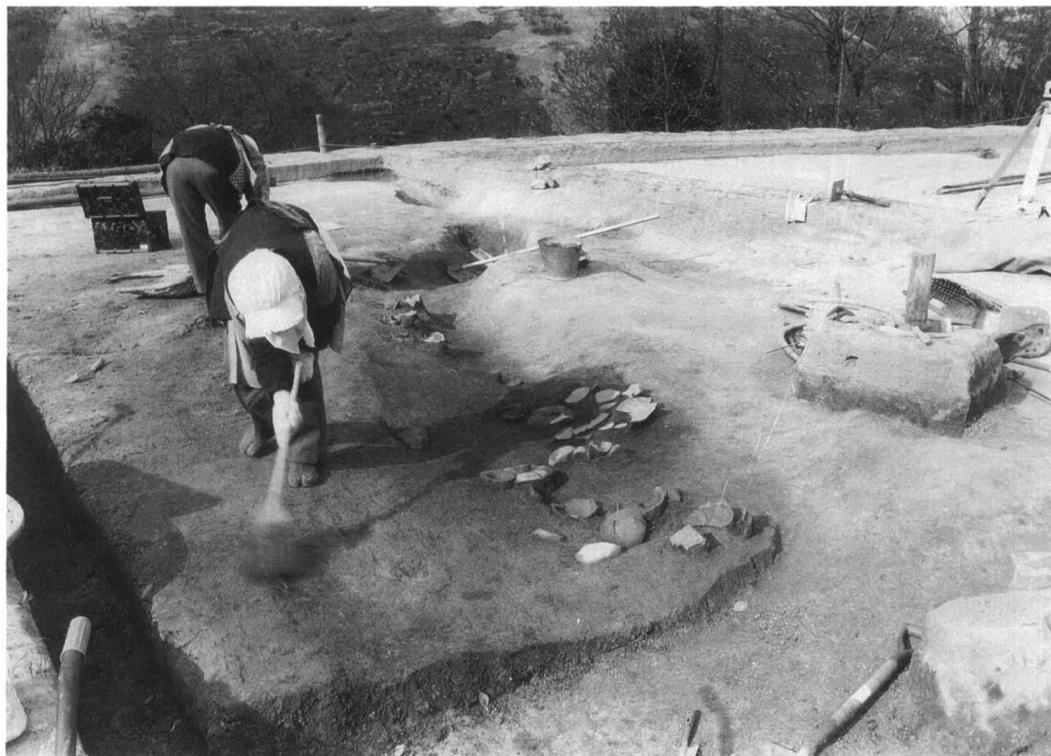
| No | 遺跡名 (旧遺跡名) | 所在地 | 調査期間 | 時代 | 遺構 | 主な出土品 | 備考 |
|----|------------------------------|-------------------------------|---|-----------------------------|--|--|---|
| 1 | 金蔵寺下所遺跡 | 普通寺市金蔵寺町下所 | 56. 4. 1~60. 2. 28 | 弥生時代 奈良・平安時代 中世 | 包含層, 自然河川 溝, 掘立柱建物跡 溝, 掘立柱建物跡 5以上 | 須恵器, 土師器, 瓦器, 木製品(斎 申, 人形, 馬形, 刀形, 船形, 曲物 など)。以上奈良時代)。わらじ(奈良 時代)。 | |
| 2 | 稲木遺跡 C地区 | 普通寺市稲木町 | 59. 4. 1~60. 3. 30 | 弥生時代 | 竪穴住居跡5, 集石墓(?)8, 土壇墓3, 甕棺墓9 掘立柱建物跡4 掘立柱建物跡1, 埋壘 | 弥生土器, 土師器, 須恵器, 鏡片2, 承和昌宝5 | |
| 3 | 稲木遺跡 B地区 | 普通寺市稲木町 | 59. 9. 17~60. 2. 28 | 弥生時代 飛鳥・白鳳時代 | 土壇4 掘立柱建物跡32(内倉庫6) 溝 | 土師器, 須恵器, 鉄製鋤先 | |
| 4 | 稲木遺跡 A地区 | 普通寺市稲木町 | 58. 6. 29~59. 2. 14 | 平安時代 弥生時代 古代 | 掘立柱建物跡4 溝 | 縄文晩期土器, 弥生土器, 磨製石砲 丁 | |
| 5 | 永井遺跡 | 普通寺市中村町 島田・榎田, 下吉 田町下所西 | 60. 5. 7~61. 12. 24 | 縄文時代 弥生時代 中・近世 | 自然河川, 土壇 溝, 土壇, 掘立柱建物跡3 掘立柱建物跡12, 溝, 土壇 | 縄文土器(彦崎K I, K II式, 黒土 B I式) 土偶1, 耳飾2, 打製石斧多数, 杭 14, 碗1, 鳥形木製品1, 堅果類多 数(以上縄文時代) | |
| 6 | 中村遺跡 | 普通寺市中村町 岡 | 59. 7. 3~59. 9. 17 | 縄文・弥生時代 平安時代 中世 近世 | 自然河川 溝2 掘立柱建物跡15, 溝, 土壇 溝, 土壇 | 銅印「貞」 | 四国横断自動車道建設に伴 う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊(以下, 横断道報告 Iと略称)62. 3. 31刊行 |
| 7 | 乾遺跡 (吉原B ₂) | 普通寺市中村町 乾 | 60. 9. 2~60. 11. 20 | 弥生時代 近世 | 湧水池状遺構, 自然河川 土壇, 自然河川 | 弥生前期土器 | 横断道報告 I |
| 8 | 上一坊遺跡 (吉原B ₁) | 普通寺市吉原町上 一坊 | 60. 11. 13~61. 1. 24 | 中世 近世 | 掘立柱建物24棟, 井戸1, 土 壇, 溝 井戸2, 土壇, 溝 | 近世陶磁器 | 横断道報告 I |
| 9 | 矢ノ塚古墳 | 普通寺市吉原町 碑殿町矢ノ塚 | 59. 10. 8~60. 8. 30 | 弥生時代 奈良時代 中世 | 竪穴住居跡1, 掘立柱建物2, 土壇, 溝 掘立柱建物17, 溝 掘立柱建物30以上, 井戸2, 土壇, 溝 | 弥生土器, 須恵器, 剣形土製品1, 鳥形土製品1, 分銅形土製品4, 石 帯 | 横断道報告 III |
| 10 | 西碑殿遺跡 | 普通寺市碑殿町 | 60. 2. 4~60. 4. 30 61. 7. 28~61. 8. 11 | 弥生時代 奈良時代 中世 近世 | 掘立柱建物数棟 掘立柱建物数棟 掘立柱建物数棟 一字一石経塚 | 弥生土器, 須恵器 一字一石経, 京焼陶器碗1(以上, 経塚) | |
| 11 | 深尾石棺群 | 三豊郡三野町大見 深尾 | 59. 9. 11~59. 10. 23 | | | | 路線内には存在せず |
| 12 | 道免窯跡 | 三豊郡三野町大見 道免丸尾 | 59. 9. 11~59. 10. 23 | 飛鳥・白鳳時代 | (灰原) | 須恵器坏・高坏・壺・甕 | 横断道報告 II |
| 13 | 北条遺跡 | | 60. 5. 9 | | | | 路線内には存在せず |

第3表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)

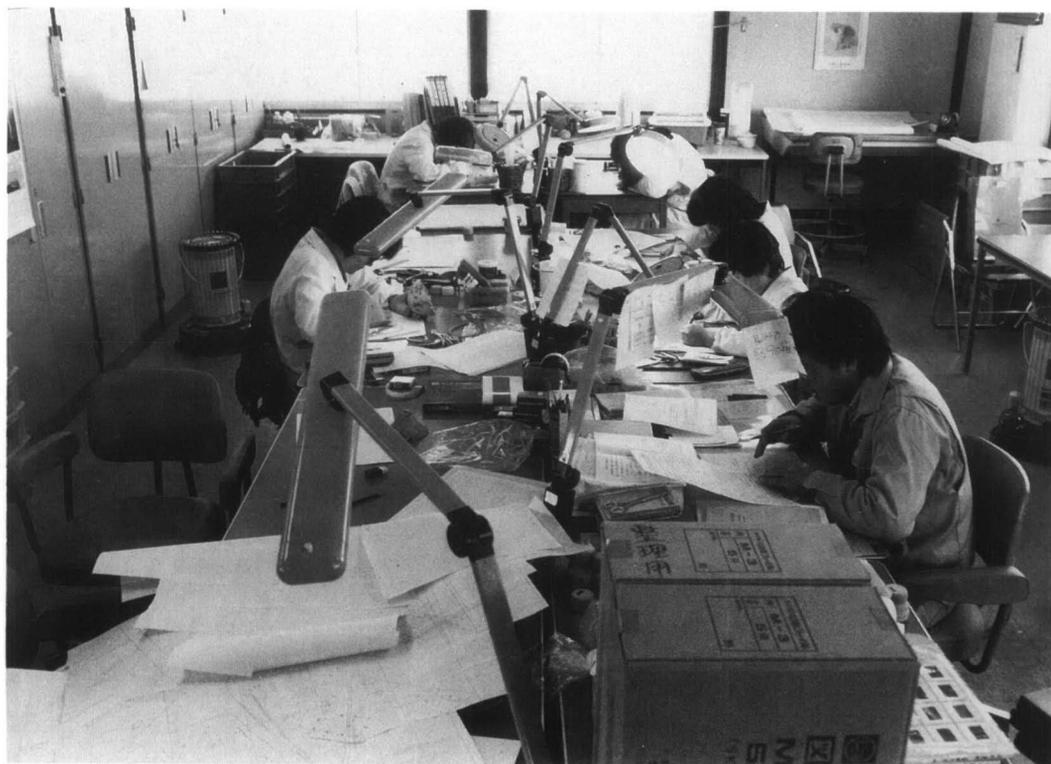
| No | 遺跡名 (旧遺跡名) | 所在地 | 面積(m ²) | 調査期間 | 時代 | 遺構 | 主な出土品 | 備考 |
|----|-----------------------|-----------------------|---------------------|---|--------------------|--|--------------------------------------|------------|
| 14 | 利生寺遺跡 (利生寺遺跡Ⅰ・Ⅱ区) | 三豊郡高瀬町上勝 間字砂古 | 3,200 | 60. 5. 22~60. 7. 18 | 弥生時代 中世 近世 | 土壇5 竪穴状住居跡1, ビット 掘立柱建物跡1, 井戸1, 土 壇4 | 弥生後期土器, 中・近世土器 | 横断道報告Ⅱ |
| 15 | 大門遺跡 (利生寺遺跡Ⅲ区) | 三豊郡高瀬町上勝 間字砂古 | 5,500 | 60. 7. 22~61. 1. 28 | 古墳時代 中世 近世 | 竪穴住居跡23, 掘立柱建物跡 1, 土壇6, 溝23 礎石建物跡1, 掘立柱建物跡 13, 土壇6, 石組井戸1, 溝9 溝1 | 須恵器, 土師器, 中世土器, 鞆の羽 口, 鉄滓 | 横断道報告Ⅱ |
| 16 | 利生寺古墳 | 三豊郡高瀬町上勝 間字砂古 | 700 | 60. 12. 2~61. 3. 17 | 古墳時代 | 横穴式石室1 | 須恵器, 耳環 | 横断道報告Ⅱ |
| 17 | 矢ノ岡遺跡 (土佐神社跡) | 三豊郡高瀬町上勝 間字ノ岡 | 2,600 | 61. 1. 28~61. 2. 27 | 古墳時代 中世 | 竪穴住居跡1 掘立柱建物跡6, 溝6 | 八稜鏡1 | 横断道報告Ⅱ |
| 18 | 四ツ塚古墳 | 三豊郡豊中町笠田 | 1,000 | 59. 4. 16~59. 5. 14 | 古墳時代 | 横穴式石室1 | 須恵器, 耳環 | 横断道報告Ⅳ(予定) |
| 19 | 財田古墳 | 三豊郡豊中町上高 野 | 1,000 | 58. 9. 26~58. 11. 30 | 古墳時代 | 横穴式石室1 | 須恵器, 耳環, 鉄斧, 鉄釘 | 横断道報告Ⅳ(予定) |
| 20 | 延命遺跡 | 三豊郡豊中町上高 野大地・八反地 | 18,000 | 58. 11. 28~60. 5. 15 61. 9. 1~61. 9. 30 | 弥生時代 中世 | 溝 掘立柱建物, 土壇, 土塚墓, 塚, 井戸3, 柵 | 土師器, 須恵器, 瓦器, 青磁 | |
| 21 | 一ノ谷遺跡 群(刈田群 条里) | 観音寺市古川町, 中田井町, 本大町 | 36,100 | 60. 5. 15~61. 12. 25 | 弥生時代 古墳時代~近世 | 竪穴住居跡34, 土壇, 溝 掘立柱建物32, 土壇, 土塚墓, 溝 | 弥生土器(前期, 後期), 平形銅剣 片, 銅鏡片, 中・近世土器 | |
| 22 | 石田遺跡 | 観音寺市池ノ尻町 石田 | 17,200 | 60. 5. 1~61. 1. 11 | 弥生時代 古墳時代 中世 | 土壇 掘立柱建物跡3 掘立柱建物跡17, 土壇 溝 | 土師器, 須恵器, 瓦器, 緑釉土器, 黑色土器 | |
| 23 | 長砂古墳跡 | 観音寺市池ノ尻町 大長 | 8,900 | 61. 1. 13~61. 8. 12 | 弥生時代 古墳時代 中世 | 竪穴住居跡1 横穴式石室1 溝, 掘立柱建物跡5 | 弥生土器, 須恵器, 玉類, 馬具, 武 器, 瓦器 | |
| 24 | 柞田八丁遺 跡(中延遺 跡) | 観音寺市柞田町土 井之内 | 14,000 | 61. 4. 3~61. 11. 28 62. 6. 5~62. 6. 17 | 古墳時代 | 竪穴住居跡7, 掘立柱建物跡 1, 横穴式石室1, 溝, 土塚墓 2 | 須恵器, 土師器, 耳環 越州窯青磁 | |
| | 合計 | | 211,500 | 67. 2. 8~61. 12. 25 62. 6. 5~62. 6. 17 (調査期間は57年度 の多度郡条里の発掘 を含む。) | 中世 | 掘立柱建物跡47 | | 24遺跡 |



第1図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～豊浜間）



第2図 発掘作業風景（財田古墳群）



第3図 整理作業風景

2. 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

香川県の西部に位置する三豊平野は、阿讃山脈を源とする財田川によって形成された沖積地である。この三豊平野の北に三豊郡豊中町は位置する。同町は、西に七宝山(445.0m)、東に眉山(189.4m)・鳥越山(187.0m)・陣山(133.0m)からなる連山を控え、そこより派生した丘陵及びその延長である低丘陵地、そして、それらに挟まれた財田川の支流である竿川・宮川が流れる平野部により構成されている。現在までに豊中町内で発見されている遺跡は、この連山より派生した丘陵上及び七宝山の裾部に集中する。

今回、同町東の丘陵部に四国横断自動車道が建設されることになった。ここは、七尾の名が示すように連山より派生した尾根が起伏したり分脈しながらゆるやかに下がり中央低地(三豊平野の一部)に及ぶ。豊中町東部のこの丘陵上からは、七宝山系の山並や燧灘が一望のもとに見渡せる。

遺跡地図によると、四国横断自動車道建設予定地には、四ツ塚古墳群(豊中町笠田笠岡)と財田古墳群(豊中町上高野)がある。

豊中町内には、七宝山の裾部と連山より派生した尾根に多数の古墳群が存在するが、今回調査の四ツ塚・財田両古墳群はそのなかでも規模の大きい古墳群である。



第4図 三豊平野遠景

(2) 歴史的環境

旧石器・縄文時代

豊中町において旧石器・縄文時代の遺跡は現在のところ確認されていない。しかし、同じ三豊平野内で隣接する観音寺市においては、旧石器・縄文時代の遺物が確認されているので、豊中町においても、この時代の遺構・遺物が発見されるのは時間の問題であると思われる。

弥生時代

三豊平野において弥生時代の波は観音寺市室本町に第1歩を記す。今まで狩猟・採集・漁撈で生活していた縄文人にとって、水稻耕作という新しい技術の波は、驚嘆に値すべきものであったに違いない。そして、この新しい生産様式は、海岸部から次第に内陸部へと耕地を拡大させ、人々の生活範囲をも広げたのであった。豊中町内で、弥生時代の遺跡としては、大字上高野延命山・茶の岡・下原・大字岡本で、なかでも岡本遺跡は、不動滝から天神地区にかけて遺跡が広がっていると思われる。弥生時代の集落は、山麓または丘陵上で水はけがよい所、近くに清水があること、背後に山または林があり狩猟に適した所、また水田可能地が近くにあることなどが住居地選定の条件とすると、岡本遺跡は、その条件全てを満たす場所にある。当遺跡は、本格的な発掘調査が実施されていないので詳しくはわからないが、開墾当時出土した遺物から推定すると豊中町内では最大規模の弥生時代中期の集落と考えられる。前述した弥生時代前期の室本遺跡とは3kmほどの距離にあり両者の関係が注目されるであろう。

古墳時代

前方後円墳の分布密度が高い香川県にあって、この三豊郡は前方後円墳の分布がきわめて少ないという特徴があげられる。また前期古墳も同様である。町内においての古墳時代中期の古墳としては、周溝を持つと言われる御本祖古墳・埴輪出土の大塚古墳（円墳）と、中期段階の有力豪族の古墳であろうと考えられるものがある。この大塚古墳は上円下方墳という型を呈しており、香川県内においては希少な存在である。後期古墳では東部地域の原谷古墳・野津午古墳・道上古墳・四ツ塚古墳・財田古墳群・延命1号墳（玄室の奥行き4.35m・幅2.5m・高さ2.8mで、この地域では珍しい片袖式の横穴式石室を有する円墳）、西方の七宝山裾部の堂の前古墳、小円古墳群、帰来1号墳・2号墳が築造されている。しかし、その規模はいずれも小さく、分布密度も希薄で、後世の開墾等でほとんど破壊されているものと思われる。

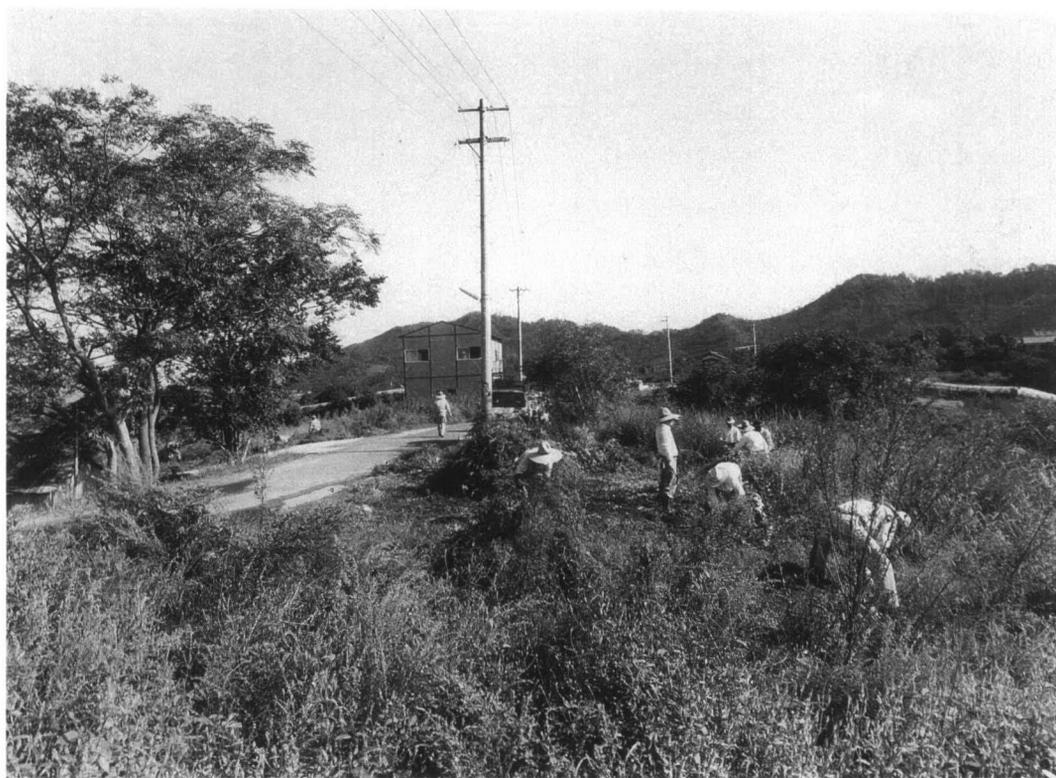
歴史時代

後期古墳の最終段階と重なる様に我国でも仏教文化を積極的に受容しはじめる。これは讃岐国でも同様で、古代寺院の分布密度の濃い地域ということでそれがわかる。その仏教文化の影響下において造営されたのが妙音寺と道音寺である。前者は同町上高野に所在する。この寺からは、十一葉単弁軒丸瓦（高句麗系古瓦）、八葉単弁軒丸瓦（山田寺式）等が出土しており、その創建年代は飛鳥時代後期もしくは白鳳時代前期に建立されたものと推定されている。後者は、同町笠田

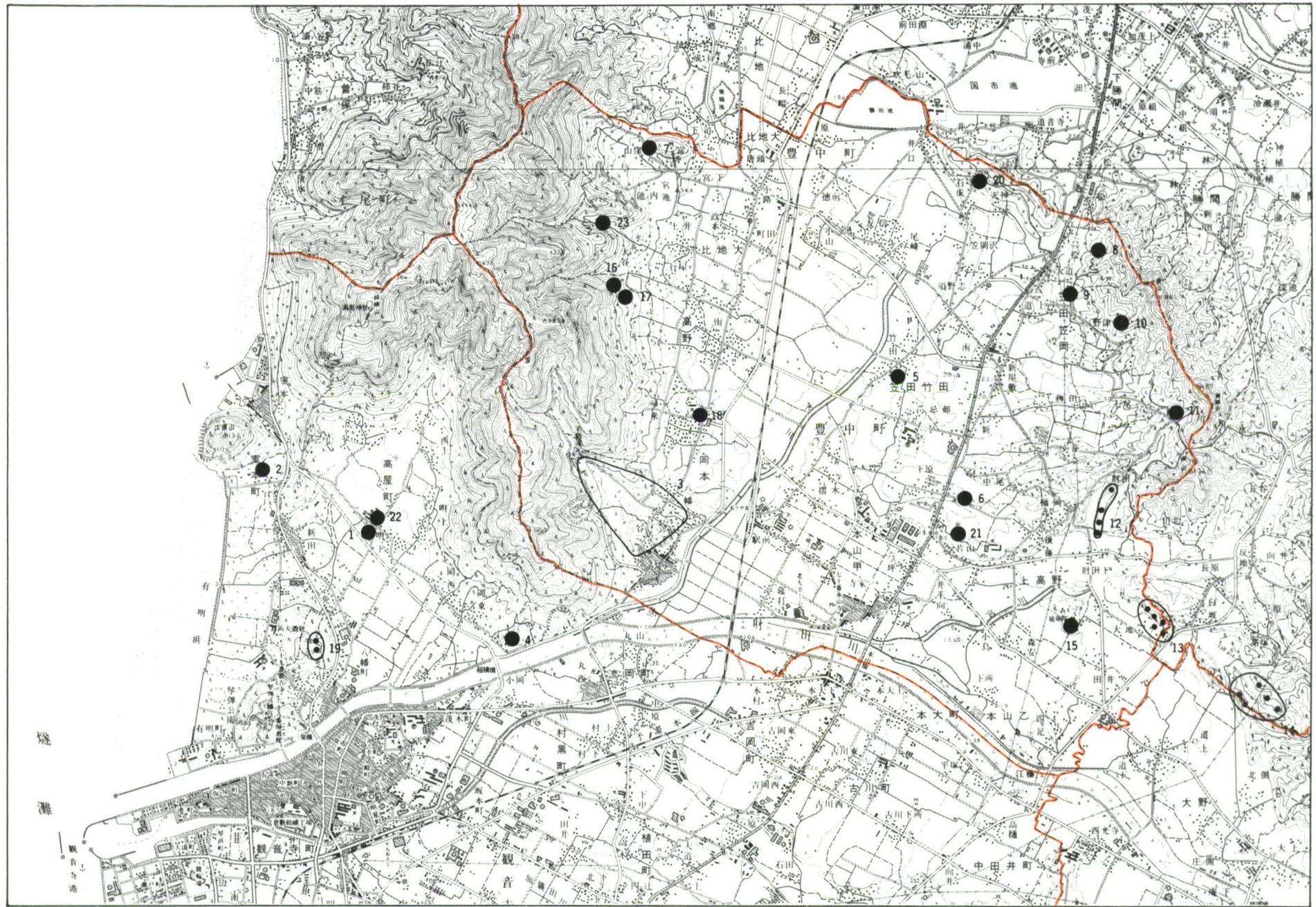
笠岡に所在する。ここからは、複弁蓮華文鏡瓦が出土しており、奈良時代を下らないものと思われる。また、それぞれの寺には、近くに瓦窯を2・3窯控えている。

〔参考文献〕

- (1) 「豊中町史」 豊中町 1979年
- (2) 「豊中町文化財調査報告」第4集 1975年
- (3) 「観音寺市史」 観音寺市 1985年
- (4) 「四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財実績報告」 昭和59～61年度 香川県教育委員会 1984～1986年3月



第5図 伐開作業風景（財田古墳群）



- | | | |
|--------------------|--------------------|---------------------|
| 1. なつめの木貝塚 (縄文・早期) | 9. 道上古墳 (古墳・後期) | 17. 小円古墳 (古墳・後期) |
| 2. 室本遺跡 (弥生・前期) | 10. 野津午古墳 (古墳・後期) | 18. 帰來古墳 (古墳・後期) |
| 3. 岡本遺跡 (古墳・中期) | 11. 四ツ塚古墳群 (古墳・後期) | 19. 興昌寺山古墳群 (古墳・後期) |
| 4. 鹿隅 (古墳・前期) | 12. 財田古墳群 (古墳・後期) | 20. 道音寺跡 (奈良) |
| 5. 御本祖古墳 (古墳・中期) | 13. 高沢古墳群 (古墳・後期) | 21. 妙音寺跡 (奈良) |
| 6. 大塚古墳 (古墳・中期) | 14. 白坂古墳群 (古墳・後期) | 22. 高屋寺跡 (奈良) |
| 7. 宮山塚跡 (古墳・5世紀) | 15. 延命古墳 (古墳・後期) | 23. 興隆寺石塔群 (室町) |
| 8. 原谷古墳 (古墳・後期) | 16. 下高野古墳群 (古墳・後期) | |

第6図 周辺地域の遺跡

Ⅱ 財田古墳群

1. 調査の経過

財田古墳群の調査は、昭和58年9月26日～同年11月30日に実施した。調査対象区内には東西2本の丘陵があり、その西尾根に古墳があるとされていた。現在、西尾根は、開墾により畑地化されており古墳の墳丘さえ残っていなかった。このような墳丘のない古墳の調査ということもあり、尾根筋及び尾根に直行するトレンチを設定することによって、まず、古墳の有無を確認し、その結果によりトレンチの拡張を行なった。トレンチの幅は4mで丘陵の裾部まで調査を実施した。

この財田古墳は、遺跡台帳において正確な位置さえおさえられておらず、遺跡台帳の不備を正す資料としての価値も高かったように思う。

財田2号墳の調査は、昭和59年11月30日にほぼ終了したが、残務整理のため、豊中町延命遺跡(城ノ岡地区)と同時平行で行なった時期がある。

調査日誌抄

- | | | | |
|---------|--|---|---|
| 昭和58年9月 | 1日 | Kトレンチを発掘。古墳を確認したので拡張して発掘を行なう。新しくL・Mトレンチを発掘。 | |
| 26日 | 1日中降り続く雨の中、プレハブ用地の草刈りをする。午後、プレハブ設置。 | 8日 | Kトレンチの古墳より、多数の土器出土。その他のトレンチでは、随時、土層実測及び写真撮影を行なう。 |
| 27日 | 善通寺連絡事務所より資材搬入。台風10号接近のため作業休み。 | 11日 | 古墳の墓壇内出土遺物の実測。土器集中箇所の実測。当初土器集中は、古墳に伴うものと考えられていたが、出土遺物の中に瓦が混じっていたので後世の攪乱と判明した。 |
| 29日 | 発掘調査開始。まずは調査区内の草刈りをする。 | 15日 | 墓壇内のアゼを取りはずす。礫床を精査中、銀環・釘・鉄斧など出土。 |
| 30日 | 地形に合ったトレンチ設定。杭打ちを行なう。 | 18日 | 調査終了箇所より埋め戻し。 |
| 10月 | | 22日 | 財田古墳において初の現地説明会。 |
| 4日 | A・Bトレンチ発掘開始。 | 24日 | 西尾根におけるトレンチの模式図作成。 |
| 7日 | A・B・C・Dトレンチ発掘。以後順次Hトレンチまで発掘。 | 28日 | Kトレンチにおいて平面実測。コンタを入れる。地形測量及び古墳石室平面図実測を行なう。 |
| 20日 | Fトレンチの平面実測を行う。 | 30日 | 財田古墳群の調査終了。 |
| 24日 | 調査対象区西尾根のA～Hトレンチ終了。東尾根にIトレンチを設定し調査に入る。 | | |
| 27日 | Iトレンチで土坑が検出されたので、拡張して調査を行なう。 | | |
| 31日 | Aトレンチから土層実測を行なう。 | | |
| 11月 | | | |

2. 調査の方法

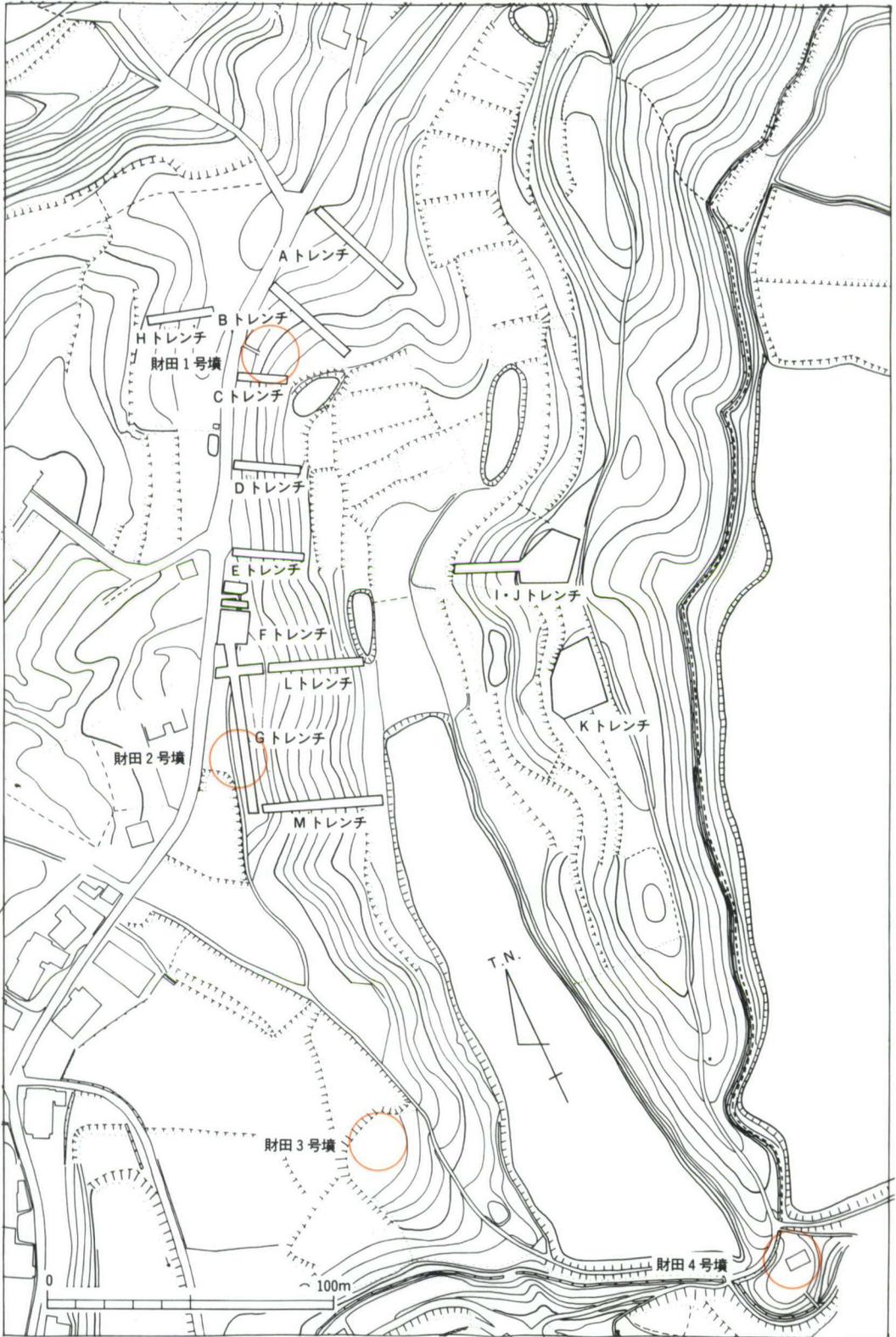
財田古墳群は、香川県三豊郡豊中町上高野財田に所在する。当所は、豊中町の南東部に位置し、同町と同郡高瀬町との境に聳える鳥越山（187.0m）から西に派生した標高約40mの尾根上にある。

この財田古墳群は、遺跡台帳によると、今回調査対象区となった南北に延びる東西2本の尾根の西尾根上、町道陣山線の東側にあり、また、豊中町内の埋蔵文化財包蔵地調査報告書（『豊中町文化財調査報告』第4集）の内容紹介分布地図にも同様にその所在が記されている（第2図）。以上の記録によると、西尾根の基部に1号墳、中央部に2号墳が存在することから、この地域が今回の調査対象地となった。そのため、発掘調査に先立ち数回の踏査を試みた。しかし、遺物等はなく、位置を確認することはできなかった。また3号墳は西尾根の先端部に位置し、福岡神社の社が鎮座している。この3号墳は、昭和60年に福岡神社跡地として調査を行なった。4号墳は、東尾根の先端部にあり、数年前、その古墳から白骨が確認されたという。また、2号墳からは大きな鏡が出土したという記録がある。

調査は、西尾根で古墳の痕跡を検出することをまず第一目的として、トレンチ設定を試みた。そのために、西尾根において尾根筋と平行するトレンチF・Gと、直交するトレンチA～E・H・L・Mを設定し、東尾根においては、同じようにI～Kのトレンチを設定した（第2図）。そして遺構の検出状況に応じて随時トレンチを拡張していく方法をとった。



第1図 調査区遠景(延命遺跡一八反地地区一より)



第2図 財田古墳群トレンチ配置図・1～4号墳位置図（調査前）

3. 遺構について

(1) A～H・L・Mトレンチ

財田古墳群の1号・2号墳がある西尾根にA～H・L・Mトレンチを設定した。西尾根は、尾根筋に町道が走っていることもあり、かなり制約を受けたトレンチ配置となった(第2図)。おそらく古墳が以前にあったとしてもこの町道工事でかなりの掘削を受けているものと思われる。そのため各トレンチにおいては、古墳の痕跡を注意深く観察したが、西尾根からは、古墳に関係のある遺構すら確認できなかった。

西尾根筋の斜面に設定されたA～E・H・L・Mトレンチは、斜面における自然堆積で、平面・土層断面で観察しても、遺構は確認されなかった。また、尾根筋頂部に設定したトレンチでは、耕作土あるいは腐植土直下に地山が検出され、開墾当時の攪乱があるのみで、遺構らしきものは、ここでも確認されなかった。

そこで、代表例として、Dトレンチの土層について概略することによって、A～E・H・L・Mトレンチのまとめとしたい。

表土から地山までの平均的な深さは、40～60cm程度で、土層は、大別して4層に分けられ、尾根筋から約20m下で細かい堆積になる。上から、第1層－黒褐色土層(表土)、第2層－黄褐色砂質土層できめの細かい風化土、第3層－茶褐色砂質土層でやや粒の粗い風化土、第4層－明褐色粘質土層(地山)となっている。

出土遺物は、Fトレンチの第2層より弥生土器、須恵器片が数点出土したのが目立つくらいである。その他のトレンチでは、現代の陶磁器を含んだ近世以降のものがほとんどで、須恵器片がわずかに出土するのみであった。このように、

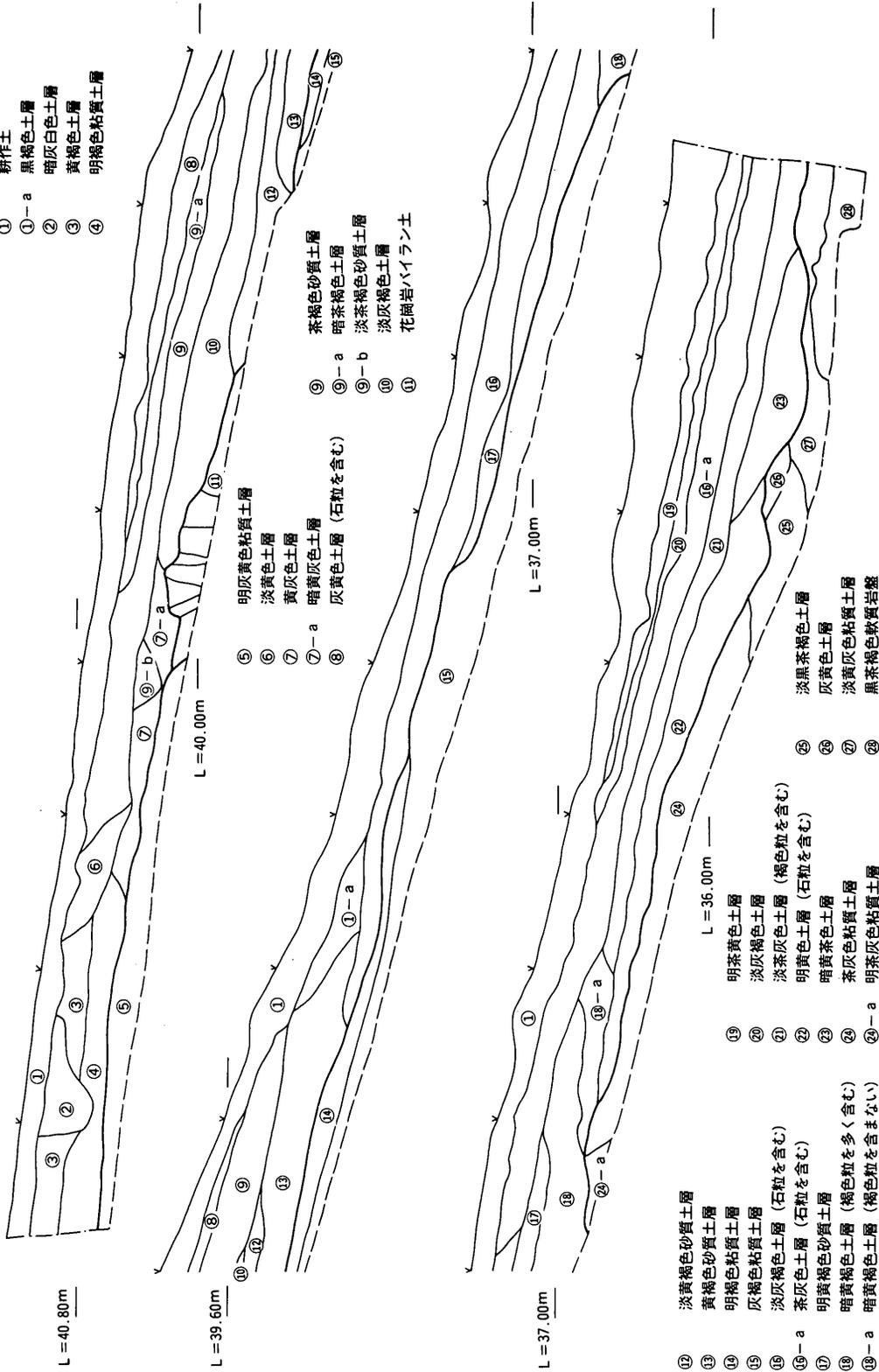


第3図 西尾根調査区遠景(東尾根より)



第4図 Mトレンチ全景

- ① 耕作土
- ①-a 黒褐色土層
- ② 暗灰白色土層
- ③ 黄褐色土層
- ④ 明褐色粘質土層



- ⑤ 明灰黄色粘質土層
- ⑥ 淡黄色土層
- ⑦ 黄灰色土層
- ⑦-a 暗黄灰色土層
- ⑧ 灰黄色土層 (石粒を含む)
- ⑨ 茶褐色砂質土層
- ⑨-a 暗茶褐色土層
- ⑨-b 淡茶褐色砂質土層
- ⑩ 淡灰褐色土層
- ⑪ 花崗岩ハイラン土

- ⑬ 淡黄褐色砂質土層
- ⑭ 黄褐色砂質土層
- ⑮ 明褐色粘質土層
- ⑯ 灰褐色粘質土層 (石粒を含む)
- ⑰-a 茶灰色土層 (褐色粒を多く含む)
- ⑱ 明黄褐色砂質土層
- ⑲-a 暗黄褐色土層 (褐色粒を含まない)
- ⑲ 暗黄褐色土層 (褐色粒を多く含む)
- ⑳ 明茶黄色土層
- ㉑ 淡灰褐色土層 (褐色粒を含む)
- ㉒ 明黄色土層 (石粒を含む)
- ㉓ 暗黄茶色土層
- ㉔ 茶灰色粘質土層
- ㉕-a 明茶灰色粘質土層
- ㉖ 淡黒茶褐色土層
- ㉗ 灰黄色土層
- ㉘ 淡黄灰色粘質土層
- ㉙ 黒茶褐色軟質岩盤

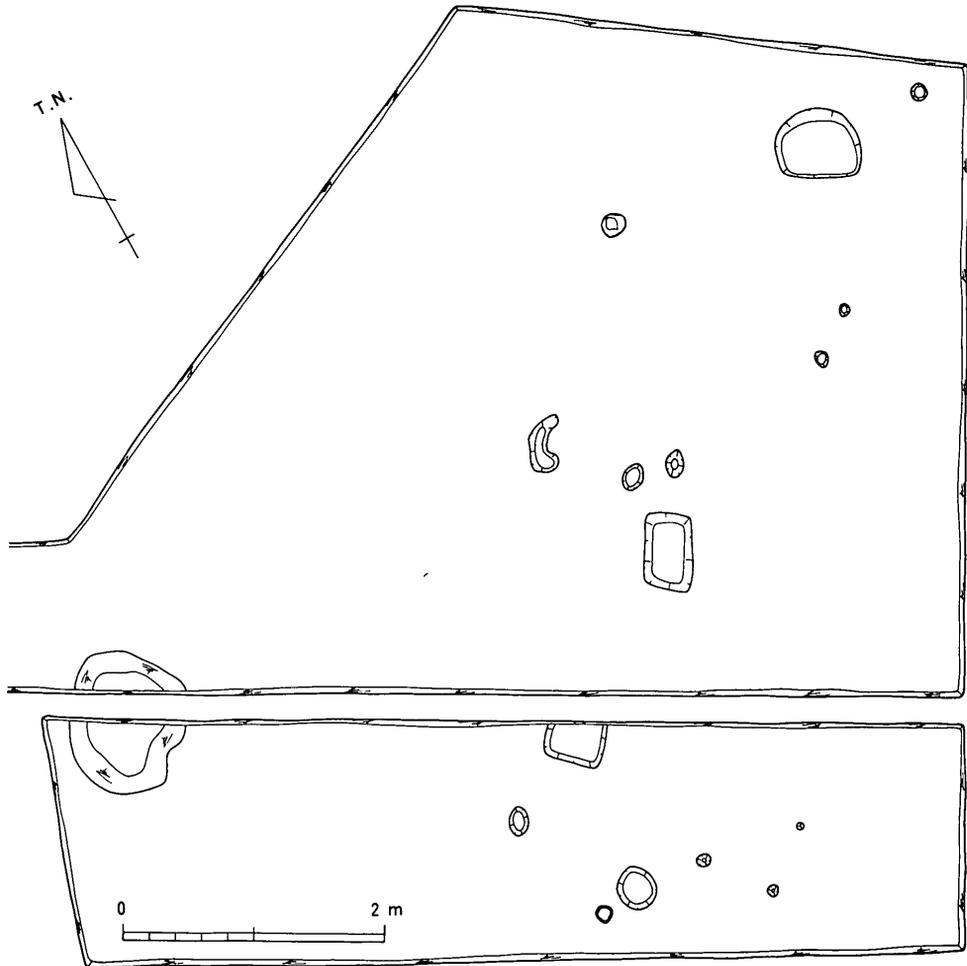
第5図 Dトレンチ土層図

平面的、土層断面的に見ても、遺物的に見ても、財田1号・2号墳及びそれ以外の遺構がこの尾根上に存在したとは考えられない。

(2) I・Jトレンチ

東尾根は、中央部あたりで、「く」の字形に曲がりながら、少し低くなり、尾根の基部へ向かってまた高くなる。その現地形で平坦地となっている場所にIトレンチ、斜面部にJトレンチを設定した。斜面部に設定したJトレンチでは、西尾根と同じ様な堆積状態となっており、遺構は検出されなかった。また、平坦面に設定したIトレンチでは、耕作土直下、地山となり、地山を掘り込んで、土坑及び柱穴などの遺構を検出した。そこでIトレンチを拡張した。しかし、遺構は広がりを見せず、土坑は開墾ときに掘られた可能性の強いもので、また柱穴は、単独にあり、それ以上の遺構にならないものばかりであった。

検出された遺構からは、近世～近代にかけての遺物が少量出土するのみで、古墳に関係のあるものは出土しなかった。

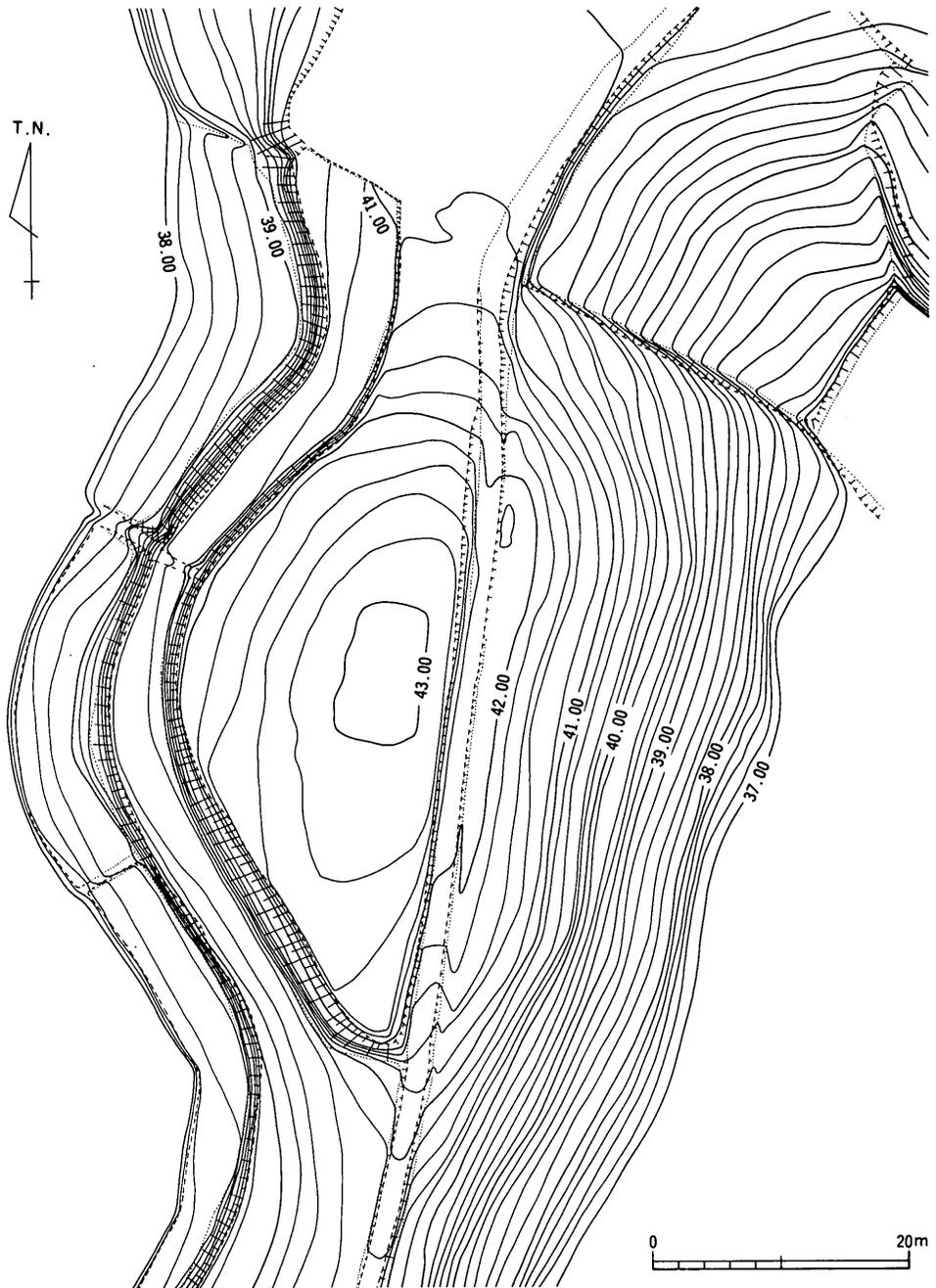


第6図 I・Jトレンチ平面図

(3) Kトレンチ (財田2号墳)

Kトレンチは、東尾根の中程にあり、先端より2つ目の最頂部で、当初より、今回の調査対象区内では、一番古墳のある可能性の強い所であった。当所は、尾根筋に小径が走っており、一段高くなった果樹園、西側の田畑が尾根筋の複雑な地形をうまく利用している (第7図)。

まず尾根筋に十字トレンチを設定し、調査を開始した。その結果、古墳の掘り方及び周溝を確



第7図 財田2号墳墳丘測量図 (調査前)

認したので、平面的にトレンチを拡張した。

この古墳は、開墾当時かなりの掘削を受けており、周溝及び排水施設は西側だけを、石室においては床面だけを残すきわめて保存の悪い状態で検出された。

以下この古墳について、各部分ごとに説明する。

墳丘・周溝

墳丘は、ほとんど削平を受けており、地山整形した墳丘基底部だけが高さ60～80cm残存しているだけであった。そのため版築状況が判らず、墳丘の高さが推定できない状態である。周溝は、西半分に残っており、最も残りの良い所で天幅170cm、深さ50cmである。またこの周溝より西側谷筋に向かって排水用の溝あるいは墓道と思われる遺構が検出された(第9図)。土層から見ても同時期に併存していたと思われる。

この古墳は、このように相当な破壊を受けているが、残りの良い所で古墳の規模を復原すると、径15mくらいの円墳であったことが推定できる。

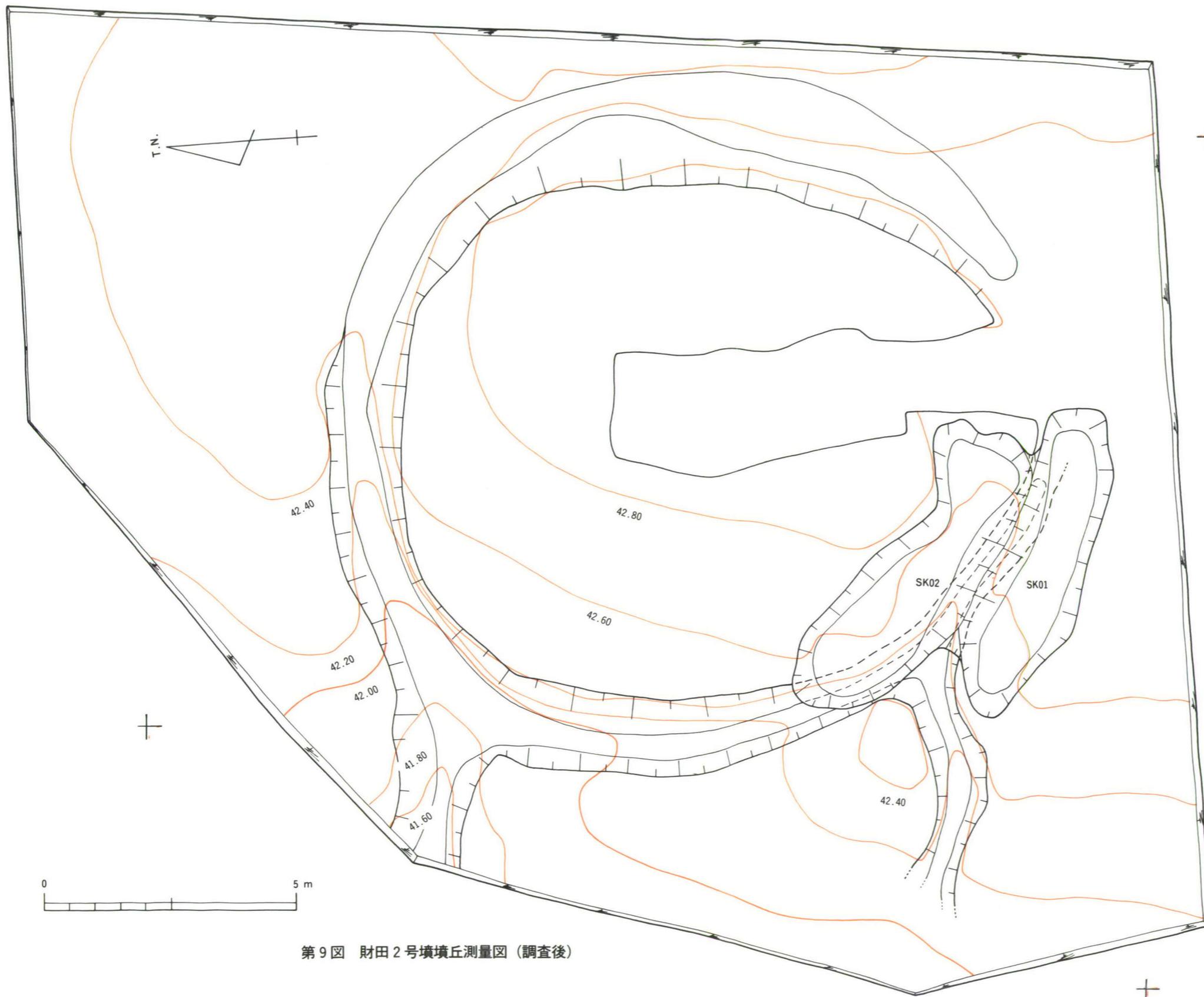
また、この古墳の南では、墳丘の一部と周溝を壊して、土坑SK01・02を検出した。この2つの土坑は、開墾時代に掘られたものと思われ、SK01中より、古墳に副葬されていたであろう須恵器、土師器などの土器が多量に出土した(第27図)。

石室(埋葬主体)

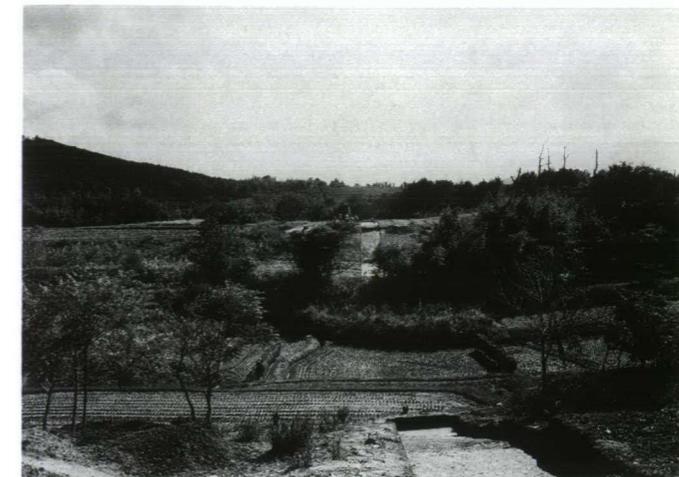
主体部は、玄室、羨道、墓道より構成されており、抜き取り穴及び羨道幅から推定して、おそ



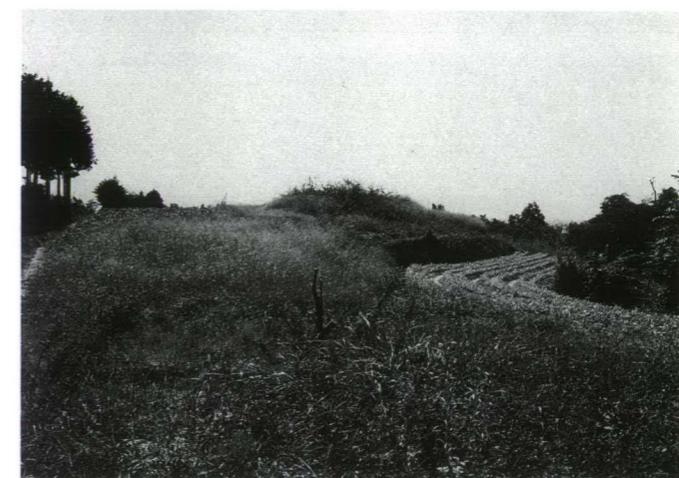
第8図 財田2号墳(南より)



第9図 財田2号墳墳丘測量図 (調査後)



第10図 東尾根全景 (西尾根より)



第11図 財田2号墳近景 (調査前 北より)



第12図 財田2号墳発掘作業風景

らく両袖式の横穴式石室であろうと思われる。開墾当時の攪乱によって、側壁石は基底石まで抜かれており、どのような上部構造になっていたかは不明である。しかし、わずかに残っている抜き取り穴の内側を床面の範囲と考えると玄室プランは長方形で、長さ約280cm、長幅約130cm、短幅120cmと少し中央部が広く、胴張りタイプの玄室であることが推定できる。羨道部は玄門石の抜き取り穴から推定して、長さ約180cm、幅約80cmになるとと思われる。また主軸の方位はS-3°-Eにとり、ほぼ真南に開口するものであったようである。

墓墳は、地山を掘り込み造られており、玄室・羨道部までをその範囲とする。長辺530cm、短辺270cmでやや胴の張った長方形を呈し、南短辺から墓道へとつながる。そしてその墓道は、そのまま周溝へと続いていたものと思われる。

次に床面構造は、地山を平らに整形し、直上到人頭大の板石を平らに敷き並べ、さらに亜角礫の玉砂利を敷くという構造をとっている。そこで玉砂利を敷いた面を第一面。板石を敷いた面を第二面としてそれぞれを説明する。第一面では墓道と羨道部の境到人頭大の石を配し、羨道部側に亜角礫を敷いて床面としている。その亜角礫の床面は玄室部まで続くが、袖石を境として、玄室部では5cm～10cmの亜角礫、羨道部では5cm程度の亜角礫と両者間で微妙な差を見せている。第二面は、地山整形の段階で玄室部と羨道部の境を一段高くして区切っており、そこに袖石が載っていたようである。この一段高くなった部分で区切られた玄室部では、人頭大の板石が平らに敷き並べられており、奥壁の方が整然と敷かれ、羨道側は少し粗くなっている。一方羨道部では、入口到人頭大の角礫を置き、そこから玄室との境の一段高くなった部分まで茶灰色土を整地し、その上に亜角礫を敷いている。なお、石敷の下からは、排水施設は検出されず、当初より古墳築造のなかにはなかった可能性がある。しかし、玄室部と羨道部の境の高まりが西側で切れて低くなっていることから、これが排水施設である可能性もある。

断面で見ると墓道と羨道部はほとんど同じ高さで、玄室は羨道部より5cm程高く、また、玄室と羨道の境の部分は羨道部より15cm程高く整地されている。

墓道では、閉塞石として使われていたと思われる人頭大の割石が散らばっていた。

以上述べてきたことをまとめてみると、1. 石室構造は、玄室・羨道・墓道を持った両袖式横穴式石室である。2. 第一面である玉砂利は大きさを変えて玄室部と羨道部に敷かれている。3. 第二面では、玄室部だけに20～30cm大の板石を平らに敷き、羨道部では茶灰色土を整地している。4. 玄室部と羨道部の境は地山整形して高く造られている。以上のことから、まず玄室部で第一次埋葬が行われ、のちに羨道部においても整地し、少し小さめの玉砂利を敷き第二次埋葬を行なったのではないかとということが床面構造から判かり、何回かの追葬があったことが窺える。

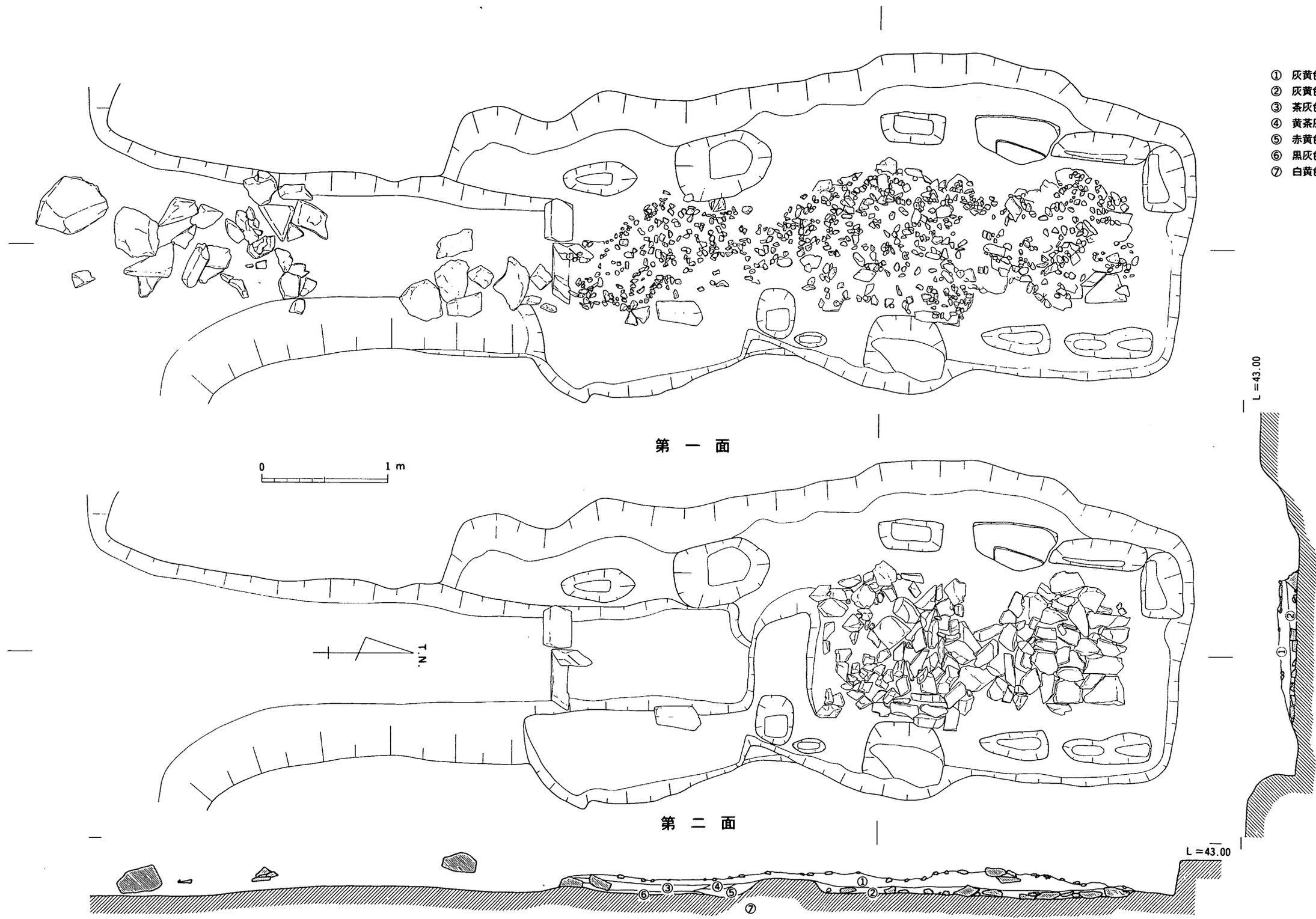


第13図 財田2号墳石室第一面（北より）



第14図 財田2号墳石室第二面（北より）

- ① 灰黄色土層 (玉砂利層)
- ② 灰黄色土層 (板石)
- ③ 茶灰色土層
- ④ 黄茶灰色土層
- ⑤ 赤黄色粘質土層 (地山が崩れたもの)
- ⑥ 黒灰色粘質土層
- ⑦ 白黄色粘土層



第一面

第二面

断面図

第15図 財田2号墳石室実測図

4. 遺物について

遺物出土状況

この古墳は、開壜時にかなりの破壊を受けているため、石室の掘り方及び床面・周溝の一部を残すのみであった。そのため墓境内の埋土も攪乱を受けており、この古墳に伴う遺物で確実なものは、床面に数点しかなかった。しかし、この古墳に伴うであろう遺物は、墳丘及び周溝を壊して掘られた土坑内より多数出土しており、これらも含めた遺物を示標として古墳の年代観を考えていきたい。

(1) 玄室内床面直上出土遺物

埋葬主体部床面直上遺物としては、耳環 1 点・鉄斧 1 点・鉄釘 13 点である (第17図)。当然副葬されていたであろう土器類は、床面直上からは検出されていない。

耳環 (第18図)

銅地金箔張りの耳環である。外径2.1~2.4cm、断面径0.5~0.6cmと、どちらも少し楕円形を呈している。この石室内より耳環は 1 個しか出土していない。

鉄斧 (第20図-2)

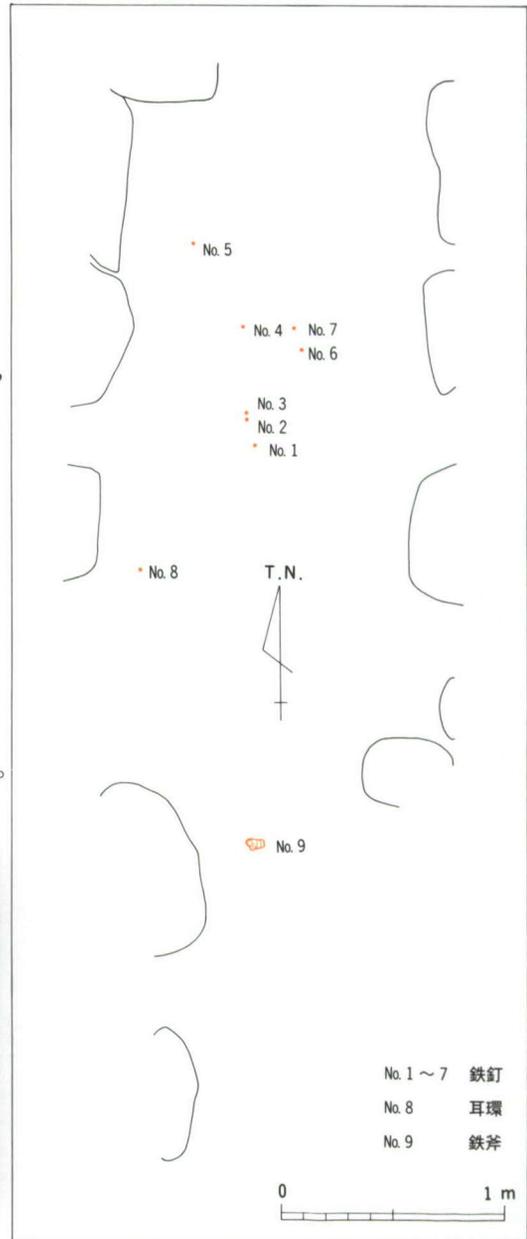
全長6.1cm、刃部 3 cm、袋部長3.1cm、最大幅4.7cmで袋部断面は隅丸の長方形を呈する。

鉄釘 (第20図-3~15)

玄室内床面直上からは、鉄釘が出土している。完全に残っている釘が無いので、本来の長さは



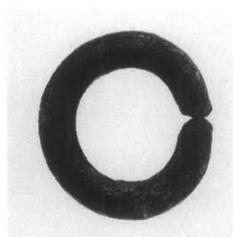
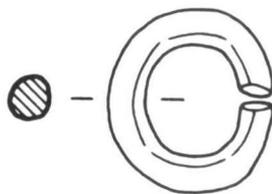
第16図 耳環出土状況



第17図 財田 2 号墳遺物出土状況図

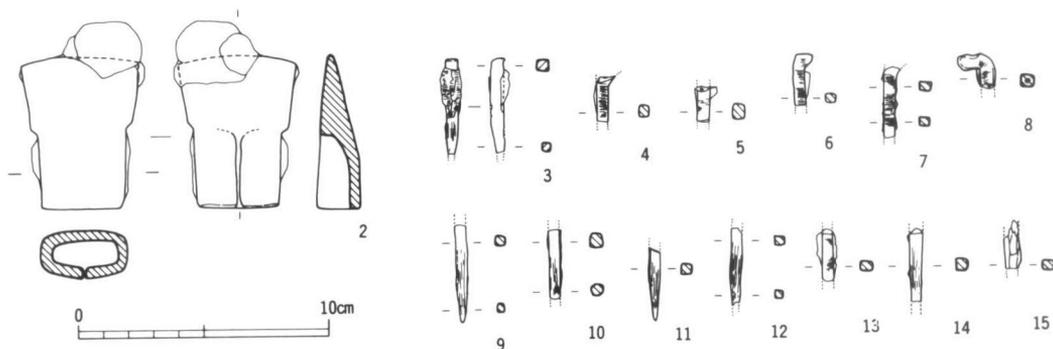
No. 1 ~ 7 鉄釘
No. 8 耳環
No. 9 鉄斧

不明であるがおそらく全長約5～6cmであ
っただろうと推定できる。断面の寸法はほ
ぼ5mm前後のもので、バラツキは少ない。
釘頭部は、おり曲げて作られたものとそ
のままのものがある。表面には木目痕が付着
しているものも見られる。

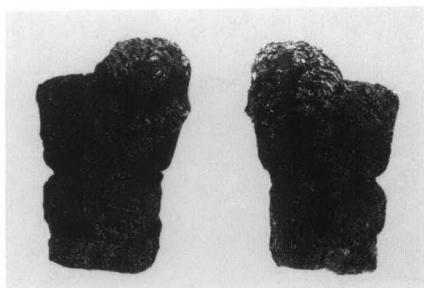


第18図 耳環実測図（実物大）

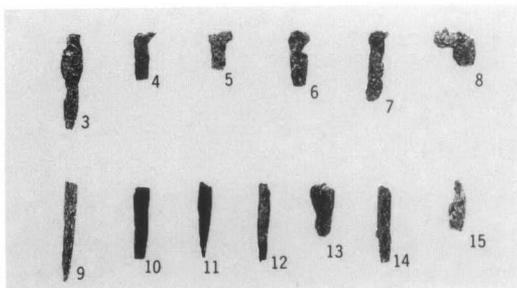
第19図 耳環



第20図 財田2号墳玄室床面直上遺物実測図



第21図 鉄 斧



第22図 鉄 釘

(2) 墓境内埋土遺物（第23図-1～8）

墓境内埋土より出土した遺物には、時期決定の示標となるものもある。しかし、開墾により床
面直上遺物以外は攪乱を受けておりその限りではない。

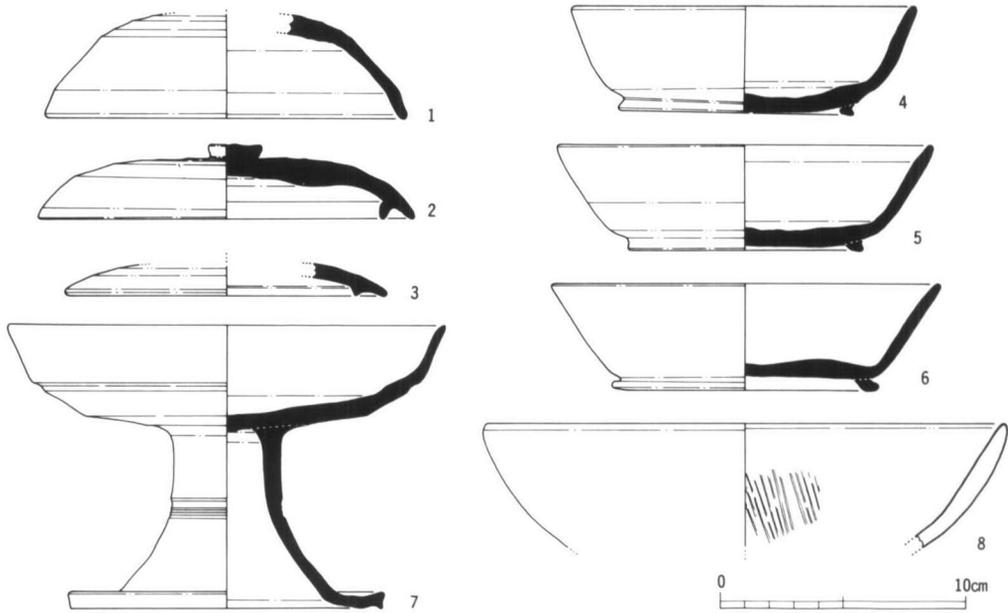
1～3は須恵器の坏蓋である。1は、天井部と体部に稜を持たず、少し内彎しながら口縁端部
になる。2は、宝珠つまみがつき、かえりのしっかりした坏蓋である。3は、かえりがかなり退
化した形態である。

4～6は須恵器の高台付坏身である。4・5は、底部から体部へと丸くつながり、口縁は直線
的に外方へ延び、口縁端部は丸くおさめている。6は、底部の境がはっきり判かり、体部は外方
へ直線的に延びる。外方に強くふんばった高台が付く。

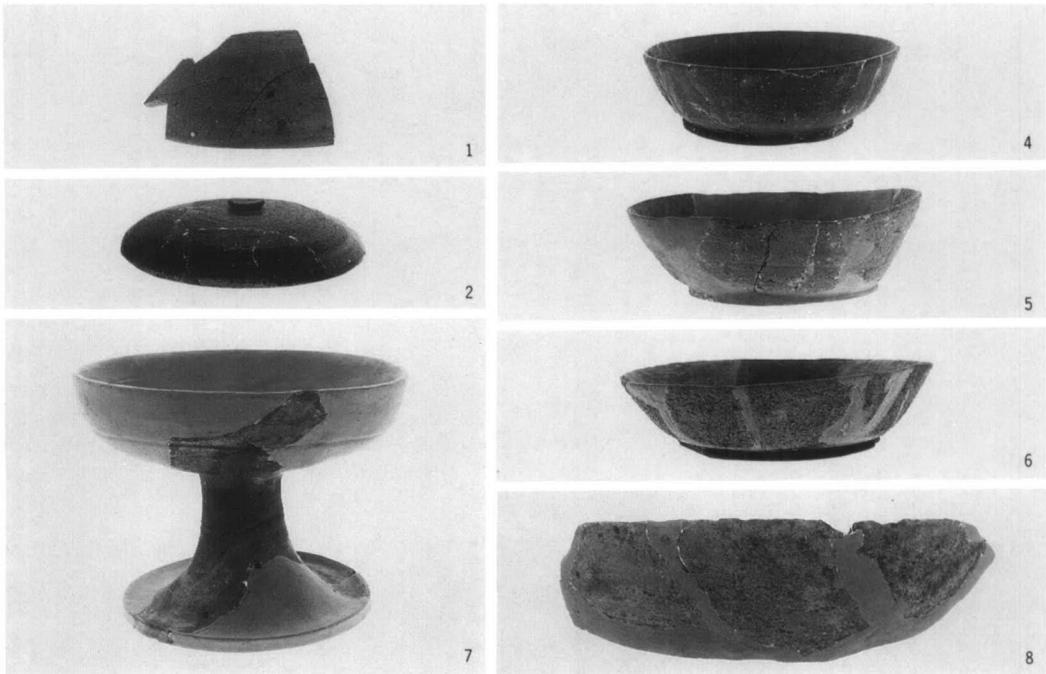
7は、須恵器高坏である。完全に還元焰焼成されていないのか全体に赤褐色を呈している。坏

部は体部と底部間に沈線を持ち、口縁端部に向かって外反するようになる。脚部は端部に向かって徐々に開き、端部は平らな面をとり、少し上下に肥厚している。

8は、土師器の鉢と思われる。体部は内彎しながら口縁端部になる。内面に刷毛を施し調整している。



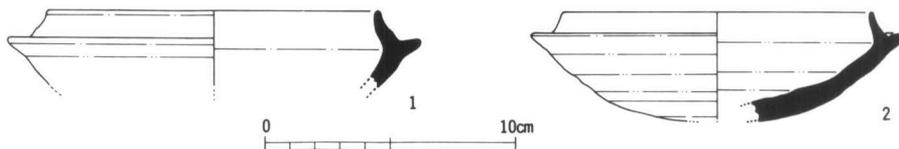
第23図 財田2号墳墓境内出土土器実測図



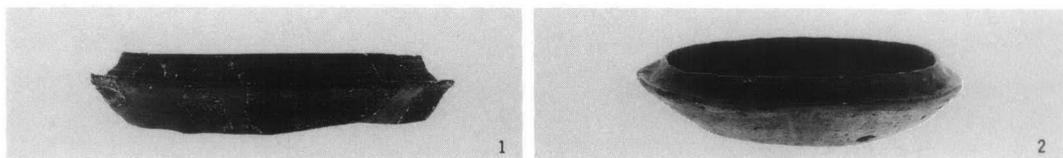
第24図 財田2号墳墓境内出土土器

(3) 周溝内出土遺物 (第25図-1~2)

この古墳の周溝は、西側で少し残っているだけで東側では削平を受けてほとんど残っていなかった。そのためか周溝より出土した遺物は少なく、実測可能なものは2点にすぎなかった。1・2は須恵器の坏身である。1は、立ちあがりがいっきりして、焼成も良く当古墳出土須恵器の中では一番古い部類に属すると思われる。2は、焼成が悪く、生焼けの感がある。



第25図 財田2号墳周溝内出土土器実測図



第26図 財田2号墳周溝内出土土器

(4) SK01出土遺物 (第34・36・38図-1~36)

土坑SK01・02は古墳の南西隅に墳丘と周溝を切り込むようにあり、古墳の開壘当時出土した遺物が多量に埋まっていた。

1~4は須恵器の坏蓋である。1は、天井部と体部間に稜線がなく、そのままゆるやかに内彎しながら口縁端部になる。天井部はヘラ切りのままの状態にしており、造りは雑である。3は、おそらく宝珠つまみのつく坏蓋で、口径が小さく、内面のかえりがしっかりしている。4は、かえりがなくなった段階のもので、おそらく宝珠つまみを持つものであろう。口縁端部は下方へ短く屈曲し、丸くおさめている。

5~10は須恵器の坏身である。5~6は立ちあがりが高小化し、全体に浅くなった坏身である。8は、坏蓋と坏身が逆転した直後のもので、高台がつかないものである。底部から体部にかけて少し稜をつけ、体部は真っ直ぐ外方に延びる。9は、やや小振りの坏身で、外方に強くふんばった高台が付く。

11~12は高坏である。11は、坏部が小振りであるのでおそらく長脚2段の脚部が付くと思われる。12は、脚部で透しが3方にあき、脚部端部は外方に面を作り、わずかな凹線を持つ。

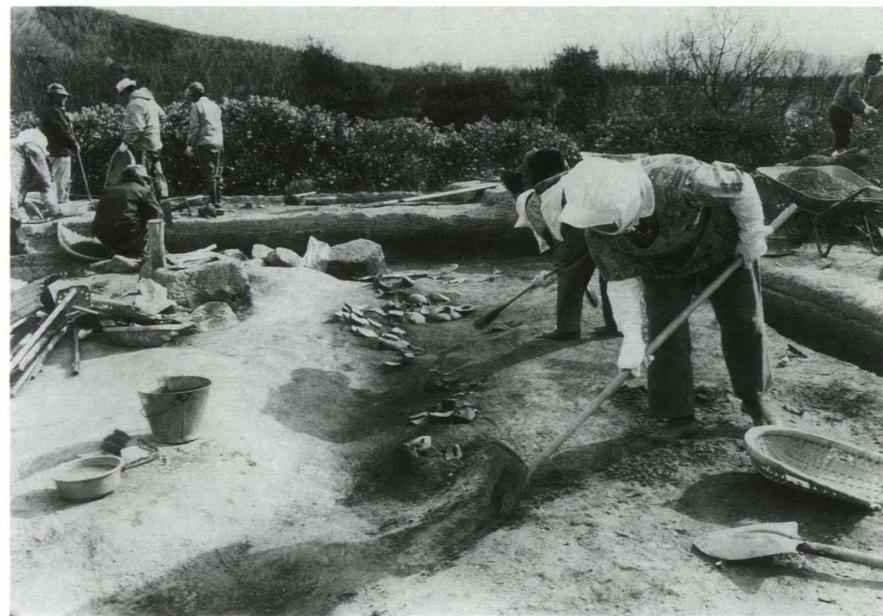
13~15は短頸壺である。この3つの土器で肩に張りを持たないものから持つものへの変化が認められる。15は、底部においても明らかに平らな面を持っている。

16は、土師器・壺である。体部はほぼ球形を成し、頸部は外方へ真っ直ぐ延びる。

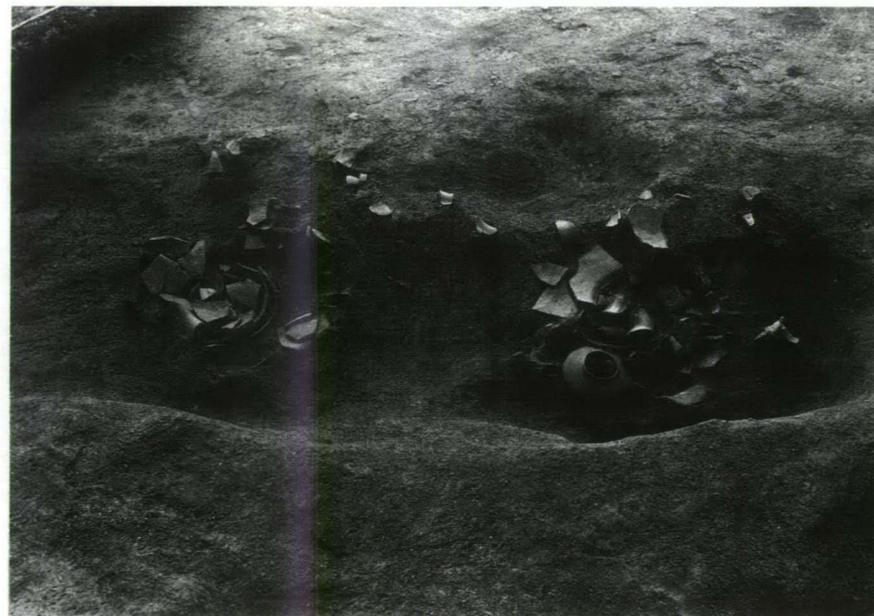
17は、土師器・椀である。内外面にヘラミガキがある。口縁部内面に沈線を持つ。



第27図 SK01平面図



第28図 SK01発掘作業風景



第29図 SK01遺物出土状況



第30図 SK01遺物出土状況

18～19は土師器・高坏で、坏部は底部と体部間に沈線を持つものと持たないものがある。体部は、内彎しながら口縁端部にいたる。

20は、口縁部が破損しているが、体部の形態より脚付碗と思われる。体部にクシ描き列点文を施す。

21～22は平瓶である。22は、肩の張りが強く、底部は平底になっている。

23は、広口壺である。肩部にヘラ描きの文様を描いている。

24～26は長頸壺である。脚が付くもの(24・25)と高台が付くもの(26)があり、脚が付くものは肩に張りがなく丸くなっていて、高台の付くものには肩に張りがあり稜が付く。

27は、横瓶である。内面に同じ円文の叩きを残す。



第31図 広口壺肩部ヘラ描き拓影(第33図-23)

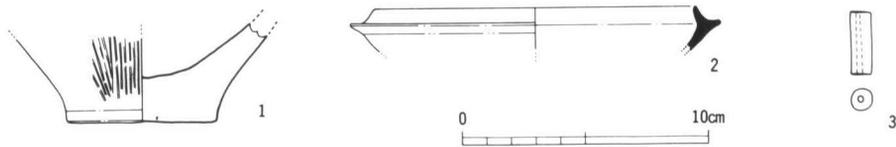
28は、堤瓶である。正面にはクシ描きが全面に施されており、肩部には菱小化した耳が付く。

29～32は壺である。29は、直口壺で口縁が直線的にやや外方に延びる。肩部に2条の沈線が施されている。30～32は、やや小振りの壺で口頸部及び肩部にクシ描きを施すもの(30)もある。口縁端部は、丸くおさまられているもの(31)や、外方に面を持つもの(32)がある。

33～36は甕である。33は、体部を穿孔し、儀器化した甕である。34は、土師器の甕である。胴部が長く延びる長胴甕である。36は、肩部にクシ描きを施し、口縁端部は外面に凹線を2条持つ。

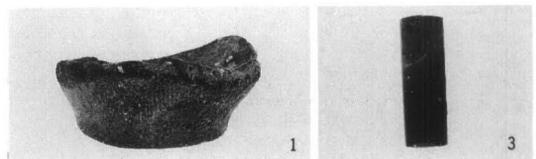
(5) K トレンチ耕作土出土遺物 (第32図-1～3)

K トレンチの耕作土より遺物が出土している。1は、弥生土器の底部である。外面に刷毛調整を施し、底部はしっかりした平底を呈する。2は、須恵器坏身である。受け部・立ちあがり共にかなり菱小化している。3は、壁玉製の管玉である。

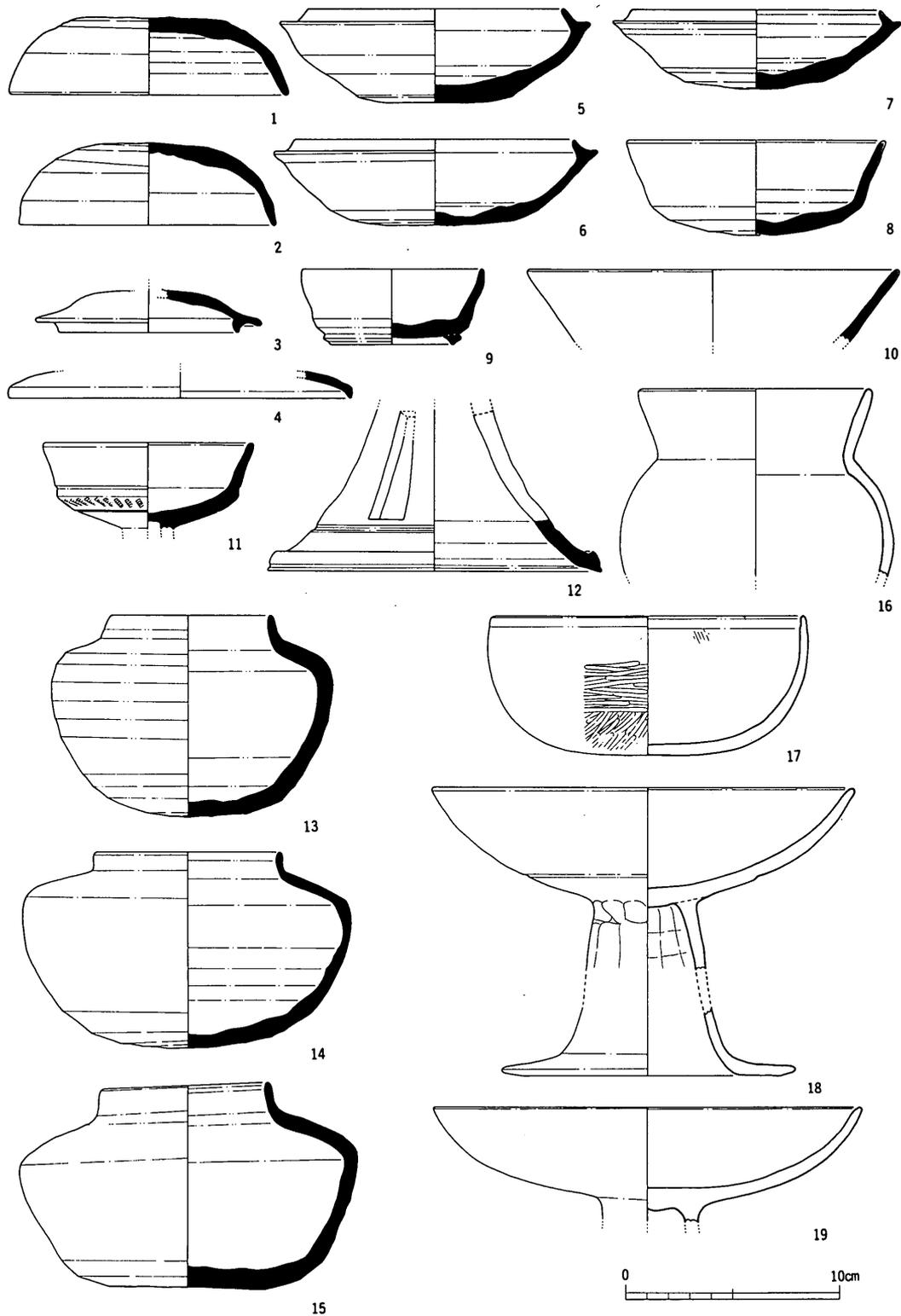


第32図 K トレンチ耕作土出土遺物実測図

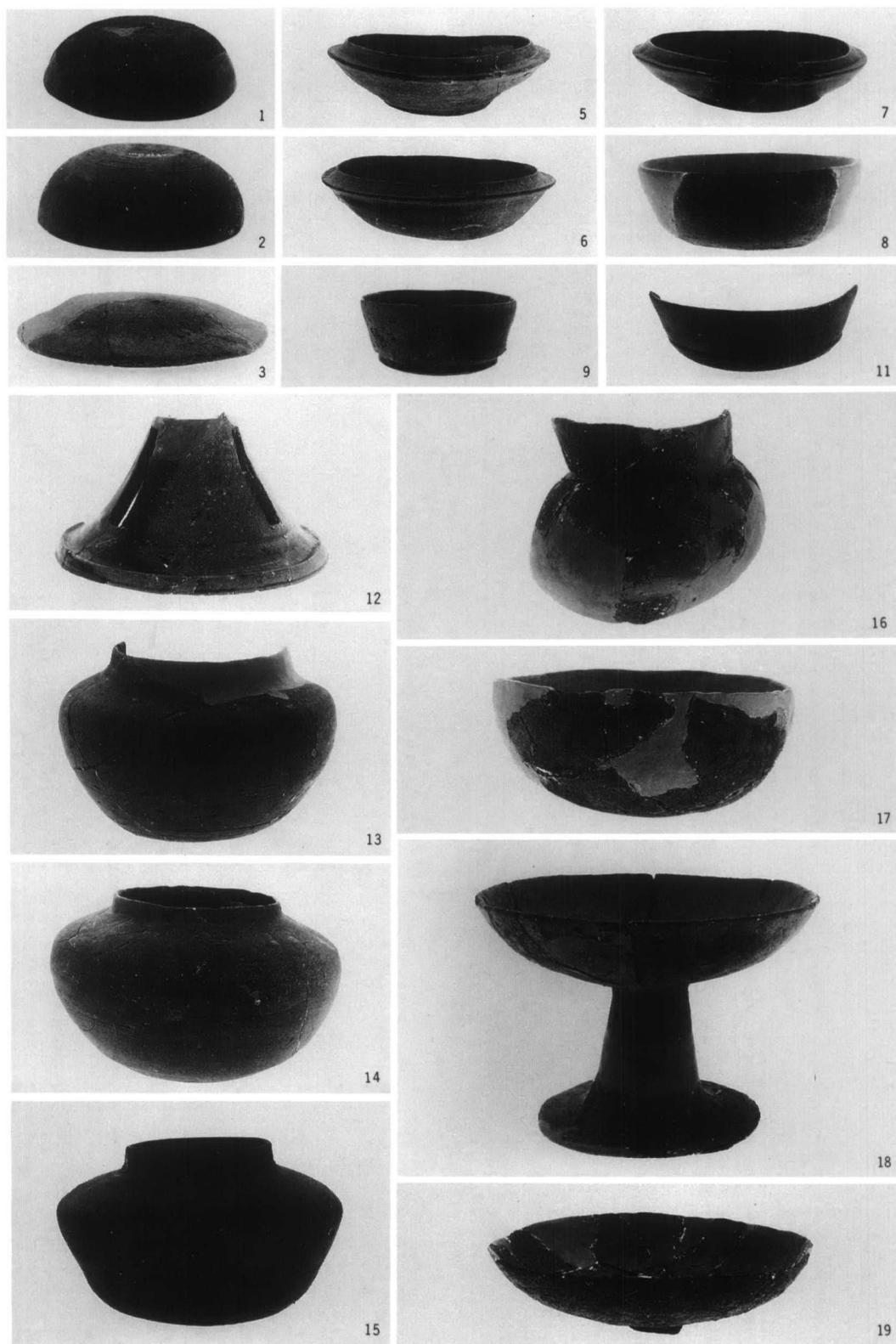
須恵器坏身と管玉は、古墳に副葬されていたものであろうが、弥生土器については、おそらく、この丘陵上に弥生時代の遺構があったことを髣髴とさせるものである。



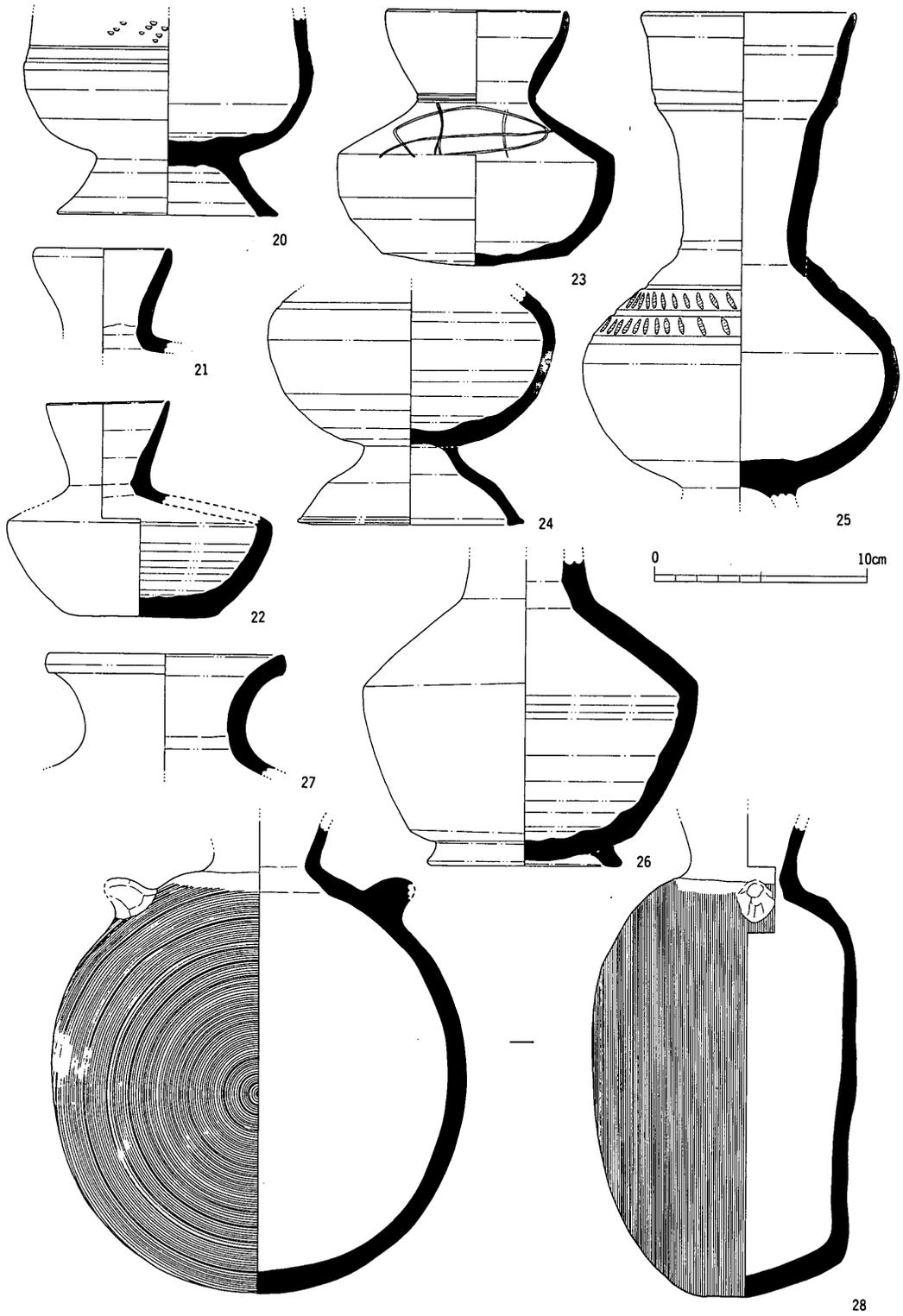
第33図 K トレンチ耕作土出土遺物



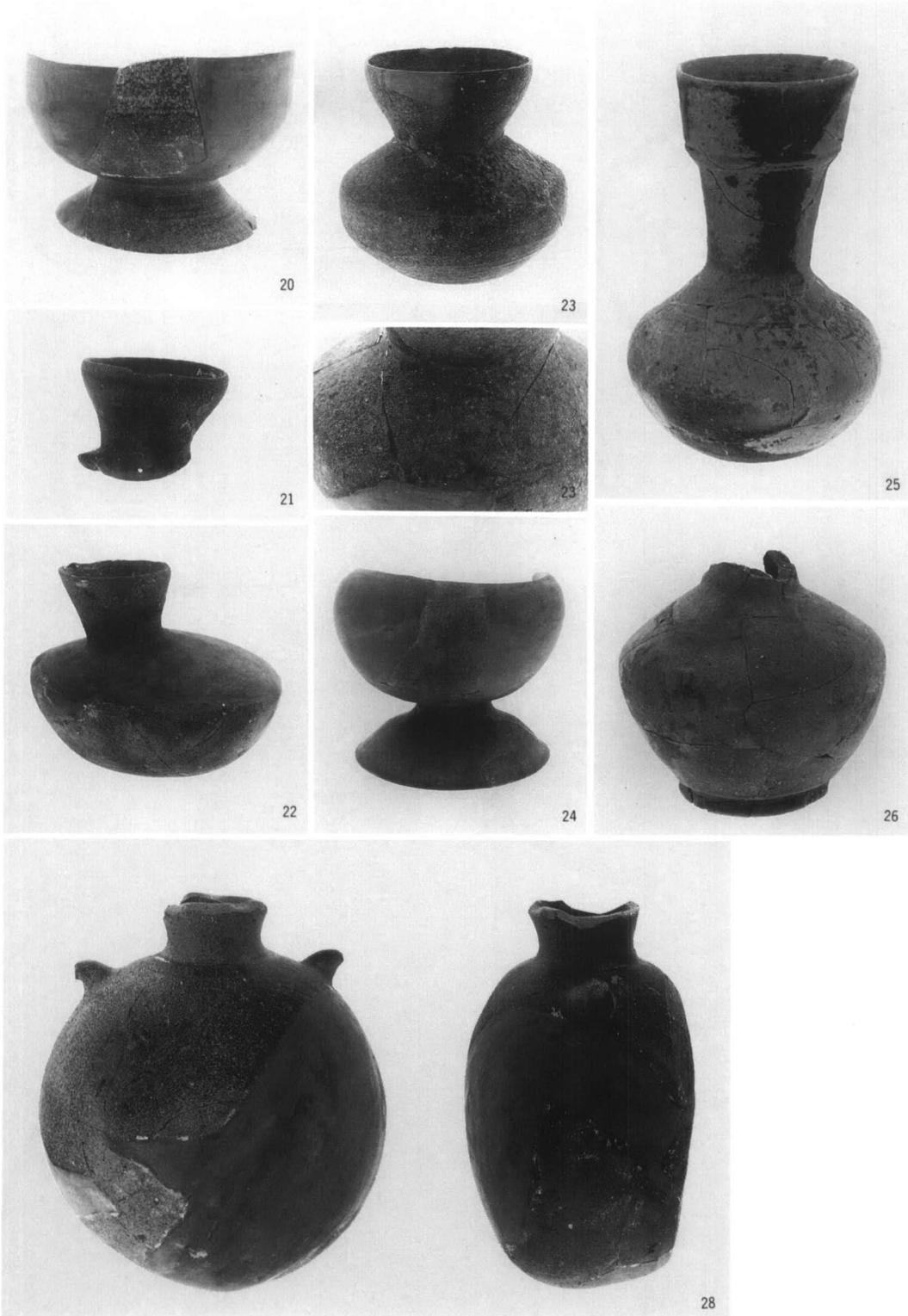
第34图 SK01出土土器实测图 (1)



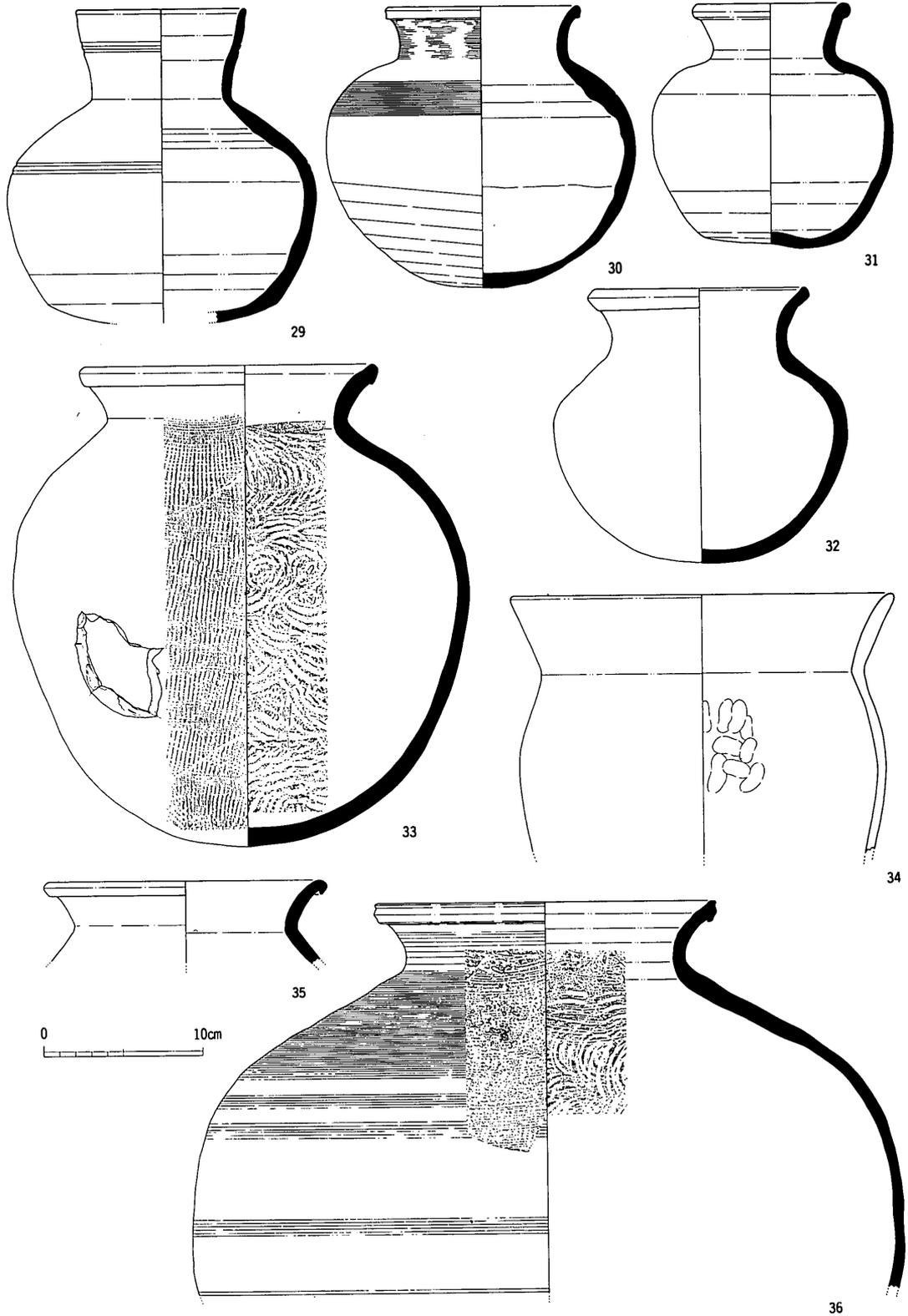
第35图 SK01出土土器 (1)



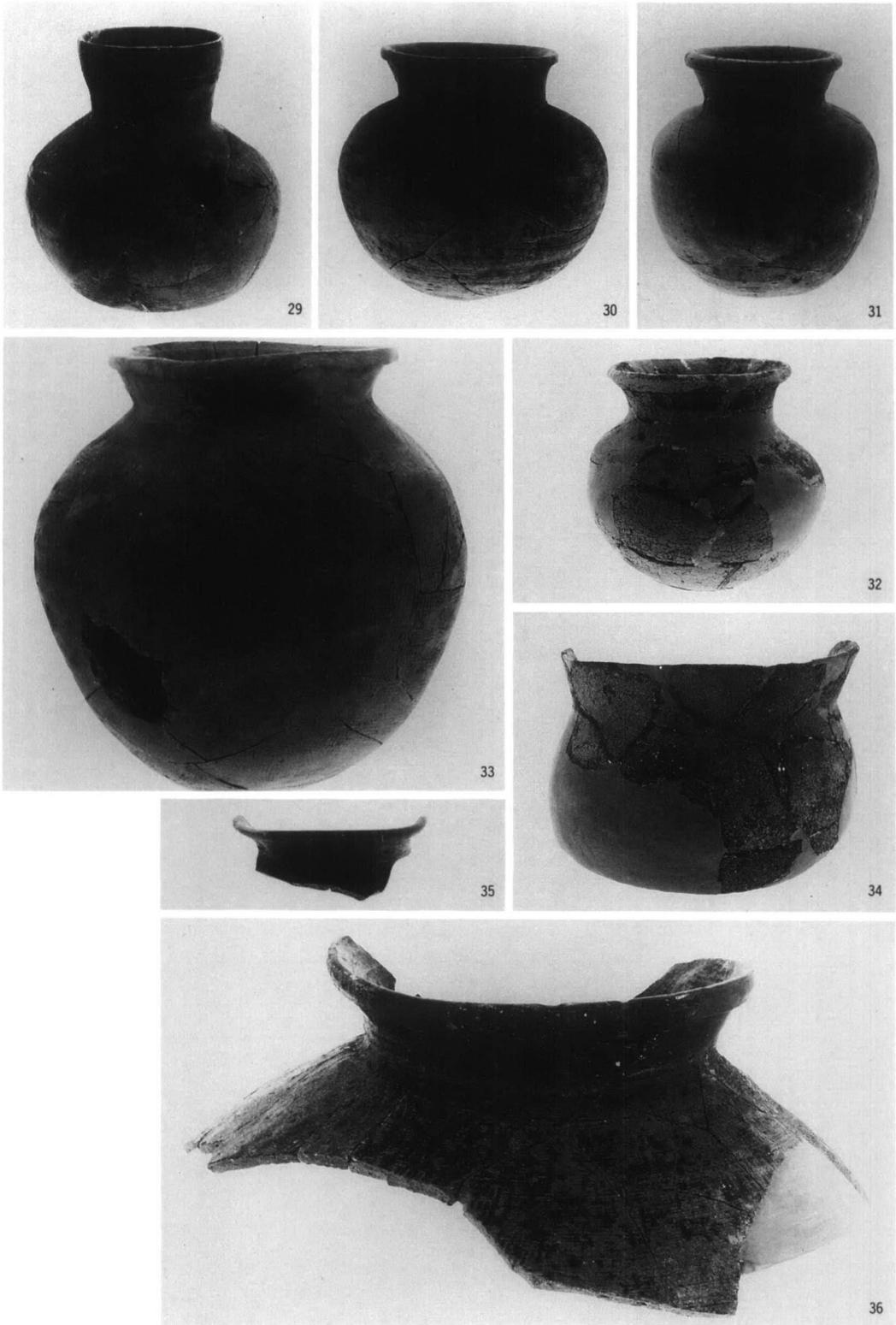
第36图 SK01出土土器实测图 (2)



第37図 SK01出土土器 (2)



第38图 SK01出土土器实测图 (3)



第39图 SK01出土土器 (3)

第1表 遺物観察表

周溝内出土遺物

()内は復元値

| 土器 番号 | 器種 | 法量(cm) | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 形態及び手法上の特徴 |
|----------|--------|--------|-------|----|--------------------------------|----|------|--|
| | | 口径 | 器高 | 底径 | | | | |
| 1 | 須恵器 坏身 | 13.0 | - | - | 密 0.5~1mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良好 | 青灰色 | 立ち上がりがしっかりしていて、少し古手の様相を持つ。 |
| 2 | " | 12.2 | (4.4) | - | やや粗い 0.5~2mm程度の 砂粒を少量含む。 | 不良 | 淡黄灰色 | 全体に磨耗しており、外面底部の調整については不明。立ち上がりは、内方向に真っ直ぐ延びる。 |

墓境内出土遺物

()内は復元値

| 土器 番号 | 器種 | 法量(cm) | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 形態及び手法上の特徴 |
|----------|----------|--------|-------|------|---------------------------------|----|-------------------|---|
| | | 口径 | 器高 | 底径 | | | | |
| 1 | 須恵器 坏蓋 | 14.4 | (4.3) | - | 密 0.5~2mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良 | 淡灰色 | 天井部と体部の境がなく、そのまま口縁端部になる。左まわりのヘラズリが施されている。 |
| 2 | " | 15.1 | 3.0 | - | 密 | 良 | (外)暗黄灰色 (内)淡灰色 | 外面天井部は、左まわりのヘラケズリが施され、中央部には扁平つまみがつく。 |
| 3 | " | 12.7 | - | - | やや粗い 3mm程度の砂粒 を少量含む。 | 良 | (外)暗灰色 (内)淡灰色 | 内面のかえりが三角形に少しついている。破片なのでつまみがついていたかは不明。 |
| 4 | 須恵器 高台付坏 | 13.7 | 4.2 | 9.6 | 密 細砂粒を含む。 | 良 | 灰色 | 体部は、少し外反しながら口縁端部に至る。底部には、少し外方にふんばった高台が付く。 |
| 5 | " | 15.0 | 4.2 | 9.6 | やや粗い 0.2~1mm程度の 砂粒をかなり含む。 | 良 | 淡灰色 | 体部はほぼ真っ直ぐに外方に延び、底部端には低い高台が付く。 |
| 6 | " | 15.6 | 4.2 | 10.9 | 密 細砂粒を少量含む。 | 不良 | 暗灰色 | 全体に瓦質っぽく焼かれている。底部には少し、外方にふんばった高台が付く。 |
| 7 | 須恵器 高坏 | 17.6 | 11.4 | 12.8 | 密 0.2~1mm程度の 砂粒を少量含む。 | 不良 | 褐色 | 脚部の中央部に2条の凹線を持つ。坏部においては底部と体部間に明瞭な凹線を持つ。内面見込み部には不定方向のナデを施している。 |
| 8 | 土師器 鉢 | 21.0 | - | - | 密 細砂粒を少量含む。 | 良 | 淡黄褐色 | 全体に磨耗がひどく調整は明確ではないが、内面にヘラ磨きらしきものがある。 |

SK01 出土遺物

()内は復元値

| 土器 番号 | 器種 | 法量(cm) | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 形態及び手法上の特徴 |
|----------|--------|--------|-----|----|--------------------------------|----|--------------------|---|
| | | 口径 | 器高 | 底径 | | | | |
| 1 | 須恵器 坏蓋 | 12.8 | 3.5 | - | 密 1~2mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良 | 淡緑灰色 | 外面底部はヘラ切りのままである。内面には不定方向のナデが施されている。 |
| 2 | " | 11.9 | 3.8 | - | 密 0.5~2mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良好 | (外)緑青灰色 (内)暗青灰色 | 外面はきれいに左まわりのヘラケズリを施し、内面には不定方向のナデが施されている。 |
| 3 | " | 10.6 | - | - | やや粗い 0.5~1mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良 | 淡灰色 | 内面のかえりがしっかりしている。おそらく宝珠つまみがついていたと思われる。 |
| 4 | " | 15.9 | - | - | 密 | 良 | 淡灰色 | 口縁端部を下方に折り曲げただけの口縁である。おそらく天井部につまみがついていたものと思われる。 |

()内は復元値

| 土器 番号 | 器 種 | 法 量(cm) | | | 胎 土 | 焼成 | 色 調 | 形態及び手法上の特徴 |
|----------|---------------|---------|--------|------|--------------------------------|----|--------------------|---|
| | | 口径 | 器高 | 底径 | | | | |
| 5 | 須恵器 坏身 | 11.9 | 4.3 | — | 密 0.5~2mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良好 | (外)淡青灰色 (内) 青灰色 | 外面底部はヘラ切りのままでヘラケズリによる調整は行なわれていない。 |
| 6 | 〃 | 13.0 | 4.0 | — | 密 1mm前後の砂粒 を少量含む。 | 良 | (外) 青灰色 (内) 淡灰色 | 外面底部は左まわりのヘラケズリを 施し、内面見込み部には不定方向の ナデがある。 |
| 7 | 〃 | 11.5 | 3.6 | — | 密 0.5~2mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良 | (外)暗青灰色 (内) 褐灰色 | 外面底部を粗いヘラケズリのままに している。右まわりのヘラケズリ。 内面見込み部に不定方向のナデが施 されている。 |
| 8 | 〃 | 11.9 | 4.4 | — | 粗い 0.5~1mm程度の 砂粒を含む。 | 良 | 淡灰色 | 底部はヘラケズリ後ナデられている。 底部と体部間にはやや強い稜を成す。 |
| 9 | 須恵器 高台付坏 | 8.3 | 3.5 | 6.5 | 密 | 良 | (外) 青灰色 (内)淡青灰色 | 底部には、外に強くふんばった高台 を持つ。 |
| 10 | 〃 | 17.2 | — | — | やや粗い 1mm以下の砂粒 を少量含む。 | 良好 | 青灰色 | 体部は外方へ真っ直ぐ延びる。 |
| 11 | 須恵器 高坏 | 9.6 | — | — | やや粗い | 良 | (外) 青灰色 (内) 淡灰色 | 坏部下半にクシ目文が施されている。 |
| 12 | 〃 | — | — | 15.7 | 密 0.5~2mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良好 | 青灰色 | スカシは3方に穿ている。脚部端部 は面を持っており、その面下半に凹 線を施す。 |
| 13 | 須恵器 短頸壺 | 7.4 | 9.4 | — | 密 1~2mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良好 | 青灰色 | 底部は左まわりのヘラケズリが施さ れている。肩部には稜を持たない。 |
| 14 | 〃 | 8.6 | 9.3 | — | 密 0.2~1mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良好 | 青灰色 | 底部は左まわりのヘラケズリが施さ れている。肩部には少し稜を持ち、 口縁は短く立ち上がる。 |
| 15 | 〃 | 7.7 | 9.4 | — | 密 0.5~3mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良好 | 緑青灰色 | 底部は左まわりのヘラケズリが施さ れている。肩部には明確な稜を持ち、 口縁は短く立ち上がる。 |
| 16 | 土師器 壺 | 10.6 | — | — | 密 0.5~2mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良 | 黄褐色 | 全面ナデ調整されている。体部はほ ぼ球形に近くなっており、頸部は外 方に真っ直ぐ延びている。口縁端部 内面に沈線を持つ。 |
| 17 | 土師器 椀 | 14.5 | 6.5 | — | やや粗い 1mm以下の砂粒 を少量含む。 | 良 | 褐黄色 | 内面は摩滅して、調整は不明である が、外面は丁寧にナデ調整されてお り、一部にはヘラ磨きもある。 |
| 18 | 土師器 高坏 | 19.6 | (13.6) | 13.7 | 密 細砂粒を含む。 | 良 | 黄褐色 | 脚部は筒部と裾部にわかれる。坏部 は底部と体部間に凹線があり、内罫 しながら口縁端部に至る。 |
| 19 | 〃 | 19.8 | — | — | 密 0.5~1mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良 | 褐色 | 全体に表面は剥落して調整は不明で ある。坏部は少し内罫しながら口縁 端部に至る。口縁端部は丸くおさめ られている。 |
| 20 | 須恵器 脚付碗 | — | — | 10.4 | 密 細砂粒を少量含 む。 | 良好 | (外) 青灰色 (内)淡青灰色 | 体部にクシ描き列点文がある。脚部 は真っ直ぐ外方に延びる。 |
| 21 | 須恵器(平瓶) | 6.2 | — | — | 密 | 良好 | 青灰色 | 平瓶の口縁と思われる。口縁は内罫 しながら外方向へ延びる。 |
| 22 | 須恵器 平瓶 | 5.7 | 9.8 | — | やや粗い 0.5~1mm程度の 砂粒を少量含む。 | 良 | 淡灰色 | 肩部に明確な稜線を持つ。 |
| 23 | 須恵器 広口壺 | 8.3 | 11.7 | — | やや粗い 0.2~1mm程度の 砂粒を含む。 | 良 | 青灰色 | 底部は左まわりのヘラケズリが施さ れている。肩部に明確な稜を持ち、 上半に線刻を持つ。 |
| 24 | 須恵器 脚付 長頸壺 | — | — | 10.7 | 密 1mm以下の砂粒 を少量含む。 | 良 | 淡灰色 | 脚は外にふくらみながら端部に至る。 長頸壺の肩部には一条の凹線を持つ。 |

()内は復元値

| 土器番号 | 器種 | 法量(cm) | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 形態及び手法上の特徴 |
|------|-----------|--------|--------|-----|----------------------------|----|---------------------|---|
| | | 口径 | 器高 | 底径 | | | | |
| 25 | 須恵器 脚付長頸壺 | 9.8 | - | - | 密 0.5~2mm程度の砂粒を少量含む。 | 良 | 淡黄灰色 | 肩部に2段、クシ描き列点文がある。口縁は2重口縁になっている。 |
| 26 | 須恵器 長頸壺 | - | - | 9.2 | 密 0.2~1mm程度の砂粒を含む。 | 良 | 淡灰色 | 外方に強くふんばった高台が付く。首部は細くしまり口縁部へと続く。 |
| 27 | 須恵器 横瓶 | 11.0 | - | - | 密 細砂粒を少量含む。 | 良 | 淡青灰色 | 内面に同心円文が施されている。口縁端部は外方に面を持つ。 |
| 28 | 須恵器 埴瓶 | - | - | - | 密 0.5~2mm程度の砂粒を含む。 | 良 | 青灰色 | 正面にはクシ描きがあり、側面に萎小化した耳がついている。 |
| 29 | 須恵器 直口壺 | 10.4 | (19.4) | - | 密 | 良好 | (外) 青灰色 (内) 淡青灰色 | 頸部と肩部に2条の凹線が施されている。底部には左まわりのヘラケズリが施されている。 |
| 30 | 須恵器 壺 | 9.0 | 14.9 | - | 密 1~2mm程度の砂粒を少量含む。 | 良好 | 淡青灰色 | 口縁端部は丸くおさまられている。底部は左まわりのヘラケズリが施され、それ以外は全体にヨコナデである。 |
| 31 | 〃 | 11.7 | 17.4 | - | 密 細砂粒を少量含む。 | 不良 | 淡黄灰色 | 肩部にクシ描きが施されている。体部下半まで左まわりのヘラケズリが施されている。 |
| 32 | 〃 | 13.0 | (17.1) | - | 密 細砂粒を含む。 | 不良 | 淡黄色 | 全体に磨耗している。内面には同心円文らしきものが認められる。 |
| 33 | 須恵器 甕 | 18.0 | 29.9 | - | 密 細砂粒を少量含む。 | 良 | 淡黄灰色 | 外面は格子目叩き、内面は同心円文が残る。体部中央部に穿孔があり、儀器化されている。 |
| 34 | 土師器 甕 | 23.6 | - | - | やや粗い 細砂粒を含む。 | 良 | 黄褐色 | 胴の長い甕になると思われる。内面は指頭痕があり、外面はナデ調整されている。 |
| 35 | 須恵器 甕 | 17.0 | - | - | やや粗い 0.2~2mm程度の砂粒を少量含む。 | 良好 | 青灰色 | 口縁端部は小さく下方に折り曲げられている。体部外面は格子叩き、内面は同心円文叩きである。 |
| 36 | 〃 | 21.0 | - | - | 密 2mm前後の砂粒を少量含む。 | 良 | 青灰色 | 外面は格子目叩きの後、肩部にクシ描きが施され、内面は同心円文が残る。口縁端部が上下に肥厚し、外面に凹線を持つ。 |

註 ヘラケズリの右まわり、左まわりについては、この場合、調整を施した時の向きから見て、砂粒の動いている方向へヘラケズリの方向と考えている。

耕作土出土遺物

()内は復元値

| 土器番号 | 器種 | 法量(cm) | | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 形態及び手法上の特徴 |
|------|-----------|--------|----|-----|----------------------|----|--------------------|---|
| | | 口径 | 器高 | 底径 | | | | |
| 1 | 弥生土器(壺)底部 | - | - | 6.1 | 粗い 1~3mm程度の砂粒を含む。 | 良 | (外) 褐色 (内) 淡黄茶色 | 底部はしっかりしている。体部外面は7本/cmの刷毛目調整されている。 |
| 2 | 須恵器 坏身 | 12.9 | - | - | 密 | 良 | 淡青灰色 | 受け部はしっかりしているが立ち上がりはかなり萎小化しており、蓋と身の逆転の前段階のものと思われる。 |

5. まとめ

今回の調査結果から、遺跡台帳に記載のある財田古墳群の位置を検討してみたい。

鳥越山からは、南西方向に多数の尾根が派生している。これらの尾根は、七尾の名が示すように非常に起伏に富み、ゆるやかに下りながら三豊平野に延びている。そのなかに財田古墳群は存在する。調査前、1号墳は調査対象区内の西尾根の基部に、2号墳は中央部に、3号墳は先端部に、そして4号墳は東尾根の先端部に位置すると考えられていた。それを、今回の調査結果及び地元住民からの聞きとりによって、1～3号墳の位置を第42図のように変更した。

調査の対象となった1・2号墳は、墳丘が残っていないため、まずトレンチ調査を行なった。しかし、開墾当時かなりの破壊を受けたためか設定したトレンチから1・2号墳は結局検出されなかった。

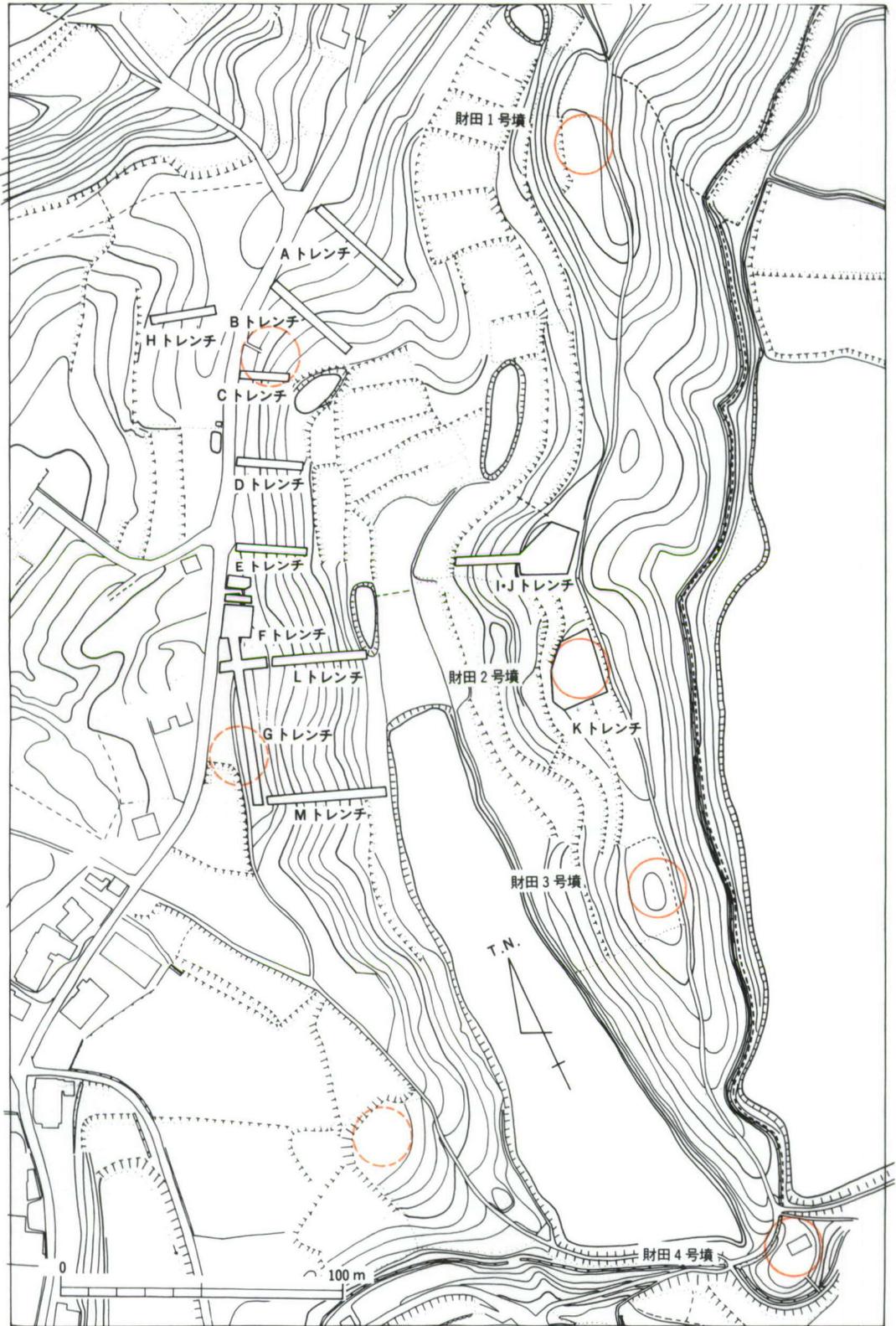
また、財田3号墳については、昭和61年度に福岡神社跡として発掘調査を行なったが、古墳に関する遺構・遺物は検出されなかった。したがって、財田1～3号墳は、西尾根には当初より無かった可能性がある。しかし、鳥越山から派生した尾根には、四ツ塚古墳群などたくさん古墳群が存在したと思われる、一概に西尾根に無かったとは言いきれない。ところが東尾根では、Kトレンチより古墳が検出され、地元からの聞きとりによってもこの東尾根のそれぞれの頂部ごとに古墳があったと言われている。これらのことから、おそらく、財田古墳の1～3号墳は、西尾根ではなく東尾根にあったのではないかという結論に達した。そのために今回の調査の結果で財田古墳群の位置を変更し、Kトレンチで検出された古墳を財田



第40図 財田3号墳



第41図 財田4号墳



第42図 財田1～4号墳位置図 (調査後)

2号墳とする。しかし、今後、新資料・新発見があり次第さらに検討を加えていくことにしたい。

床面構造

財田2号墳は、墓墳の掘り方に床面だけを残すのみで、それ以外はほとんど破壊されていた。そのために石室構造については、あまり言及できないので、ここでは、わりと残りのよい床面構造について考えてみたい。前述したように玄室部の床面は玉砂利を敷いている第一面と、板石を平らに敷いている第二面からなる。これは、埋葬面が二面あるというのではなく、当時のこの地域の特徴としての二面構造であり、おそらく排水施設を意識した造りであったと思われる。また羨道部の床面は玄室部の第二面と同じ高さまで整地し、その上に玄室部の玉砂利とは少し大ききの違う玉砂利を使って第一面としている。これらのことからおそらく第1回目の埋葬に際しては、まず玄室部だけを埋葬施設として考え、2回目以降に羨道部まで玉砂利を敷き、埋葬を意識して床面を整えたものと思われる。

石室内からは、土器が出土していないので、追葬があったとは言えない。しかし、周辺の攪乱層及び土坑からはこの古墳に伴っていたと思われる須恵器が出土している。この須恵器を分類すると、3時期6形式あることから、最低2回の追葬があったと思われる。

このように、遺物及び床面構造の面から追葬があったことが窺える。

次にこの古墳の埋葬の時期であるが、陶邑編年でII-6・III期に比定され、おおよそ第1回目は6世紀末頃、第2回目は7世紀前半、第3回目は7世紀後半といえることができる。

以上のように財田古墳群の位置の変更、築造・追葬時期について述べた。今回、財田2号墳で認められた床面の二重構造は、後期古墳において特に西讃地方に多く認められているが、その他観音寺市・長砂古墳群、母神山古墳群内の黒島林支群のように床面構造の第二面より棺床を意識して構築した古墳、また坂出市・岡宮古墳のように複室構造を意識した古墳もあることから三豊地方ひいては香川県内の床面構築方法の特殊性の意義がこれからの大きな課題となってくるであろう。今後の資料の増加を待ちたい。

— 発掘作業に従事した人々 —

| | | |
|--------|--------|------------|
| 井上 久 | 西脇 智 | 小田 良子 (事務) |
| 岩本 長造 | 西脇 福太郎 | 大森 良子 |
| 大塚 伊和雄 | 長谷川 国一 | 篠原 スミ子 |
| 大西 真一 | 林 広 | 白井 テル |
| 業天 勝 | 樋口 武雄 | 関 展子 |
| 香西 正晴 | 牧 利光 | 谷生 八重子 |
| 斉藤 菊男 | 造酒 茂 | 筒井 シゲミ |
| 佐藤 義顕 | 三谷 美喜蔵 | 西岡 シゲ子 |
| 高橋 守 | 矢野 賀寿美 | 西岡 シゲミ |
| 田淵 裕司 | 山崎 秀市 | 西岡 フジエ |
| 鳥取 義雄 | 山脇 高明 | 西脇 千春 |
| 中尾 康顕 | 横内 正弘 | 馬淵 加代子 |
| | | 吉田 エミ子 |

— 整理作業に従事した人々 —

| | | |
|-------|--------|-------|
| 池田 由美 | 武内 ゆかり | 細川 倫子 |
| 香川 偉子 | 長谷川 郁子 | 真井 典子 |
| 山先 陽子 | 林 肇子 | 横田 周子 |
| 鎌谷 周子 | 藤田 由紀子 | |



第43図 整理作業風景

Ⅲ 四ツ塚2号墳

1. 調査の経過

四ツ塚古墳群は、高瀬・豊中地区（三豊平野北部地域）の東辺を形成する山塊の一つである標高184mの鳥越山から、北北西方向に派生する尾根の頂部及び斜面部に位置する。古墳群の立地地点は、標高79～84mを測り、三豊平野北部地域を一望できる好所である。

調査は、昭和57年度から開始された四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の一環として、58年度末から59年度にまたがって実施した。

調査対象となった四ツ塚古墳群は、昭和30年代半ば頃に、この一帯が果樹園として造成された折に破壊されており、調査前の地表観察では、その痕跡を明らかにすることは出来なかった。

しかし、比較的近年に破壊を受けていることから、旧地権者及び周辺住民の記憶に残っており、第6図のような分布状況の復元が可能になった。

このように聞き取り調査の結果、古墳群の名称通り、四ツ塚古墳群は近年の破壊前には4基の円墳(?)で構成されていたらしく、この内、工事対象地区内には1基のみ存在していることが想定されたが、これを検証及び他の遺構の存在の有無を確認する目的で、2方向の尾根稜線上にトレンチを設定し調査を開始した。この結果、当初の想定通り、第1トレンチ内で古墳の周溝が確認されたのみで、耕作土中に含まれる須恵器片を除けば、無遺構、無遺物であった。

調査は、トレンチ部分で検出された周溝の全容を明らかにし、古墳及び主体部全体の形状を把握する目的で、トレンチ周辺部を順次拡張調査した。この結果、果樹園（ぶどう棚）造成に伴い、ぶどう棚に堆肥を入れるため、一定間隔で重機による溝が掘られており、遺構の大半が失われた状況が把握され、残存状況の確認のみに終わった。

また、墓道部が検出されたものの、南東方向の調査範囲外に続いており、その形状の全体を把握するには至らなかった。

調査の経過については、日誌で略述する。

調査日誌抄

昭和59年

3月27日 第1トレンチを3m幅で設定，表土剥ぎを開始。昭和58年度事業を終了する。

4月16日 昭和59年度調査を開始。第1トレンチ内で，古墳周溝の一部を確認。周溝の全容を確認するため第1トレンチを拡張する。第2トレンチを設定，表土剥ぎを開始する。

4月17日 第2トレンチの調査を継続。古墳推定範囲の調査区を順次拡張。

4月18日 第1・第2トレンチで遺構が確認できなかった部分を埋め戻す。古墳推定範囲の基準杭を設置。

4月23日 周溝部分の調査。この結果，埋土は一層で地山面への掘り込みが確認される。須恵器片の集中部分を検出。

4月26日 須恵器片の集中層は，墓土埋土であることを確認。

4月27日 石室推定部の精査を開始する。

5月4日 周溝部分を完掘し実測する。

5月8日 石室推定部の精査を継続。

5月9日 石室奥壁の石材を一石のみ検出。他の石材は，ぶどう棚を設置した段階で除去されたと考えられる。

5月10日 平面・土層実測を終了する。

5月11日 後片付け。

5月14日 埋め戻し。

調査参加者 篠原スミ子，関 展子，馬淵加代子，白井テル，山脇高明

整理参加者 鎌谷周子，林 肇子，細川倫子，横田周子，池田由美，山先陽子



第1図 羨道部遺物出土状況



第2図 トレンチ設定風景



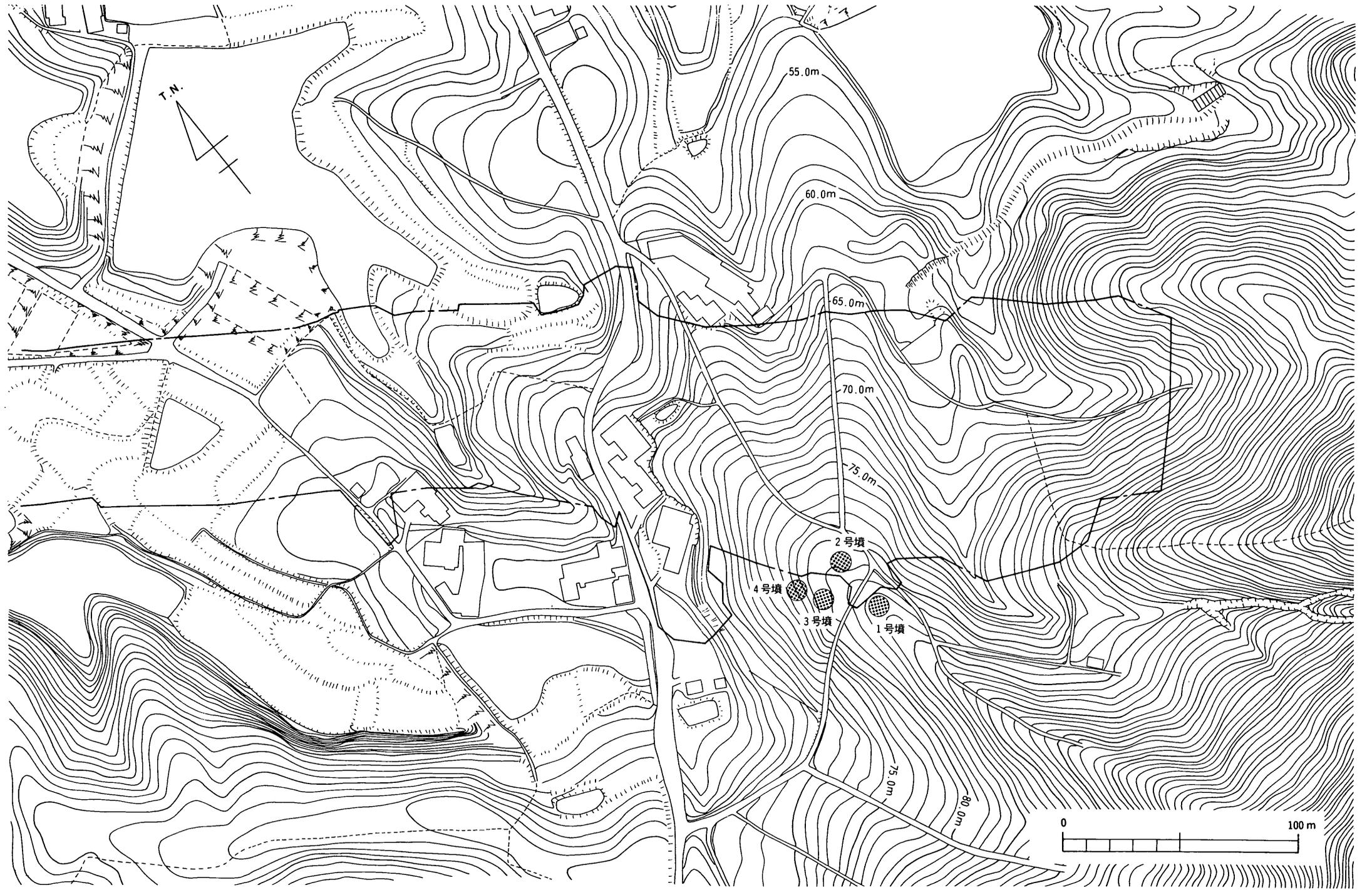
第3図 調査区全景



第4図 調査風景（畦畔除去状況）



第5図 奥壁検出状況



第6図 四ツ塚古墳群地形図



第7図 調査前の状況（東から）



第8図 調査前の状況（南から）



第9図 第1トレンチ設定状況



第10図 第2トレンチ設定状況

2. 調査の成果

(1) トレンチ部の概要

調査は、古墳の所在が想定される尾根の平坦面及びこれから北と北北東に派生する2方向の尾根稜線を対象にして、トレンチを設定した。

第1トレンチは、幅3m、長さ65m（面積195m²）で設定・調査した。

土層は、第1層表土（腐植土層）、第2層暗黄土色砂質土層（耕作土）、第3層明黄白色粘土（地山）で、これ以外にぶどう棚堆肥用掘り方の埋土がある。

確認されたのは、古墳周溝と考えられる最大幅1.4m、検出幅約50cm、深さ30cmを測る孤状の溝のみで、他の遺構は確認されなかった。

第2トレンチは、幅1m、長さ60m（面積60m²）で設定・調査した。

土層は第1トレンチ同様で、遺構は確認されていない。

この結果、第1トレンチで検出された周溝部分を中心に、古墳全体を明らかにするため、第1トレンチの東西部分の拡張を行なった。拡張部分の面積は、122.7m²で、全体で377.7m²の実掘である。

(2) 土層

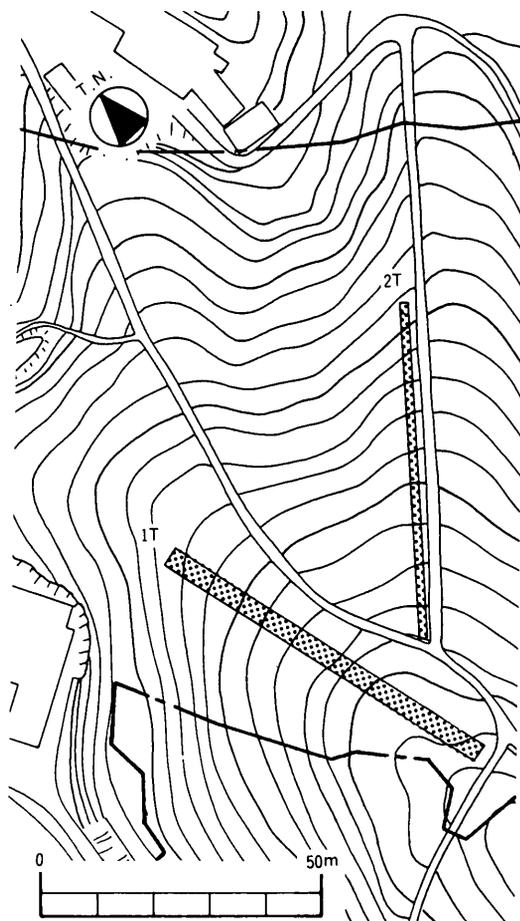
古墳検出部の基本的な土層は、次の通りである。

- 第1層 表土（腐植土層）
- 第2層 暗黄土色砂質土層（耕作土）
- 第3層 暗黄土色粘質土層（旧耕作土か？）
- 第4層 第6層と同色、やや砂質っぽい
- 第5層 第6層と同色、やや汚れている
- 第6層 黄白色粘質土層
- 第7層 明黄白色粘土（地山）
- 第8層 灰白色砂質土層（周溝埋土）

第1～3層までは、果樹園造成に伴う攪乱層である。

第4～6層は、地山か盛土かの区分が明確にしないが、土層そのものがあまり汚れておらず、地山の範疇で考えられるかもしれない。

周溝は、調査時の所見では、第4～5層から



第11図 トレンチ配置図

掘り込まれており、断面は、不定形な逆台形状を呈す。

埋土は、灰白色砂質土層単一で長年の自然埋没の状況は示さない。しかし、一時に埋められた土と仮定するには、土が汚れておらず、これも否定的である。

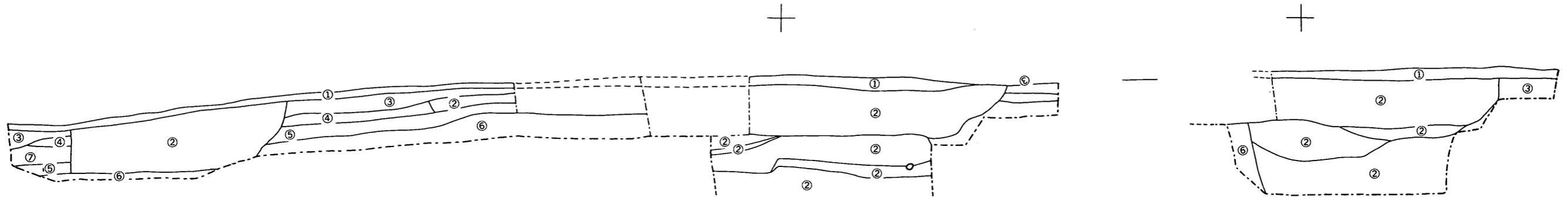
ぶどう棚の溝は、第2層上面から掘り込まれており、この地の開墾が、人力による畑地開墾の後に重機によるぶどう棚設置へと移行したことが伺われる。

石室掘り方は、掘り方にぶどう棚の掘り方が重複する形で検出され、また、掘り方内埋土にも攪乱が認められることから、この重機利用以前の開墾時に石室石材を抜き取ったと考えられる。特に玄室部は、床面まで攪乱を受けており、埋葬時の痕跡は、その断片すらも検出されなかった。

羨道推定部及び墓道部は、暗茶褐色砂質硬土が堆積・埋没しており、この土層中から多くの須恵器片等の出土を見た。

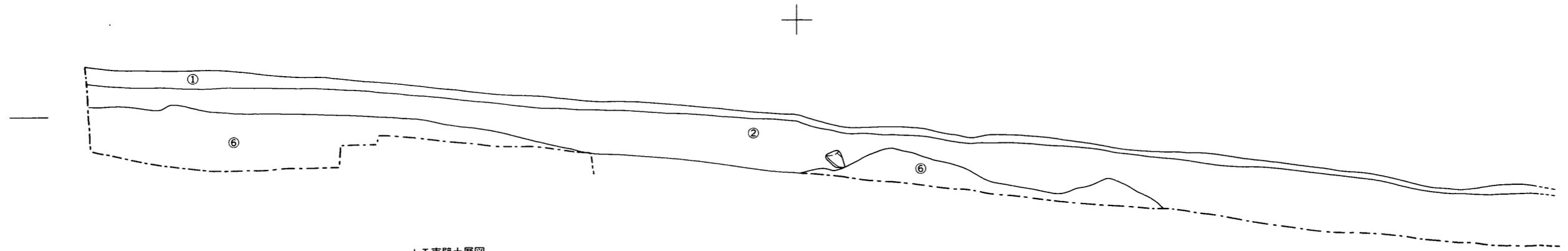


第12図 玄室部埋土



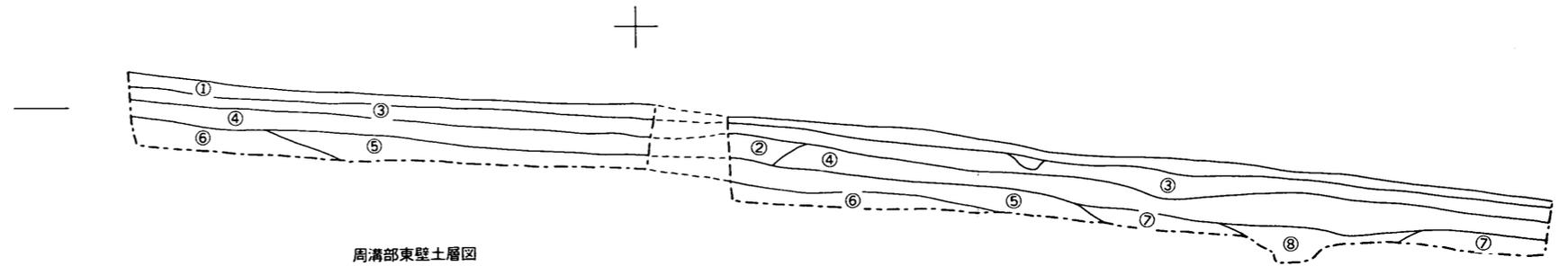
センターポイント南壁土層図

玄室断ち割り南壁土層図



IT東壁土層図

- ① 腐植土層
- ② 攪乱層
- ③ 暗黄色砂質土層 (耕作土)
- ④ 暗黄色粘質土層 (耕作土?)
- ⑤ 黄白色粘質土層
- ⑥ 明黄白色粘土 (地山)
- ⑦ ⑤と同色・同質 (やや汚れている)
- ⑧ 灰白色砂質土層 (周溝埋土)



周溝部東壁土層図

第13図 土層実測図

(3) 遺構

検出された遺構は、奥壁石材一石を含む石室掘り方と墓道、周溝の一部である。

石室部及び墓道部の掘り方検出長は、上部にぶどう棚の掘り方が重複し、破壊を受けているものの、上場で全長12.26m、奥壁部幅2.30m、玄室部最大幅3.0m、羨道推定部幅1.70mを測る。

一石のみ検出された奥壁石材は、幅1.1m、高さ0.80m、厚み0.46mを測り、背面の石室掘り方にはほぼ密着する。奥壁は、奥壁に向かって左側で掘り方と石材間で約40cm、右側で約80cmの空間があり、左側は左側壁の石材がこの幅に相当し、右側では、検出石材以外に、幅40cm前後の石材が奥壁の一部を構成していたと考えられる。

玄室部両側壁は、根石石材の抜き取り穴すら明確には確認できなかった。このことから、掘り方底面の平坦面上に石材を積み重ね、石室を構築したと推定しうが、掘り方底面自体の削平も考慮しなければならない状況にあるので、断定はできない。この結果、玄室・羨道の区分は明確にしえないが、掘り方の形状から見て、右側の石室掘り方内のテラスが始まる、センターポイントから北へ40cmの地点が玄門部に相当する可能性が高いと推定している。

また、羨道部は、このテラスともう一段低い内側のテラスの交差する点、センターポイントから北へ4mの位置がこれに相当するものと理解できる。

これを前提として石室規模を復元すれば、玄室掘り方長は約3mで、玄室長は2.6m(奥壁石材の厚みを引く)、羨道部長3.6mの計6.2mを測り、側壁石材を想定した玄室幅は約1.6m、羨道部幅は約1.2mを測る右片袖式石室で、開口方向はN-7°-Wと考えられる。

墓道部は、検出全長5.6mで、最大幅1.1m、深さ約20cmを測る逆台形状の断面形を呈する。

羨門部からゆるやかな弧を描き、調査区北端付近で屈曲して調査区外に伸びるため、全体形状は明らかにすることができなかったが、屈曲部付近での深さが約5cmと浅くなるため、検出長からあまり長くなることはなく、徐々に消滅するものと考えうる。

次に周溝は、検出長約6.8m、最大幅1.4m、深さ約30cmを測り弧状を描いて、墓道部に接続している。

東端はぶどう棚の掘り方によって破壊されており、他の調査区内では検出されていない。しかし、全体形状は、墳丘の低い側で検出されたことから考えれば、墳裾を全周していた可能性が高い。

埋土は墓道埋土と明瞭に区分され、両者の切り合い関係は墓道部の方が後に埋没したことが明瞭である。

以上のことから、四ツ塚2号墳の規模は、玄室中心部が墳丘の中心部に重なることを前提とした場合、径約10m、周溝部を基準に考えれば径約14mの円墳と考えられる。

(4) 遺物の出土状況

遺物は大きく分けて羨道部と墓道部の2ヶ所で原位置を保った状況で検出された。

この他、玄室部は、床面まで攪乱が及び、攪乱土中から耳環及び須恵器片が検出されたのみで

ある。また、周溝部でも壺・甕の体部片を若干検出したが、原位置を保っている状況にはなかった。

羨道部でも、須恵器片・土師器片の出土が断片的に見られ、一部攪乱を受けている状況も見られるが、多くは、原位置を保った状況での出土である。

また、羨道部分では、拳大から人頭大の礫が多く検出されている。これらの石材は、本来礫床もしくは棺台・羨道側壁の一部として利用されたと考えられるが、その多くは、原位置を保っていないと考えられ、本来の状況は把握できていない。

第23図は、羨道部で検出された土器群の出土状況図で、原位置を保っていると考えられる。形態は、最下位に須恵器坏身を設置し、これに斜めに坏蓋をかぶせる。また、坏蓋に相対する形で土師器の坏を裏返してかぶせ、最上位に台付椀を寝かせる形で載せている。

この状況が、何を示す状況にあるかは即断できないが、最下位の坏身中に何らかの内容物が入れられており、これを儀礼的に蓋する形態であると理解できる。これは、坏の蓋・身での密封化を計っていない点に作為が見られる。なお、坏身の内容物は不明であり、その痕跡をとどめないことから、液体状のものであった可能性が高い。

ここで特筆すべきことは、このセット中に含まれる土師器坏の他、隣接して土師器椀が検出されていることである。

他ではあまり例を見ないが、四ツ塚2号墳の副葬品に占める用器の割合の中で、土師器の割合が高い。

次に墓道部の遺物は、その多くが破片であり、墓道埋土中に含まれて検出された。埋土は、暗茶褐色砂質硬土で、攪乱の痕跡は認められない。

検出破片のすべてが接合できた訳ではないが、一部接合可能なものもあった。

提瓶は、(欠落する部分は多いが)2個体分の破片が集中して検出され、甕は約2.5m離れて接合している。

このような出土状況から判断して、須恵器等をあらかじめ打ち壊して墓道を埋める行為の中で使用したものと理解している。

ここに含まれる須恵器は、第30図・第31図に掲載した以外に壺、甕、坏などが見られる。

なお、完形の坏身が1点出土しており、意識的に置かれたものと判断される。こうした例は、昭和54年に調査された丸亀市青ノ山7号墳でも認められることから、この時代の一部地域に共通する行為である可能性もある。

以上のように、玄室内の攪乱が著しく、埋葬主体部における遺物のあり方は不明であったが、羨道部に見られる石材の散乱と遺物の出土状況から、羨道部埋葬の可能性をも考える材料になる可能性がある。

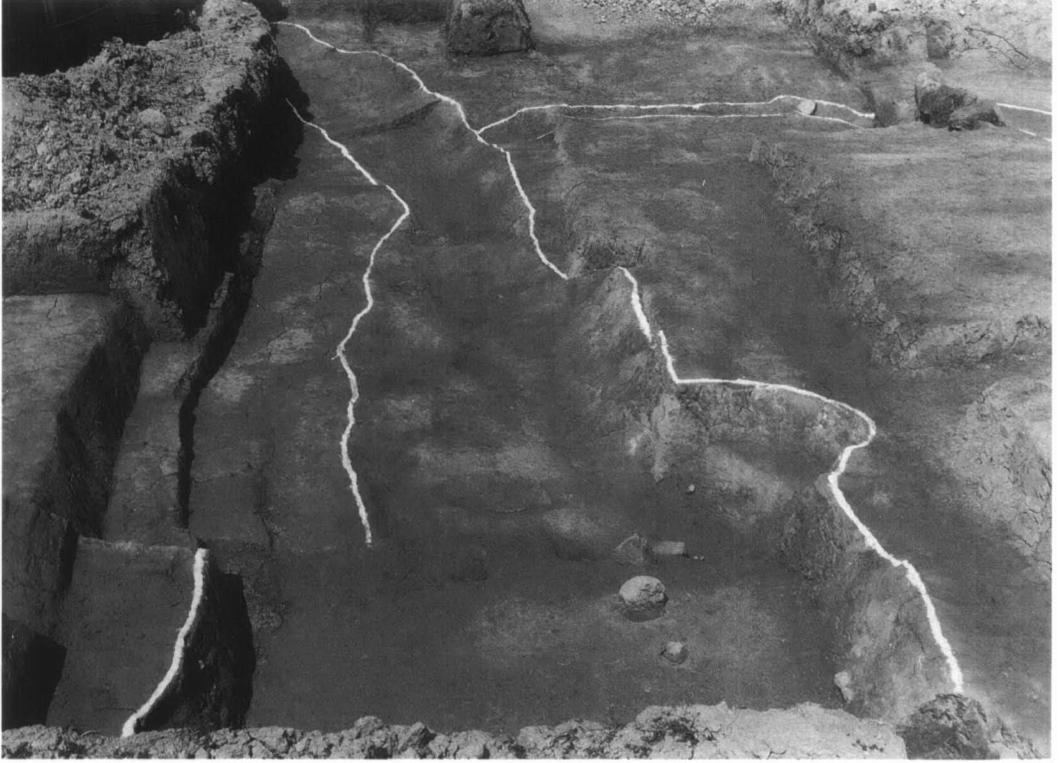
また、墓道の検出と、これに伴う遺物の出土状況は、墓道の利用法とこれに伴う儀礼の一端を示す資料と考えるが、出土遺物が少なく即断はできない。



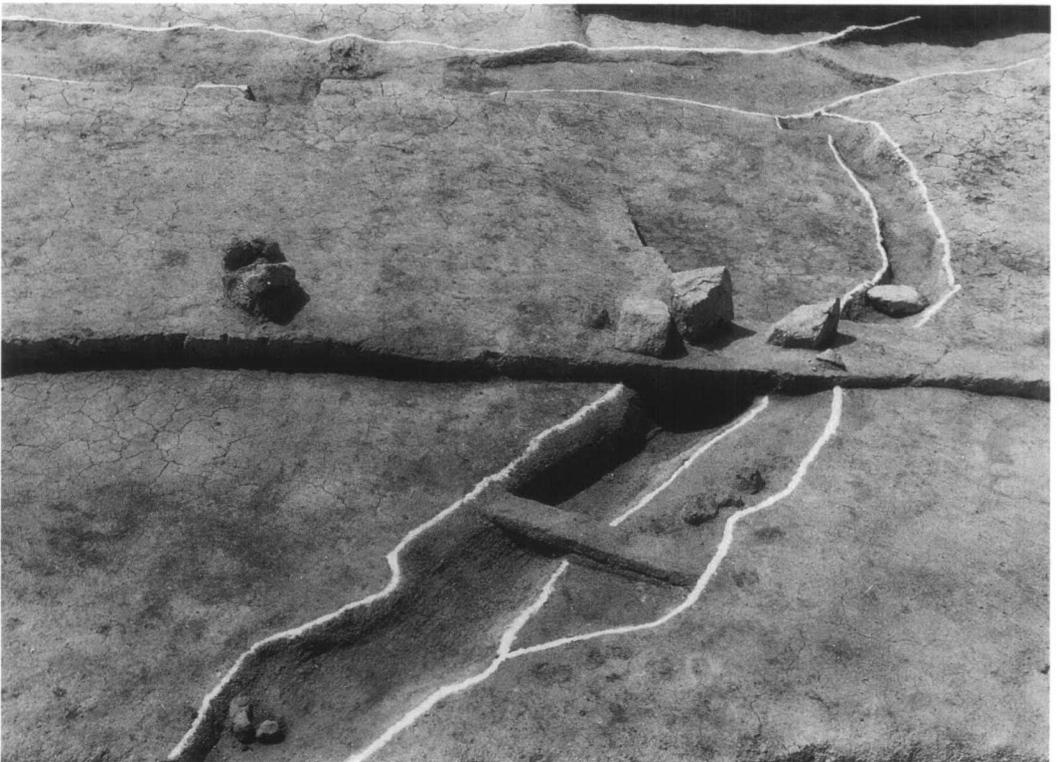
第14図 検出遺構全景（北から）



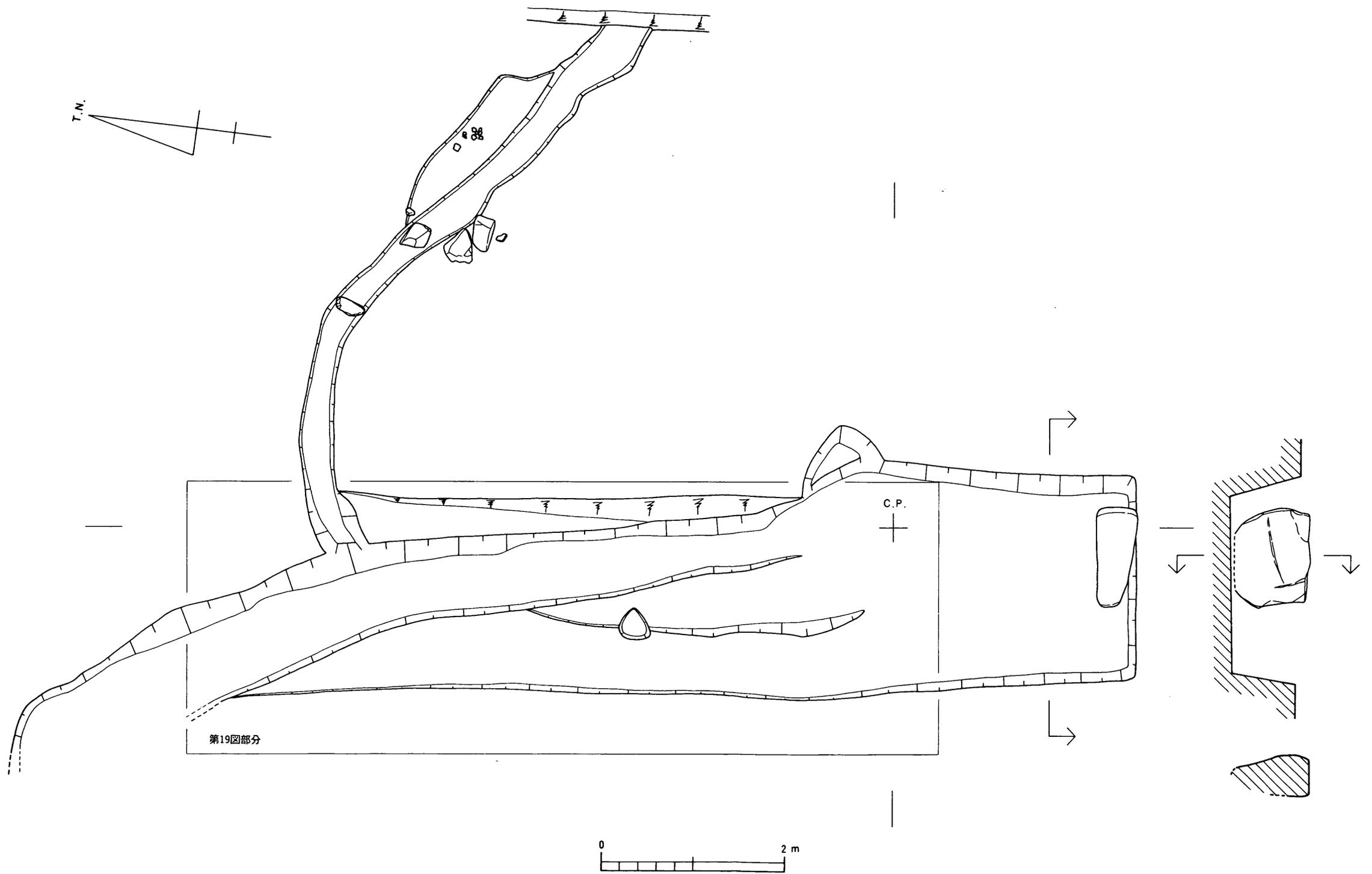
第15図 検出遺構全景（東から）



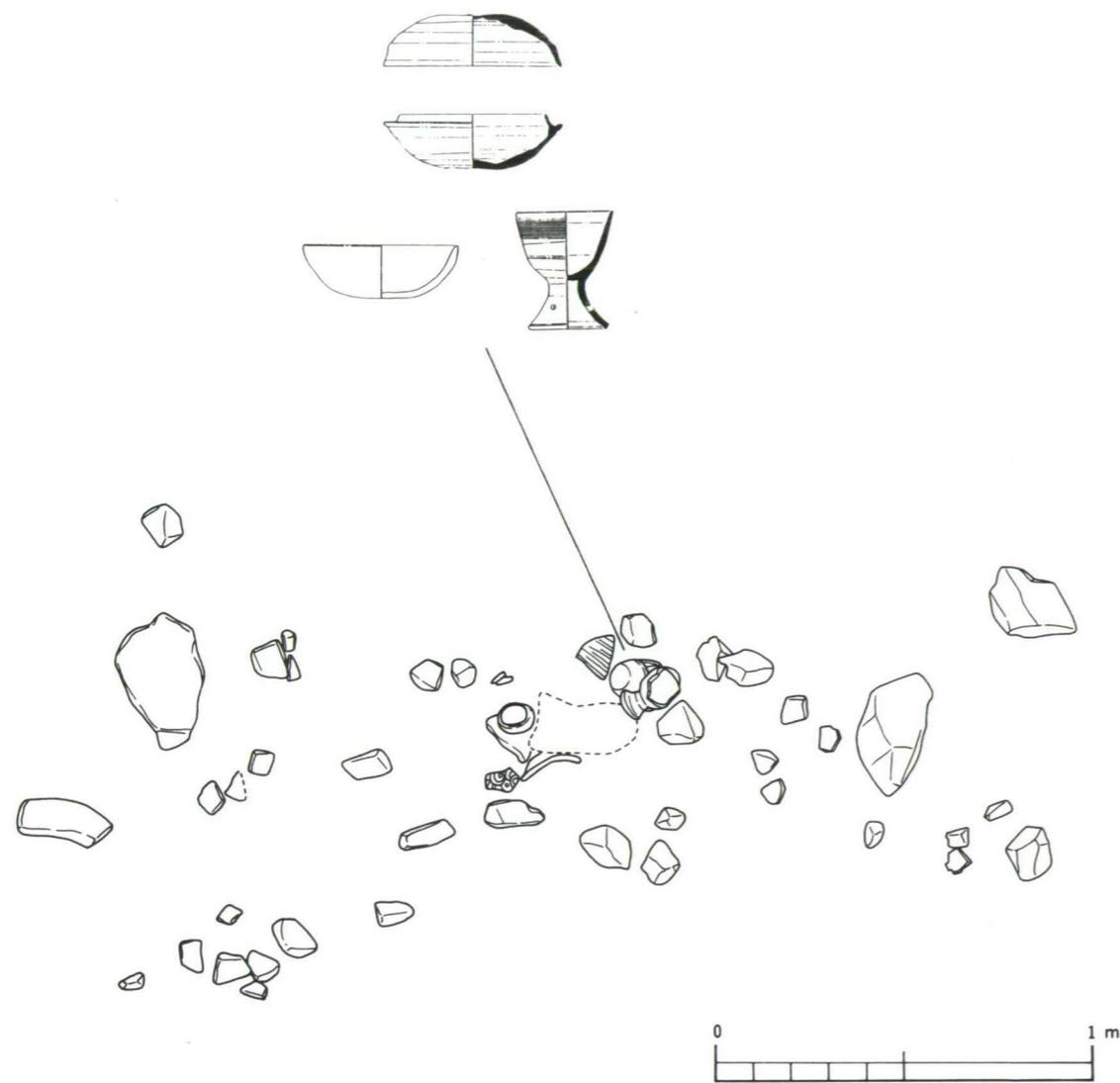
第16図 石室部・墓道部全景（南から）



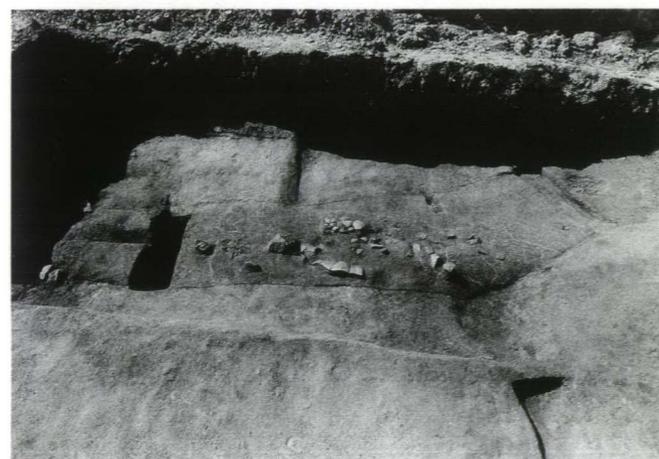
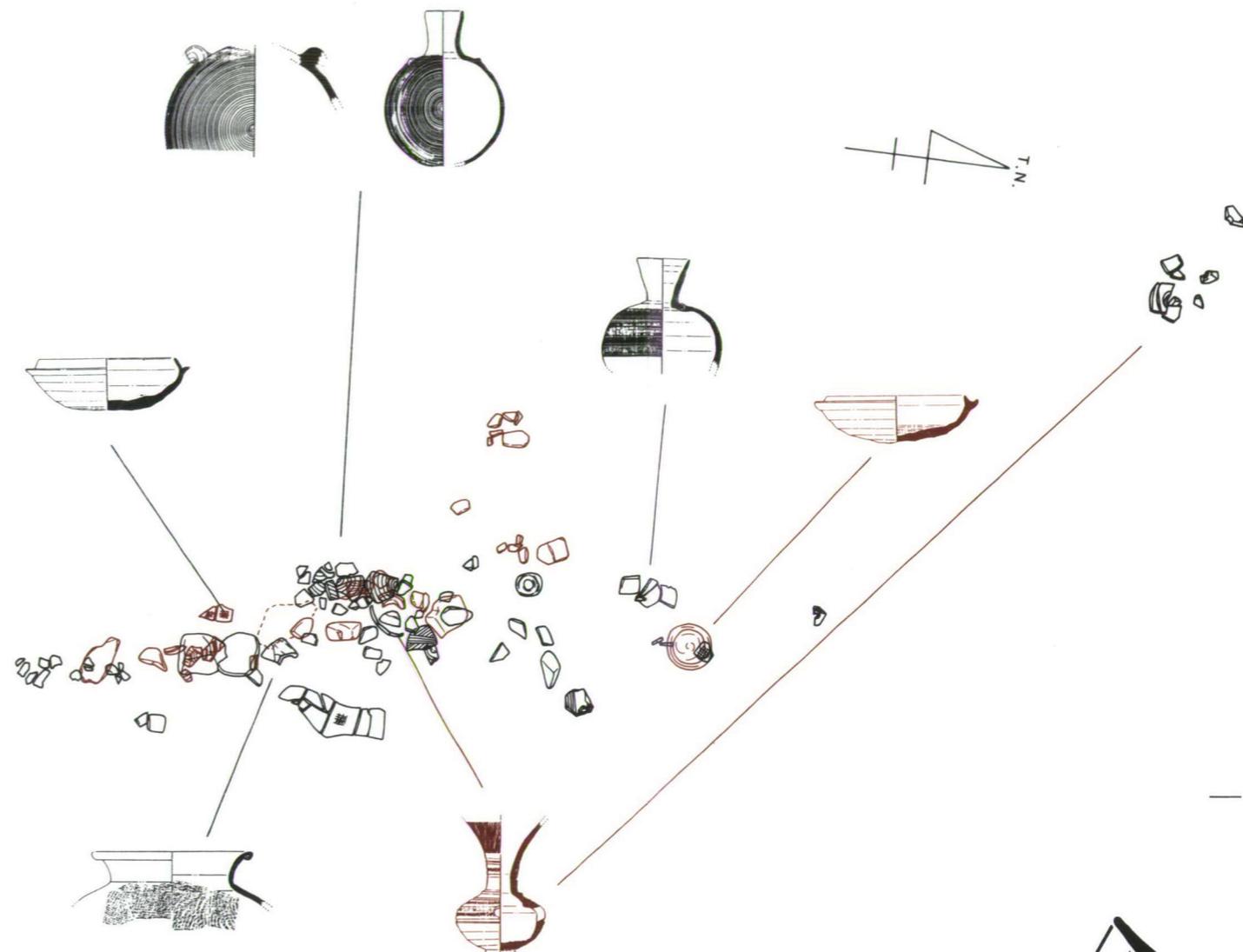
第17図 周溝全景（東から）



第18図 遺構実測図



第19図 遺物出土状況図



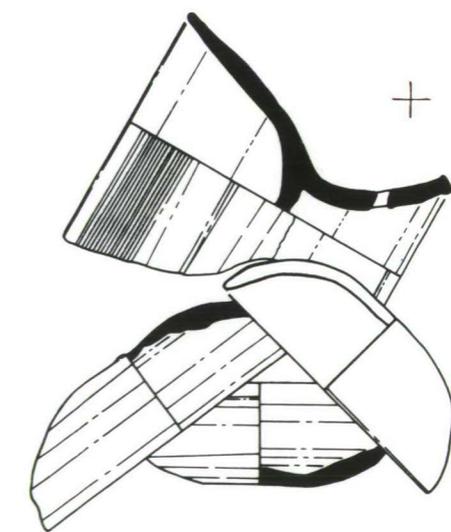
第20図 墓道部遺物出土状況 (東から)



第21図 墓道部遺物出土状況 (西から)



第22図 墓道部遺物出土状況 (南から)



第23図 羨道部土器集中出土状況模式図



第24図 羨道部遺物出土状況（南から）



第26図 羨道部遺物出土状況近景



第27図 羨道部遺物出土状況近景



第25図 羨道部遺物出土状況（北から）



第28図 羨道部遺物出土状況近景

3. 遺物について

調査で出土した遺物は、第29図・第30図・第31図に示した。これ以外に、図化不能であった壺・甕の体部片や土師器片、錆が著しく名称が特定できない鉄器片などがある。

第29図は、耳環である。形状はやや六角形に近い円形を呈する径0.75cmの銅の棒を曲げ、長径2.8cm、短径2.6cmの環状をなす。間隙は0.15cmを測り、表面は金メッキを施している。

第30図1～4は須恵器坏身・蓋で、いずれも完形である。この内、1・2と7・11が羨道内でセットで検出された例である。1～4の内、4がやや古手の様相が見られるものの同時期の所産と考えていい。この4が、墓道内検出のものである。

5・6は、攪乱土中出土の坏身・蓋で、1～4に比べて後出するものである。遺構の出土遺物では同時期のものが認められないため、他の古墳に伴うものか、古墳周辺にこの時期の遺構の存在を考えるかであろう。

7は土師器の椀で、内外面の調整が磨滅のため不鮮明ではあるが、1～4と同時期の資料と考える。

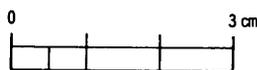
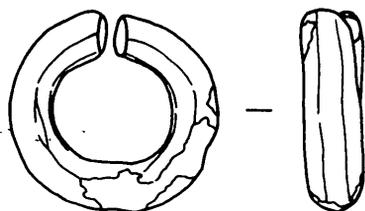
8～10は台付甕であり、同一個体と考えられるが接合はしていない。10の底径はやや大きすぎ別個体の可能性もある。

11は、台付鉢である。鉢部は外上方へ伸び、脚部は「ハ」の字形に開いて、端部はつま先上がりになる。

12は壺で、頸部が細く、口縁部は外上方に伸びる。口縁部の形状は平瓶の口縁部に近いが、断定はできない。

13・14は甕で、口縁部は外彎して伸び端部は玉縁状に丸くなって終る。13・14とも同一形態を呈する。

15・16は提瓶であるが、形態差が見られる。

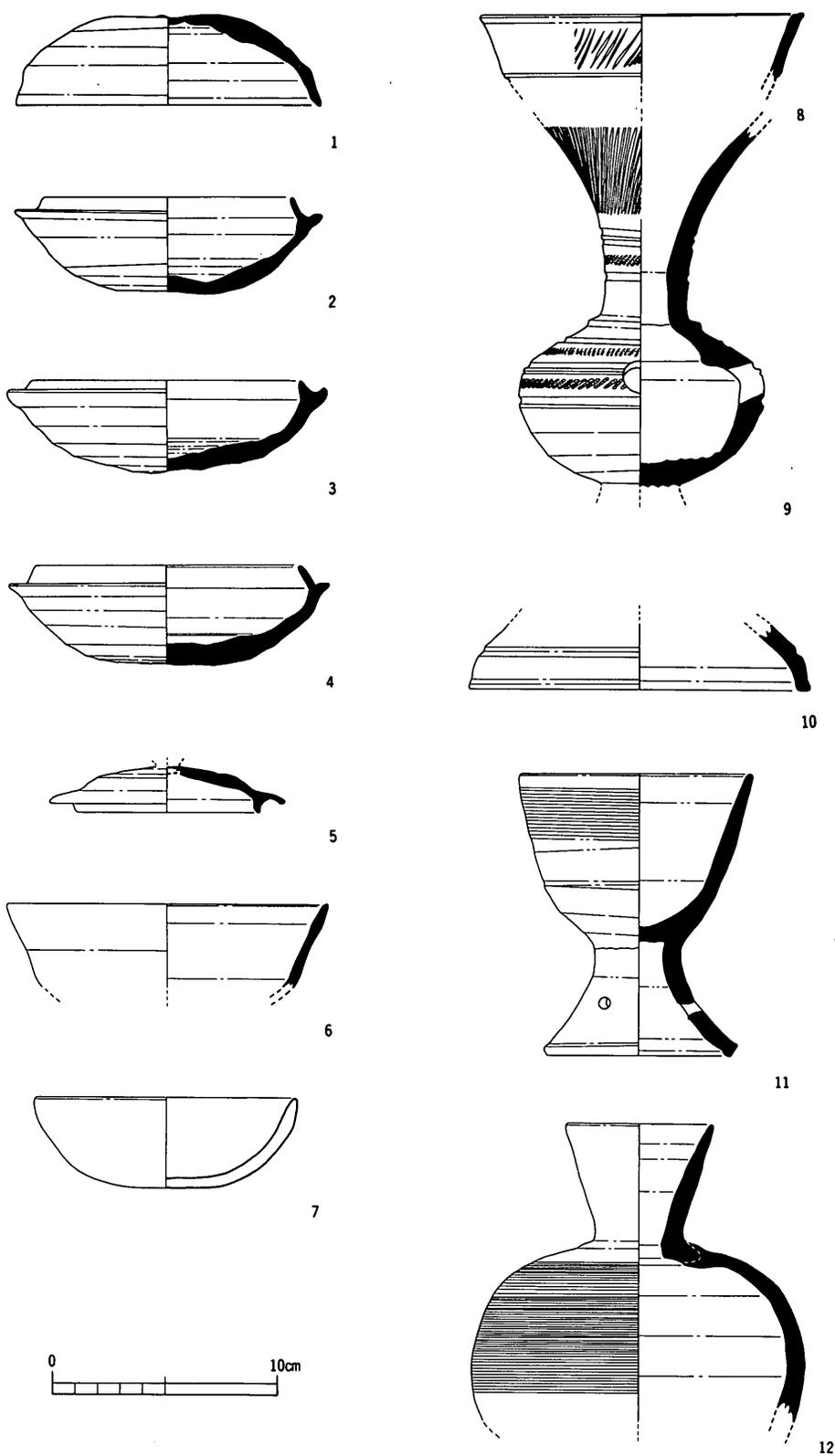


第29図 耳環実測図

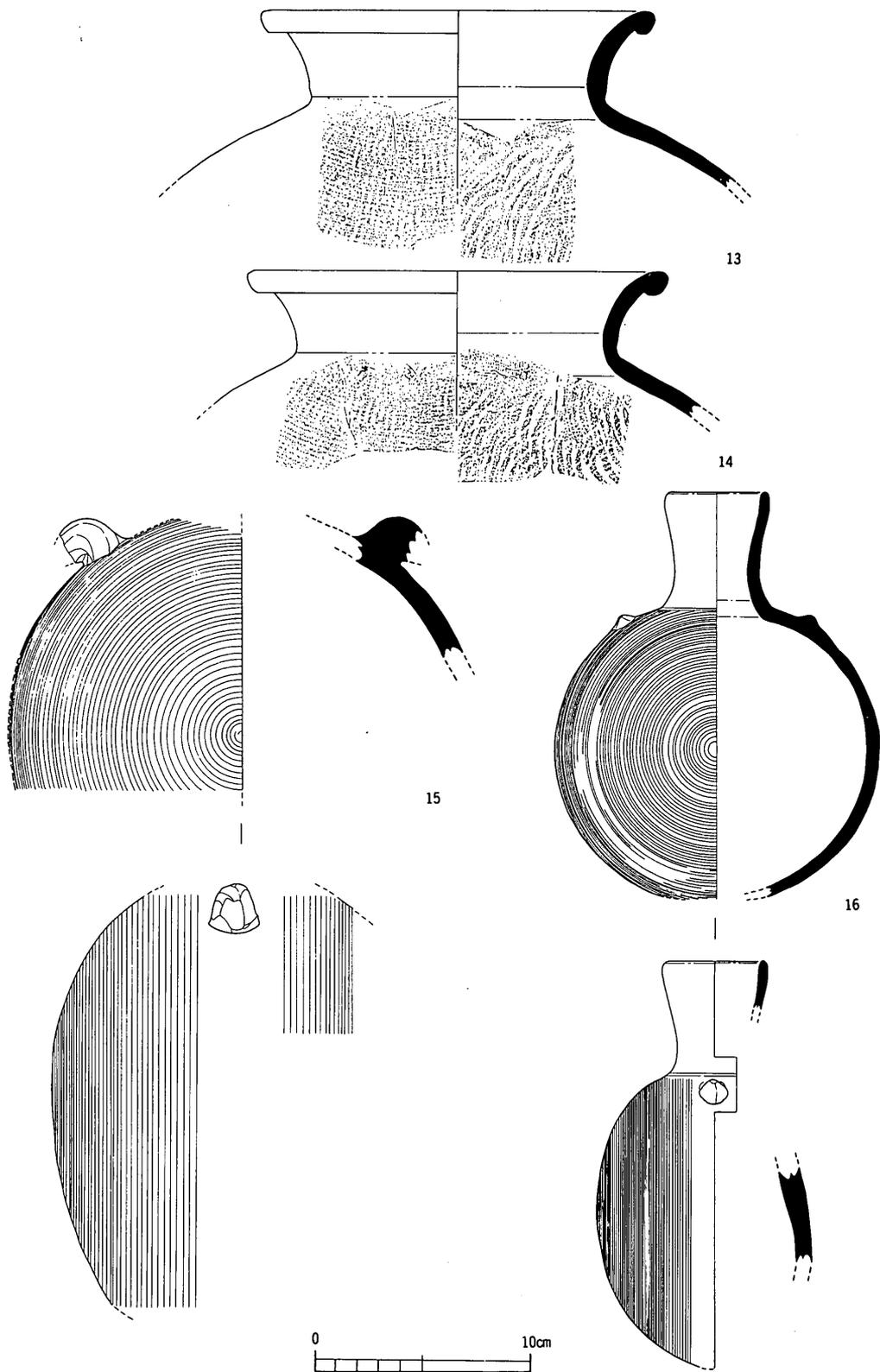
15は、体部も大きく、大形の提瓶と考えられ、把手は翼状を呈する。

16は、体部が小さく小形の部類に属する。また、把手は小突起状に形骸化し、15に比べて明らかに形式的に後出するものである。

以上のように、攪乱によって遺物出土量が少ないものの、5・6を除けばほぼ同一時期の所産と考えられる。



第30図 遺物実測図 (1)

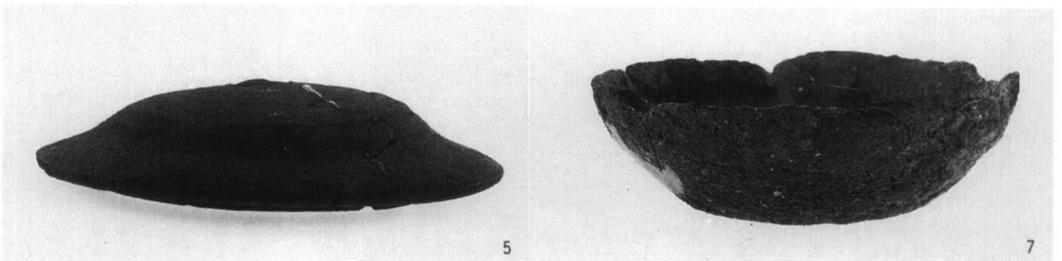
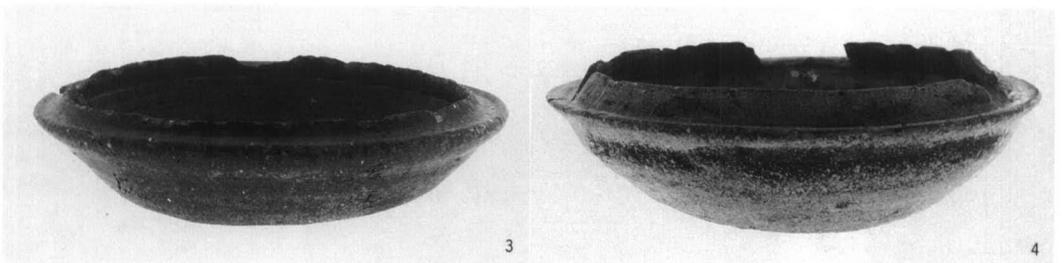
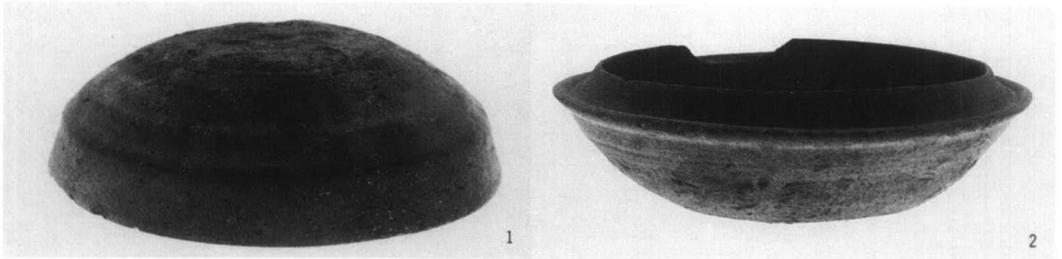
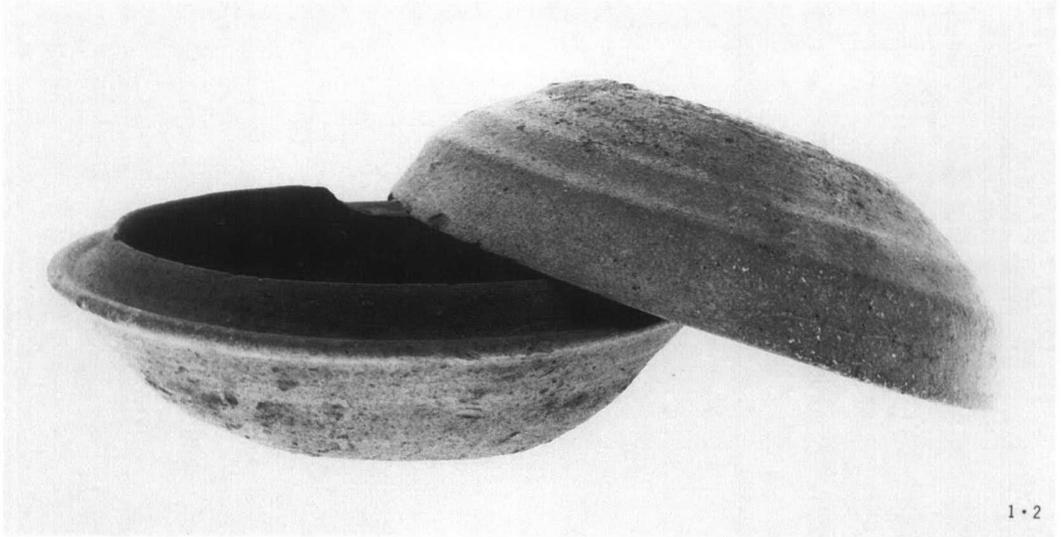


第31図 遺物実測図 (2)

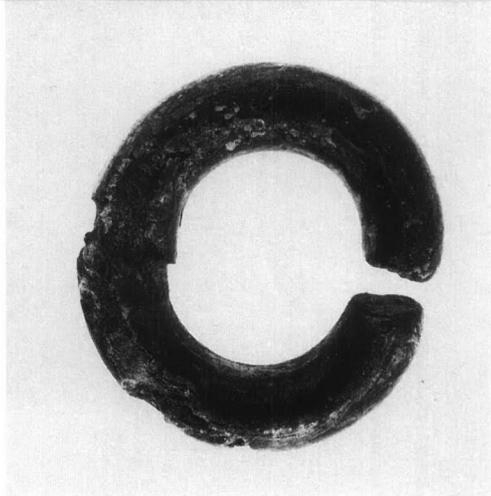
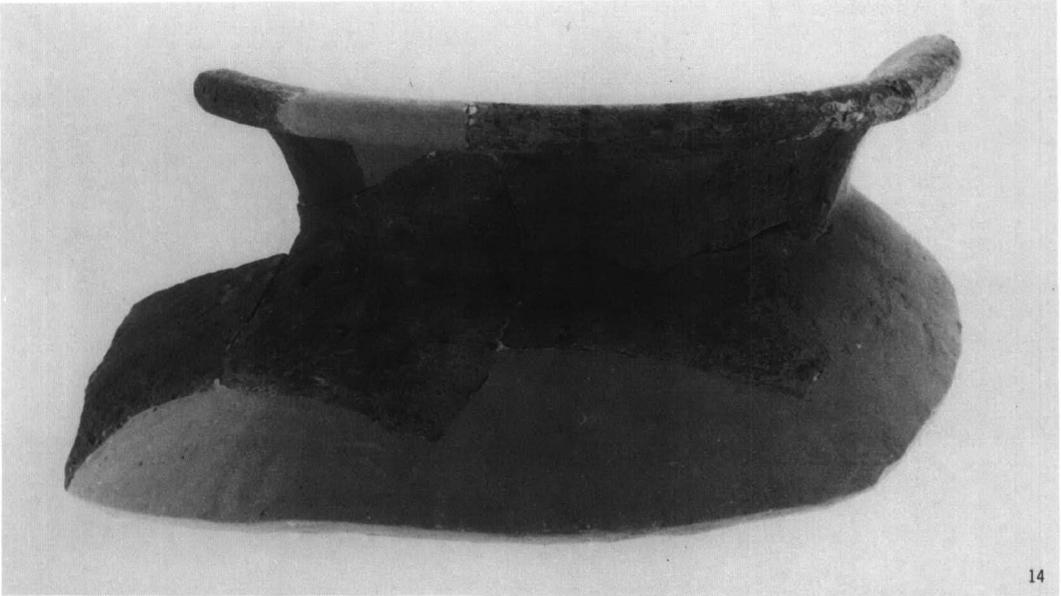
第1表 遺物観察表

| 挿図 番号 | 出土遺構 | 器種 | 残存率 | 法量 (cm) | | | 調 整 | | 備 考 |
|----------|----------------------------------|-----|-----------------|---------|------|------|---|--|---------------------------|
| | | | | 口径 | 器高 | 底径 | 内 面 | 外 面 | |
| 1 | 墓道部 No.8 | 杯・蓋 | 完形 | 13.4 | 3.8 | — | 回転ナデ 指頭圧痕・仕上げナ デ(頂部) | 回転ナデ ヘラ切り・指頭圧痕 (頂部) | |
| 2 | 墓道部 No.8 | 杯・身 | 完形 | 10.9 | 4.1 | — | 回転ナデ 指頭圧痕・仕上げナ デ(頂部) | 回転ナデ 回転ヘラ削り(左) | |
| 3 | — | 杯・身 | 完形 | 11.8 | 4.0 | — | 回転ナデ | 回転ナデ 回転ヘラ削り(右) | |
| 4 | 墓道部 No.6 | 杯・身 | 完形 | 11.6 | 4.4 | — | 回転ナデ | 回転ナデ 回転ヘラ削り(左) | 外面部分的に自然 釉 |
| 5 | — | 杯・身 | 約1/2 | 8.0 | — | — | 回転ナデ | 回転ナデ 回転ヘラ削り(右) | つまみの跡残る。 |
| 6 | — | 杯・身 | 1/12 | 14.1 | — | — | 回転ナデ | 回転ナデ | |
| 7 | — | 杯・身 | 完形 | 11.4 | 4.0 | — | ナデ(一部板ナデ) | 磨滅して不明 | 土師器 |
| 8 | — | 甗 | — | 14.2 | — | — | 回転ナデ | 回転ナデ クシガキ文(口縁部) | 9・10と同一個体 |
| 9 | 墓道部 No.1 墓道部 No.2 墓道部 No.3 | 甗 | — | — | — | — | 回転ナデ シボリ目(頸部) 接合時の指頭圧痕・ 回転ナデ(口頸部と 胴部の境) | 回転ナデ クシガキ文・クシガ キ列点文(頸部・胴 部) 回転ヘラ削り(左)・ 回転ナデ | 8・10と同一個体 |
| 10 | 墓道部 No.4 | 甗 | — | — | — | 15.0 | 回転ナデ | 回転ナデ | 8・9と同一個体 |
| 11 | 墓道部 No.8 | 台付鉢 | 完形 | 10.1 | 12.3 | 8.0 | 回転ナデ | 回転ナデ クシ目(杯部 口縁 〜体部の一部) 回転ヘラ削り(左)・ 回転ナデ | 透し三方(脚部) 外面部分的に自然 釉 |
| 12 | 墓道部 No.3 | 壺 | 約2/3 (胴部から上) | 6.4 | — | — | 回転ナデ 口頸部と胴部の接合 痕有 | 回転ナデ クシ目(胴部 上半 分) | 外面部分的に自然 釉 |
| 13 | 玄室攪乱層中 | 甗 | 約1/4 | 17.1 | — | — | 回転ナデ(口縁〜頸 部) タタキ目(青海波) (胴部) | 回転ナデ(口縁〜頸 部) タタキ目(格子目)・ 回転ナデ(胴部) | 口縁端部折り曲げ |
| 14 | 墓道部 No.6 | 甗 | 2/5 | 18.6 | — | — | 回転ナデ(口縁〜頸 部) タタキ(青海波)・回 転ナデ(胴部) | 回転ナデ(口縁〜頸 部) タタキ(格子目)・回 転ナデ(胴部) | 口縁端部折り曲げ |
| 15 | 墓道部 No.4 | 提瓶 | 約1/3 | — | — | — | 指頭圧痕・回転ナデ 円盤充填(胴部) | 回転ナデ・クシ目 | 取手有 外面部分的に自然 釉 |
| 16 | 墓道部 No.4 | 提瓶 | 約1/2 | 4.2 | — | — | 回転ナデ 円盤充填(胴部) 接合痕(口頸部と胴 部の境) | 回転ナデ クシ目(胴部) | 取手有 外面部分的に自然 釉 |

※ 回転ヘラ削りの方向は、正位置で見た時の砂粒の動いた方向を示している。



第32図 遺物写真 (1)



第33図 遺物写真 (2)

4. まとめ

四ツ塚2号墳の調査成果は、前節までに記述した通りである。

要約すれば、径10～14mの円墳で、片袖形横穴式石室を主体部とし、周溝を伴う。出土須恵器から年代は6世紀末頃に比定される。

今回の調査では、四ツ塚古墳群4基中の1基についてのみ調査を実施したが、石室石材が抜き取られていたことから、石室の形態・構築技術など古墳群としての特色を抽出することはできなかった。ただ、2号墳の概要からして、6世紀末を中心とする時期の古墳群で、その立地状況から見て1号墳から4号墳の順に築造されたと考えられる。また、2号墳の墓道は検出状況から4号墳方向に伸びると考えられ、各墳の墓道に通ずる幹道は、古墳群の立地する尾根の西側斜面を下るものと推定される。

次に、古墳築造集団の生活圏についてであるが、周辺で、この時期の遺跡は判明しておらず、単に立地の上から推定すれば、古墳群の所在する尾根の西側尾根の先端に広がる平坦地か、これよりまだ標高が下がる地点と考えられるが、基本的には、古墳群に比較的近距离に位置するものと考えられる。このことは、大門遺跡と利生寺古墳群の位置関係を前提としており、地形的に類似性が見られるこの地域に普遍化しうるのでないだろうか。

三豊平野の中では、観音寺市母神山古墳群・大野原町縁塚古墳群などに見られる後期古墳の群集は、財田川・柞田川などの大河川流域に伴う形態と考えられ、当該北部地域など通常の小河川流域では、5基前後で構成される古墳群が多く見られる。

母神山古墳群でも、各支群単位では小河川流域と同様の状況も認められるが、墓地域内での造墓活動を順守せざるをえない状況も考えられ、両者の背景の差に興味を持たれるところである。

本報告書に掲載した財田古墳、四ツ塚2号墳とも、三豊平野北部地域の小河川流域に営まれており、この地域の三豊平野内に占める位置付けや、他地域との比較による地域的特色を考える上での貴重な資料になったが、把握できた内容が不十分であるため、今後の検討を待たねばならない。

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第四冊

財田古墳群
四ツ塚2号墳

昭和62年10月31日 発行

編集 香川県教育委員会事務局文化行政課
高松市番町4丁目1番10号
電話 (0878)31-1111

発行 香川県教育委員会
日本道路公団

印刷 (有)成光社

